

671
64



0006675000

0006675-000

671-64

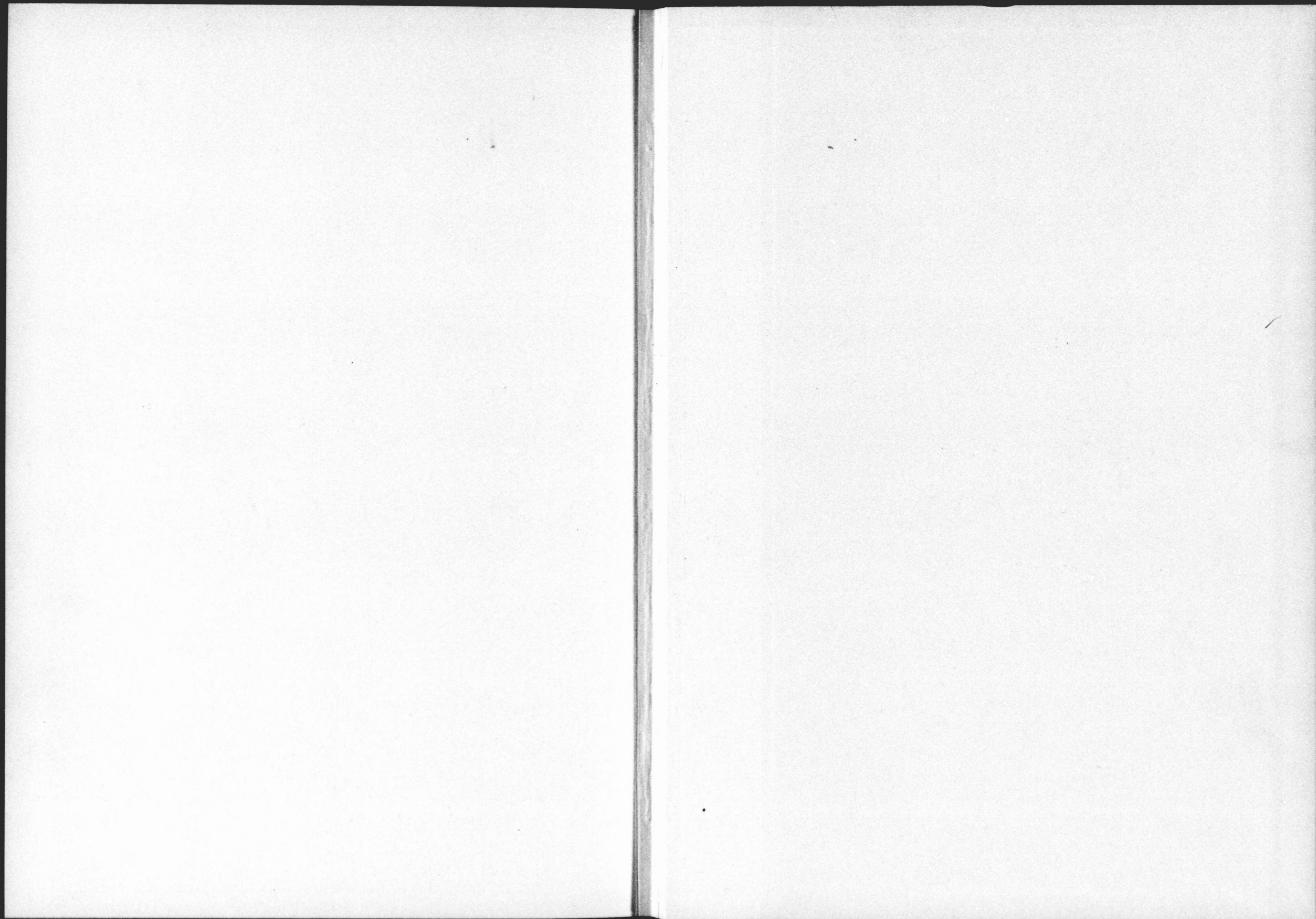
立憲民政党史

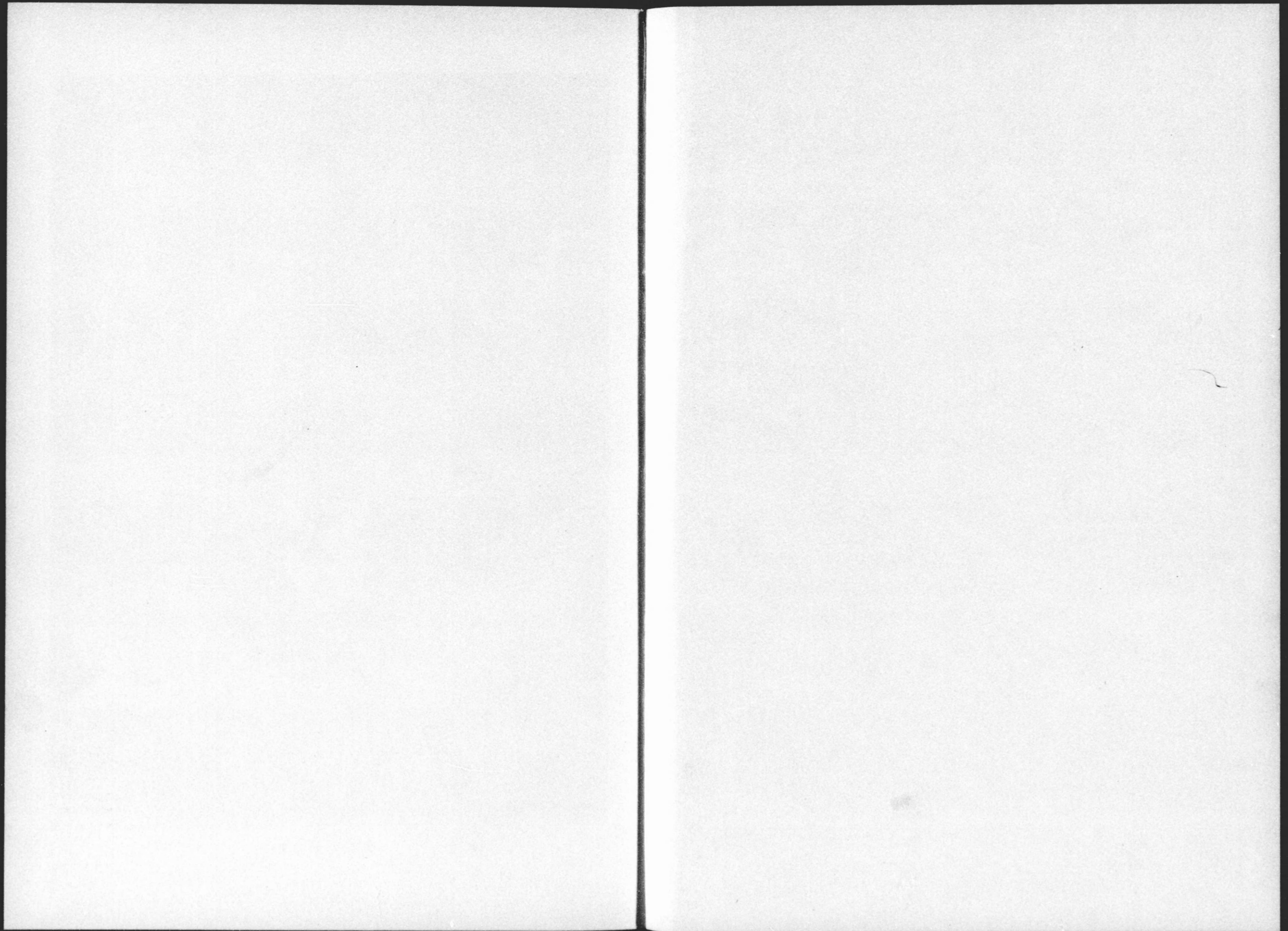
立憲民政党史編纂部・編

立憲民政党史編纂部

昭和9

ABF





ナ 82-55






公 桂 故
氏 口 濱 故

裁 總 黨 政 民 槻 若

侯 隈 大 故
伯 藤 加 故

風色入
壯懷



若槻禮次郎氏書

反
之
正
興
在
心
心

山
本
達
雄
氏



山本達雄氏書

憲 檉
政 友



羽 才



書 氏 治 源 田 松

至誠
奉公

孫一



書氏一孫 俵

志懐
今有書
幾屋

町田忠治氏書

671
64

立憲民政黨史 目次

上編 政黨の濫觴と改進黨並に同志會時代

第一章 民選議院設立運動時代

金澤論と元勳抗爭	一
廟堂の立憲思想	三
政黨の端緒	四
四、民選議院設立論争	四
五、立憲開始詔勅と元老院	五
木、大隈の擡頭	六
七、國會開設と詔勅	六

第二章 政黨啓蒙時代

一、坂垣自由黨を組織す	一〇〇
二、大隈改進黨を組織す	一〇一



目次

- 三、改進黨の生成に努力せられし人々……………108
- 四、改進黨の政綱發表……………111
- 五、政府の壓迫と兩政黨……………113
- 六、議會召集と政界の展望……………116
- 七、改進黨自由兩黨の聯盟と與黨の態度……………118
- 八、松隈二老の會合と伊藤首相の辭職……………123
- 九、松隈内閣の成立……………126
- 一〇、進歩黨の成立と内治外交……………127
- 一一、第十議會開會前に於ける各派の情勢……………130
- 一二、外交方針に關する大隈外相處女演說……………134
- 一三、松方内閣と進歩黨の絶縁……………138

第三章 政黨離合集散時代

- 一、進歩自由兩黨の合同……………140
- 二、大隈板垣入黨し憲政黨組織……………143
- 三、御前會議に於ける伊藤首相の辭意……………147

- 四、憲政黨内閣の組織……………150
- 五、隈板内閣の行政整理……………154
- 六、臨時總選舉の結果……………158
- 七、外務大臣專任と兩黨の衝突……………160
- 八、分裂、憲政本黨……………163
- 九、憲政黨、憲政本黨と山縣内閣……………167
- 一〇、帝國黨の組織……………170
- 一一、伊藤博文政友會を創立す……………176
- 一二、大同、政友俱樂部の出現、西園寺内閣……………178
- 一三、戊申詔書の渙發……………181
- 一四、戊申俱樂部……………184
- 一五、非政友大合同と立憲國民黨の組織……………188

第四章 桂公立憲同志會を創立す

- 一、桂公と新政黨樹立の準備……………194
- 二、新政黨樹立の發表と政黨史の新紀元……………199

- 三、國民黨分裂の真相と所謂五領袖の参加……………二〇五
- 四、立憲同志會の結黨……………二二一
- 五、桂公の逝去と其の後繼者問題……………二二七
- 六、立憲同志會の結黨式……………二三三

第五章 大隈内閣

- 一、元老會議と後繼首相の奏薦……………二三五
- 二、大隈内閣の成立……………二三八
- 三、大隈内閣の政綱發表……………二三三
- 四、第三十五議會に於ける首相の演說……………二三八
- 五、加藤外相、若槻蔵相の演說……………三三六

中編 憲政會時代

第一章 憲政會の出現

- 一、憲政會の創立……………三三七
- 二、立憲の宣言綱領を天下に頒布……………三三九

- 三、政府の不當なる議會解散……………三三五
- 四、臨時總選舉と憲政兩派の主張……………三三五
- 五、原首相の兇變と高橋内閣の出現……………三三九
- 六、高橋内閣の瓦解と加藤(友)内閣の成立……………三三三
- 七、加藤首相の逝去と山本内閣の成立……………三三五

第二章 苦節十年受難時代

- 一、山本内閣の總辭職と清浦内閣の成立……………三六六
- 二、護憲運動……………三六八
- 三、政友會分裂の真相……………三六五
- 四、政友本黨の結黨……………三六九
- 五、憲政擁護運動の擡頭……………三六九
- 六、議會解散と護憲三派……………三九三
- 七、護憲三派大勝……………三〇〇
- 八、大命加藤高明子に降下……………三〇一

第三章 加藤高明内閣の業績

一、三大政綱の聲明……………三〇九

二、第四十九議會に於ける加藤首相、幣原外相、濱口藏相の演説……………三二〇

三、加藤内閣に對する質問戦……………三三三

四、第五十議會に於ける加藤首相、幣原外相、濱口藏相の演説……………三四

五、豫算案……………三五

六、普通選挙法案兩院を通過す……………三六四

七、貴族院令改正案……………三七八

八、治安維持法案……………三八〇

九、政友會總裁更送の真相……………三六三

一〇、税制案と閣議の分裂……………三六三

二、改造後の加藤單獨内閣……………三九〇

第四章 加藤内閣と憲政會

一、第五十一議會に臨む憲政會……………三九三

二、加藤首相施政方針の宣明……………三九五

三、加藤首相の逝去……………四二二

四、憲政會總裁推戴と若槻内閣の成立……………四二二

五、若槻内閣に於ける重要法案……………四二三

六、日露國交の回復……………四二八

七、大正天皇崩御せらる……………四三〇

第五章 昭和新政の展開

一、天皇登極の朝見式と勅語……………四三三

二、三黨首會見の顛末……………四三四

三、震災手影法案の内容……………四三六

四、若槻内閣の瓦解……………四三三

五、憲本合同の氣運進む……………四三四

六、田中内閣の成立……………四三五

下編 立憲民政黨時代

第一章 立憲民政黨の創立と田中内閣

一、立憲民政黨の組織……………四三七

二、普選第一回の総選挙……………四四一

三、臨時議會と明政會……………四四五

四、田中内閣の改造と優待問題……………四四六

五、床次一派の分離……………四四九

六、第五十六議會と久原遷相問題……………四五〇

七、滿洲某重大事件と田中内閣……………四五三

第二章 濱口内閣成立

一、濱口内閣と十大政綱の宣言……………四五八

二、濱口内閣に對する内外の輿論……………四六六

三、金解禁の斷行……………四七三

四、大民政黨時代成る……………四七四

五、徹底的緊縮政策斷行……………四七六

六、濱口首相狙撃せらる……………四八二

第三章 第五十九議會に於ける前後

一、幣原臨時首相代理時代……………四八四

二、濱口首相の登院……………四九二

三、濱口總裁の辭任と若槻男の就任……………四九五

四、濱口内閣總辭職……………四九六

第四章 若槻内閣成立

一、若槻内閣の成立と抱負……………四九七

二、行、財、税の三大整理……………五〇四

三、官吏減俸の斷行……………五〇六

四、恩給法改正……………五二〇

五、軍制改革案……………五二二

六、濱口前首相の逝去と若槻内閣の總辭職……………五二六

七、安達一派の分離……………五三三

671-64

立憲民政黨史

上編 政黨の濫觴と改進黨並に同志會時代

第一章 民選議院設立運動時代

一、征韓論と元勳抗爭



明治末年朝鮮問題、所謂征韓論起るに及びて其の内部に潜みつゝありし留守内閣派と遣外大使派の反感情勃發して、西郷派と木戸派
大久保派との一大衝突を生ずるに至れり。

初め外務卿岩倉具視の全權大使と爲りて歐米に赴くや、副島種臣、代りて外務卿と爲り、銳意して外政の刷新に着手し、四年十月、
日清通商條約の締結を首とし、五年五月、副島が、外務大輔寺島宗則、上野景範と共に條約改正取調掛と爲り、専ら條約改正の準備に
従事したるが如き。尋て寺島を以て辨務公使に任じ、英國在動に命じ、鮫島尙信を以て佛國公使に、森有禮を以て米國公使に任じ、六

年一月、佐野常民を伊嶼公使に、澤宣嘉を露國公使に任じたるが如き。五年十月、陸軍少將井田讓を以て福州領事に任じ、厦門、臺灣、淡水の事務を管し、品川四方一を以て、上海領事に任じ、鎮江、漢口、九江、寧波の事務を管し、林道三郎を以て香港副領事に任じ、廣州、仙頭、瓊州の事務を管せしめたるが如き。又た開拓次官黒田清隆をして北地經營の任に當り、樺太問題に就て露國と交渉せしめ、之と同時に自ら露國公使と談判を開始し、樺太買収の計畫を立てたるが如き。臺灣問題起るに及び、陸軍少佐樺山資紀、同少佐福島九成等をして支那に派遣し、臺灣の形勢を視察せしめ、同時九年九月に琉球王尙泰を冊封して琉球藩王と爲し、之をして華族に列せしめたるが如き。朝鮮問題起るに及び、窃に西郷隆盛と謀り、池上四郎、武市熊吉を滿洲に派し、陸軍中佐北村重頼、同少佐別府晋介を韓國に派し、其の形勢を視察せしめたるが如き。自主的對外政策の實現に外ならざりしなり。

六年の時に當り、政府の解決せねばならざる外交事件として、樺太問題、臺灣問題、及び朝鮮問題あり。就中朝鮮問題は切迫して、釜山に於ける居留民を撤退すべき乎。但しは進みて軍隊を派し、居留民を保護すべき乎。兩者其の一を擇ばねばならざる焦眉の問題と爲りしなり。

維新の初め、我が政府は王政復古の朝旨を各國公使に告知すると同時に令を宗對馬守に傳へ、之を朝鮮に通知し、文化以來、殆んど杜絶の状態に在りし朝鮮との舊好を復せんが爲に、宗氏をして之れが交渉の任に當らしめたり。是れ明治元年三月の事なりき。

然るに、當時韓國は、大院君政柄を執り、専ら鎖國主義を主とする時なりしを以て、日本政府の開國主義を憚はず、宗氏と韓國との間、文書を往復するもの、數十回に涉り、殆んど二箇年に近き時日を費したるに拘らず、文書上の用語問題に關し、彼は其の書中に、皇祖、皇上、皇室、及び奉勅等の文字あるを以て、是れ舊例古格に違ふ所なりしと爲し、峻拒して之に應ぜざりき。

是に於て、政府は宗氏の交渉委任を解き、明治二年十月、樺大録佐田宗一郎白茅少録森山茂を派し、韓國と交渉せしめたるも、韓國は舊例に依り宗氏を介せんと主張して之に應ぜず。空しく歸朝するの已なきに至れり。後來我が政界に一大波瀾を捲き起したる遺韓大使論は、當時佐田の建白したる征韓論に胚胎したり。

三年十月、政府は外務權少丞吉岡輔藏を以て使節に任じ、韓國に交渉する所あり。然るに、韓國は依然として前説を固執して動かざりしを以て、吉岡は外務卿澤宣嘉に建議し、其の結果、政府は宗重正を以て外務大丞に任じ、之をして韓國に交渉せしむることゝせり。而して吉岡は釜山に在りて一年有半の時日を費し、其の間韓吏に會見するの機會なく、五年六月を以て終に歸朝の已むなきに至れり。

副島種臣、外務卿と爲るに及び、從來の對韓政策を一變し、對馬對韓國の關係を斷絶せしめ、對韓外交事務は一切外務省をして直接專管せしむることとし、更に外務大丞花房義質、少記森山茂を韓國に派し、韓國と交渉せしめたれども、是れ亦何等の要領を得ざりき。

六年二月、政府は、外務七等出仕廣津俊藏を韓國に派遣せしに、彼等は我が派遣員に對して、食料供給の途を絶ち、且つ番船（對州釜山間を往復する船）の出入を警戒し、剩さへ我が商品の輸入をも杜絶し、終に我が日本を侮辱したる傳令書を揭示し、其の文中に「其の形を變じ、俗を易ふ。此は日本の人と謂ふべからず。彼の人の爲す所を見るに、無法の國と謂ふべし」と云ひ、國交謝絶の意を示せり。森山等は此の狀勢を目撃し以爲らく「事此に至りては、最早之を不問に附すべからず」と。乃ち其の書を携へて歸朝し、其の事情を外務卿に稟申して其の決意を促がしたり。是れ實に明治六年六月なりき。

此時、外務卿副島種臣清國に使して外に在り。外務少輔上野景範代て外務の事務を處理しつゝありしが森山の議を是なりとし、正院

に至りて、其の顛末を報告し、更に閣議を要求せり。曰く「陸海軍を朝鮮に派して以て我が居留民を保護し、且つ大使を特派し、之をして直に京城に入り、韓國政府と交渉せしむべし」と。太政大臣三條實美、之を然りとし、閣議を開くに決し、日韓交渉の要領を記載したる議案を作製し、之を會議に附せり。其の議案左の如し。

朝鮮之儀は我隣近に在りて、數百年來通信往來せる故を以て、明治戊辰の歲、宗對馬守に命じ、大差使を派遣し、舊好を修むべき旨を通じ候處、書辭、印章等舊例に違へる由を以て、之を接受せざるに付、談判數次の末、庚午二月に至り東萊府吏より單簡を以て、前書中文字失體の儀を論難に及び候。其後吉岡弘毅、森山茂等に命じ、外務卿より禮曹參判へ、外務大丞より東萊釜山兩使へ贈る所の書を齎らしめ、彼地へ赴き、兩使へ面晤之儀懇請に及び候得共、更に之を肯んぜず、僅に訓導に内謁を得るのみにて、訓導も「只新例不可開、以後百事對州を以て應換せらるゝに非ざれば、決して引受間敷」旨を主張し候に付、三月宗氏より、別書契を以て、猶又兩使へ面晤の儀相促候處、數月の後に至りて、外務官員の是に來れるは、無前の事、況して、面接の理は無之旨を答へ、終に其儀も不相調、兩人は空しく二書を携へ歸り候。同年七月、廢藩の令出るに及て、前嚴原藩知事宗重正を更に外務大丞に任じ、兩國交際の事を幹すべく様被命候に付、同人より禮曹參判東萊釜山兩使等へ宛て、國制一新之景況より、廢藩置縣の變革、並に外國交際之事は、一切外務省に於て之を管する由、且つ派遣せる我使臣に面晤款待を請ふの意等、懇々陳述せる所の書札を携へ、新差使彼地へ到達の日より、訓導に應接周旋の儀を懇求すること、殆んど二十回に及び候得共、病故に託し相斷り、遂に其儘上京に及び候。其別左官下り來り候に付、前件兩書の寫を寄附し、速に回答あらんことを求め候に、數十日相過候後、訓導下り來り申出候に、公幹の事は國中の衆議を盡候上ならでは決答に難及、尤其期限は、早晚豫め定むべからざるの旨を答へ候に付、不得直に訓導を伴ひ、

差使館司一同東萊へ入り、親く府使へ面謁の儀を請求候得共、一向聽入れず、軍官をして、前同様國議を盡候後、決答に可及候條、惟々恭て「早晚間の處分を可相候」旨申出候に付、猶其期を相尋候處、先づ六七年乃至十年と可相心得杯、不取留曖昧の答に及び候。其他我漂流人を和館の前岸に放棄し、或は館司の東萊府に入り候事は、有間敷所業なりとて、常例の供饌を廢し、或は兩使の嚴命に付、館中禮式に關する屋宇を急に解撤せしむる等の類、彼是不條理の所爲共不少候。殊に又近日草萊館門將小通事等に傳令せる揭示書中に「彼雖受制於人不耻。其變形易俗。此則不可謂日本之人。不可許其來往我境。所騎船隻、若非日本舊樣。則亦不可許入我境又近見彼人所爲。可謂無法之國。又須以此意洞諭於中頭領之人。使不至妄錯生事以有後悔云々」等の言に至りては、言語に絶し、實に可憎之甚きことに候。彼れ既に我を目して無法之國となし。又は我をして妄錯生事、後悔あるに至らざらしめよなど、揭示候條の機に有之候ては、自然不慮の暴舉に及び、我人民如何様の凌虐を受け候哉も難測勢に有之候。抑も御一新より以來、彼我人民の便益を被爲謀度思召よりして、強て彼が不遜を恕し、彼が非理を宥め、只管聖意の誠を被然盡候得共、更に一點感通の色無之のみならず、却て漸次驕心を長じ、遂に今日の如き侮慢輕蔑之至に立到り候ては、第一朝威に關し、國辱に係り、最早此儘難開、斷然出師の御處分無之ては不相成事に候。乍去、兵事は重大之儀、輕易に之を開くべきことに無之候得者、先づ今般不取敢我人民保護の爲め、陸軍若干、軍艦幾隻、彼地へ被差遣、一旦有事候はゞ九州鎮臺へ神速應援に可及旨を達し、猶此上使節を派遣し、公理公道を以て屹度可及談判様被遊候條、篤く此旨を體し一同協議可致被仰出候事。

此時、閣議に參列せしものは、三條首相を始めとし、西郷隆盛、板垣退助、大木喬任、大隈重信、後藤象二郎、江藤新平の諸參議なり。板垣曰く「我が居界民を保護するは政府當然の義務なり。宜しく速に一箇大隊の兵を釜山に送り、而して後修好條約の談判に及ぶ

べし」西郷曰く「今ま俄に海陸軍を韓國に派し、我が居留民を保護するの舉に出でんか、彼は見て以て歎惑の念を懐き、必ず曰はん、日本は韓國を吞噬せんことを圖り、已に其端を發するものなりと。是れ決して隣國に對するの道に非ず。想ふに、從來我より屢次使節を彼に派せりと雖も、皆、卑官にして僅に彼の地方官吏と折衝せるに過ぎず。是れ彼の我を輕侮する所以にして、今日に至るまで、未だ其の使命を全うすることを得ざりしものは、職として之に由らすんばあらず。故に今日の策は、宜しく先づ兵力を以てすることを止めて、責任ある全權大使を派し、正理公道を以て、彼の政府に説き、之をして反省せしめざる可からず。而も彼れ益々其の暴慢を逞うし、我が大使を殺害するに至らば、其時こそ、公然、罪を萬國に聲して討伐すべし。」三條曰く「大使は、須らく兵を率ゐて赴くべし」西郷、亦之を難して曰く「大使は、宜しく烏帽子直垂を著し、禮を厚うし道を正して、之に當る可し。今、俄に兵を率ゐて之に赴くが如きは斷じて不可なり」と。板垣は、西郷の意見を以て至當なりと爲し、直に自説を撤して之に賛成し、後藤、江藤等皆之に賛成せり。西郷更に提議して曰く「余、不肖なりと雖ども、願くは全權大使の任に當り、誓て一身を國家に捧げ、以て其の使命を竭さんと欲す」と。是よりペルリ、フーチャチンの例を引き、反覆切論して、三條の熟考を求め、此日の開議を閉ぢたり。

是より西郷は、自ら大使の任に當らんと欲し、副島の歸朝を俟て開議を開き、之を決定せんことを期し、七月二十九日、書を板垣に寄せて之に囑する所あり。其書に

先日は、遠方迄御來訪被下、厚く御禮申上候。扱朝鮮之一條、副島氏歸著相成候はゞ、御決議相成候哉。若し未だ御評議無之候はゞ、何日には押而參朝可致旨御達相成候はゞ、病を侵罷出候様可仕候間、御含被下度奉願候。彌御評決相成候はゞ、兵隊を先に御遣し相成候儀は如何に御座候哉。必彼方より引揚候様申立候には相違無之。其節此方より不引取旨相答候はゞ此より兵端を開き候半。左様

致候はゞ、初めよりの御趣意とは、大に相變じ、戦を釀成候に相當り可申哉と愚考仕候間、斷然、使節を先に被差立候方御宜敷は有之間敷哉。左候得者、決而彼より暴擧の事差見得候に付、可討名も確と相立候軍と奉存候。兵隊を先に繰込候譯に相成候はゞ、樺太の如きは、最早、魯より兵隊を以て保護を備へ、度々暴擧も有之候事故、朝鮮よりは、先に保護の兵を御繰込可相成事と相考申候間、旁行先之處、故障出來候半、夫よりは公然と使節を被差向候はゞ、暴殺は可致儀相察候に付何卒私を御遣被下候處伏て奉願候。副島君の如き立派の使節は出來不申候得共、死する位は相調べ可申哉と奉存候間、宜敷奉願候。此旨乍略儀以書中奉得御意候。頓首。

七月二十九日

追啓御評議の節、御呼立被下候節は、何卒、前日御達し被下度。鴻業を相用候へば決而他出相調不申候間、是又御含置被下候。

西郷 拜

板垣 様

尋で西郷は疾を力めて板垣を訪問し、其の意見を開陳し、八月三日又た書を板垣に寄せ、之に添ふるに三條首相に呈出したる意見を以てせり。其書に曰く。

先朝、參樓候處、色々御話拜承仕、厚御禮申上候。其折、大臣公へ參殿可仕旨、申上置候得共、數十度之瀉し方にて、甚以疲勞いたし候に付、別紙之通相認め、今日差出し置候間、定て御覽可被成下候得共、卒度寫取候て差上置候に付、何卒、此上の處左右恐入候共、御盡力被成下候處奉希候。此分乍略儀以書中奉得貴意候。頓首。

八月三日

板垣 様

西郷 拜

又た其の三條に差出せし意見書を掲ぐれば、左の如し。

近來、副島氏歸朝相成、談判之次第細大分り相成候由。就ては臺灣の一條速に御處分相定め度事柄と奉存候。世上にても紛紜の議論有之、私にも數人の論を受候次第に御座候處、畢竟名分條理の正し候儀、討幕之根元、御一新之基に候處、只今に至り、右等の筋を不被相正候ては、全く物好の討幕に相當り可申抔與の説を以て責懸參り候者も有之、閉口の外無他仕合に御座候。いづれも副島氏不罷歸候ては、御處分難相立との儀を以て、兎角、會釋置候得共、今日に至り候ては、休暇の譯を以て御決定不相成との言逃れは、迎ても出来不申、幾度も世人の難論を受候儀に候得者、實に困難の次第に御座候間、至急御處分被相定度事に御座候。左候へば、如何程責を蒙る共、一言の申開不致候共、自ら安心の場有之候故、困窮不仕候得共、何も無之處を責められ候ては、獨心に耻、辛苦の仕合の御座候。勿論、使節歸朝後、數日を経とも爲何御處分も不相定候ては實に御不體裁を極め候間、速に御評決相成候儀と奉存候。一 朝鮮の一條は、御一新涯御手を被付、最早五六年も相立候半、然處最初より親睦を求められ候儀にて有之間敷、定て御方略有之爲の儀與奉存候。今日彼が驕誇侮慢の時に到り、始めて變じ、因循の論に涉りては、天下の嘲を蒙り、誰れ有りてか國家の隆興することを得んや。即今、私共事を好み、猥に主張する論にては、決て無之、是迄の行懸りに而如斯場合に行當り候故、最初の御趣意不裁爲貫候ては、後世迄の汚辱に御座候故、斯に至り、一涯人事の限り被爲盡度儀と奉存候間、斷然便節裁差立、彼の曲直分明に公普すべき存に御座候。是迄御辛抱裁爲在候も、必、此日を被相待候事與奉存候に付、誠に奉恐入候得共、何卒私を被差遣度、決而御國辱を

醸出し候儀は萬々無之候に付、至急に御決被下度儀與奉存候。左候へば寸分なりとも、御鴻恩を可奉報事にて、無此上難有仕合に御座候。速に御許可被成下候様奉伏願候。

右之趣、參殿之上言上可仕儀に御座候處、近頃激劑を用ひ、甚疲勞に及候間、不願恐懼書面を以て呈上仕候に付何卒御採用被成下度奉願候。恐惶謹言。

八月三日

西郷 隆盛

是より先に、我琉球及び小田縣の漂民、臺灣蕃族の虐殺する所と爲りしを以て、征蕃の論起り、政府は、清國と臺灣との關係を明にするの必要を認め、六年二月、外務卿副島種臣を以て全權大使に任じ、之をして清國に赴き、彼國の臺灣、及び朝鮮に對する關係を審にし、而して後、之に處する所あらんとせしなりき。此に至り、副島の歸朝するや、朝鮮問題の正に沸騰しつゝある時に會せり。副島も亦大使特派論に同意したりしが、大使撰任問題に就ては副島は西郷と其の意見を異にし、互に論争する所あり。而かも西郷が鶴を柱げて副島を訪問し、親しく肝膽を披瀝して、大使の任を己に委任せんことを懇囑するに及び、副島は、終に其の説を撤回するに至れり。是に於て、西郷は八月十四日、また書を板垣に附り、速に閣議を開き其間に斡旋せんことを囑せり。

八月十六日の夜、西郷は、更に自ら三條を其の私邸に訪ひ、大使問題に對する決心を促がせり。三條は、西郷の決心奪ふべからざるものあるを知り、更に閣議を開きて之を決すべしと明言するに至れり。是に於て、西郷は翌十七日書を板垣に寄せて更に其の盡力を請ふ所ありき。

三條の本意は、西郷の遺韓大使に賛成するも、事、實に國家の重大問題なるが故に、岩倉大使の歸朝を俟ち、之と熟議を盡し、而し

て後之を決定せんとするに在りき。然るに一面に於ては、西郷熱心に之を主張して止まず。他面に於ては、江藤、板垣、副島、後藤等一致して之に賛同せしかば、一人の力、以て其の鋒を遮るに由無く、遂に西郷の希望に應じ、十七日を以て閣議を開きたり。此日の閣議には閣員中一人も異議を唱ふるもの無く、西郷を以て遣韓大使と爲すべきに決し、其の發表は岩倉大使一行の歸朝を俟て之を行ふべきことと爲したり。

是より先に 天皇、皇后と共に暑を箱根の行在所に避けさせ給ひしかば、三條首相自ら箱根に赴きて閣議の結果を奏上せしに 天皇之を嘉納させ給ひたり。是に於て、三條は歸りて西郷を招き、勅旨を傳へ、且つ後命を待つ所あらしめたり。西郷は、宿志の漸く貫徹せんとするを喜び、勇躍禁ずる能はず、書を板垣に寄せて大に盡力を謝せりと謂へり。

但だ此に怪むべきは、閣議の決定を發表するに當り、岩倉大使一行の歸朝を待つべきことを附言せることなり。苟も一國の政府が緊急を要する重大問題として決議し、元首の裁可を得たる事項を發表するに際し、外遊中なる閣員の歸著を待たざるを得ざるは、稀有の事例なり。且つ又た一國の政府が閣議に於て決定したる所を、政府の政策として之を即行し得ずと云ふが如きは、如何に維新の當初、尙ほ草創の時代に際し、諸制度未だ確立せざる際とは云ひながら、甚だ奇怪なる現象と謂はざるを得ず。斯る現象に由て來れる所を研究するに、種々なる事情の錯綜せる結果たること勿論なりと云ふも、其主因は維新前より萌芽を發したる思想的感情の扞格、及び薩長間の軋轢、延て政見の衝突となり、國政上に及ばしたるが爲めに外ならざりしなり。

當時、全權大使派遣の議内決するや、西郷は心切に決する所あるが如く、其の懷を詠して曰く。

酷吏去來秋氣清。難林城畔逐涼行。須比蘇武歲寒操。應擬眞卿身後名。欲告不言遺子訓。難離難忘舊同盟。故天紅葉凋零日。遙拜雲

房霜劍橫。

遣韓大使論の起るや、三條首相は木戸大久保の二人を召還して、朝鮮問題を解決するに決し、其の歸朝を促がしたり。是に於て、木戸と大久保とは岩倉大使に先ち、各歸朝の途に上り、大久保は六年五月廿五日。木戸は七月廿三日歸朝したり。又た岩倉大使は、伊藤、山口等と共に九月十三日を以て歸朝したり。

岩倉大使の歸朝するや、出發前の誓約は、管に履行せられざるのみならず、政府部内の改革、著々緒に就き、朝鮮遣使問題は已に決定し、事情頗る切迫せるものあり。而して木戸と大久保とは洋行中より感情阻隔して、管に一致し得ざる外、木戸は歸朝以來病に臥して閣議に列せず、大久保は大藏卿專任にして、閣議に列すること能ざるの不便ありき。故に岩倉にして閣議を翻へし、朝鮮遣使論を撤回せしめとせば先づ木戸と大久保との確執を解き、大久保を參議に任じ、之をして西郷、板垣、江藤等に當らしめねばならず。岩倉は、此策を以て三條首相に謀り、之をして木戸の意を探らしめんせしに、三條首相は岩倉に對し「卿自ら進で木戸を訪問するに若かさるべし」と云ひ、之を拒みたり。

岩倉は三條訪問の旨を大久保に告げしに、大久保は書を以て謝絶を表したり。其の書左の如し。

唯今條公へ參上、云々拜承。御同様御返辭申上、委曲御承知にて、猶閣下へ御示談可被成との事に付、小官心緒兼而御了察も被爲在候通、何卒御垂憐、斷然御止め被下候至誠懇願仕候。然處御暇申上候節、今日岩倉へ遇はしなかつたかと御沙汰に付、先刻鳥渡罷出候段申上候處、前條の咄はいかゞと御尋に付、大略御咄有之同様御答申上置候旨申上候。是も爲御心得申上置候。草々頓首。

九月二十六日

利 通

具視 公 閣 下

當時朝鮮遣使問題に反対せしものは、工部大輔伊藤博文、開拓次官黒田清隆なり。是に於て岩倉は二人をして木戸及び大久保の間を調停せしめんとし、先づ伊藤をして木戸を訪問し、其の意見を質さしめたるに、木戸も亦其の見、因より内治改革論に在りしを以て、平素の感情を一擲し、國家の爲めに盡さんことを誓ひ、大久保の参議任命説に同意したり。然れども大久保は別に見るところありて、容易に之に應ぜざりしも、其の後大久保は、三條、岩倉、伊藤、黒田等の熱心なる勸告に由り、終に之を辭することを得ず、斷然起て参議の命を拜すべく決心したり。

三條、岩倉は、大久保を参議に推薦すると同時に、更に副島を参議に推薦し、其の均衡を得んとせり。蓋し大久保のみを以て参議に任じ、外務卿たる副島を現在の位置に置き、之をして内閣に列せしめざるは、公平を天下に示す所以に非ざればなり。

斯くて岩倉等の西郷派に對する戰國準備は略ぼ成りたりき。

六年十月四日、三條は閣議開會に先ち、善後策を講ぜんと欲し、別紙草案を具して之を岩倉に諮詢せり。其の草案に曰く。

別紙朝鮮事件に付心附の儘相認候、御一覽被下度候也。

十月四日

實 英

岩 倉 公

別 紙

米人ペルリ氏の日本に来るや、其目的を條陳して宰相に出だせし畫策を見るに、實に詳細に之を記せり。今や使節を朝鮮に派遣す、

宜く出目的を條陳すべし。

使節の目的

使節は國辱を雪ぎ國權を張り、彼をして舊交を繼ぎ、隣誼を修めしむるに在るか、將た又彼をして遂に我が附屬國たらしむるに在るか、別に他の外交上に關し、深謀遠慮する所ある歟、或は我が内治上に關し一時政略に出づる歟、使節は、戰爭を期するの意歟、又は戰爭を期せざるの意歟、或は又戰爭を期せざるも、已むを得ざる時は戰爭を開くの意か、朝鮮と戰爭を開くの利害如何。

一方に有利無害の論あれば、必ず一方に有害無利の説あり、双方を照して議を盡さずんばあるべからず、利害とは勝敗の謂に非ざらんなり。

戰爭を開くの目的は、邦土の必取を期する歟、又は彼を制するに止まる歟。

右等の論は、詳細に盡して議案に供すべきあり。兎に角、此の如き大事件は、紙上に筆し決議の上は大臣参議一同押印をなして上奏宸斷を経、御璽を鈐せられて廟策不拔のものとなしきなり。今日の形状の如く、銘々各自の想像にて事を決するときは、一定の後に至りても、人によりて思わくの相違せること有り、是非善取を以て證據となすに非ざれば廟策と謂ひ難し。西郷参議より、前段件々其目的を具陳すべき様致したし、若し本人筆を執ること差支ゆるときは、吏官をして、その口演を筆記せしめて可なり。今度の使節は、已に三度目に屬し、又屈辱を受けて國權を損すべからず。仍て必死を期すべき使節なり、使節をして必死を期せしむ。政府は戰爭を期せずして可ならんや。使節を派遣するの事は、已に議決せり。今更之を論するの必要なし。惟使節を派遣するに付ては、

戦争に移るを以て其利害を論決する極めて大事なり。此論にして決せざれば、使節は境を越ゆること能はざるなり。如何となれば、今度の使節は、平常の使節に非ず。必死を期せしむるの使節なり、使節殺されて後に、始て戦争を決するは晚し、必死を期するの使節を派遣するの日、已に戦争を決せざるべからず。國勢振はず、使節身を殺して始て振ふ可しとならば、使節一身の略にして政府の略に非ず。是、利害を論ずるに於て尤も慎重を要する所以なり。

此書を見るに一種異様の感あり、蓋し遣使論の可否は、既に三條が首相として開きたる八月十七日の閣議に於て決定したるのみならず、其の結果、三條は行在所に伺候して閣議の経過を奏上し、親裁を得たる既決の問題なるを以て、首相たる三條としては、毫も其の可否、乃至使節の目的如何を云爲するの餘地を有せざるものなればなり。若し三條にして斯る疑問を有したりとせば、此問題が閣議に上れる劈頭に於て、之を討論して、始めて其の可否を斷すべきなり。然るに、閣議成立後、約二箇月の後に至り、新に歸朝したる岩倉に向て、斯る疑問を提出するが如きは、前後撞著の處置なりと謂ふの外なし。蓋し前後の關係よりすれば、此疑問は閣議決定の當時に不在なりし岩倉より三條に提出すべきものにして、三條より岩倉に致すべきものに非ず。本來の順序は、斯の如くなるも、斯る疑問を岩倉より提出したりとせば、却て西郷等の悪感を挑發するの虞あるより、岩倉は特に之を避けしが爲め、三條と默契する所あり。前後本末の順序を轉倒して、三條と内議を遂げ、三條をして斯る失體を演ぜしむるに至れるものに非ざるや。

斯る中に、西郷等は閣議の開會を要求して止まざりしかば、三條は十月十二日を以て閣議を開かんとせしが、故ありて之を中止し十四日之を開くべき旨を告げしに、西郷は十一日、書を三條首相に寄せ、其の書の中に

「誠恐入候得共不肖御遣し之儀最初御伺之上御許容相成居、今日に至り御沙汰替等之不信之事共に相變じ候而は、爲天下勅命輕き場合

に相成候間、右邊の所は決而御動搖無之御事とは奉恐候得共、段々右等の説も有之様に承知仕候儀も御座候故、爲念中上候」と述べ決心の在る所を示せり。

三條は、西郷の書に接するや、倉皇書を岩倉に寄せ、添ふるに西郷の書を以てし、大久保と熟議せんことを以てせり。其書に曰く。御安全奉賀候、然者西郷へ申遣候處、別紙答書到來候間入御内見置候。誠に以此一件は、全權等の輕卒より遂に如此難事に立至り候事に而、對國家中譯も無之、尊公方も對而も慚愧無之外之、萬悔不及事に御座候。此上は大久保の精忠に依頼し、御互に於ても盡力可仕事と存候。就而は愚案仕候處、明晩大久保參上之都合に依り、御伴にて西郷方に行向、赤心を以て爲國家論究仕候はゞ、精神の貫徹不仕儀は有之間敷。尤西郷を使節に被遣候儀は御變換無之候而、時機を見合候迄に候はゞ、決而不信と申譯無之筈と相考申候何分にも大久保之處、是非明晩には御聞相成候様仕度奉存候。先者申述度如此候也。

十月十一日

實 美

岩 倉 殿

二仲。何分にも明後々十四日の會議迄に、下拵へ丈は、是非仕り置不申ては不都合と存候、猶御熟考奉願候也。

西郷を以て、遣韓大使と爲すことは、已に閣議に於て決定し、其勅裁を得たるが故に、今更、岩倉、木戸、大久保等の反對論ありたればとて、三條は無碍に之を變更すること能はざるを以て、岩倉の意見に従ひ、姑らく朝鮮遣使の期日を稽延し、而して後其間を彌縫せんとせしなり。十月十二日、三條が岩倉に對して、其の意見を問ひたる書に曰く。

御安泰奉賀候、然者西郷朝鮮一件、大久保御面會御相談に相成候はゞ、明後朝九時會議之節は、凡箇様之評議に可致と云ふ積り、御

打合置被下度候、大久保之苦慮如何計と想像仕候。實に西郷も決心之事なり。兵隊の動靜も、此一舉之都合に依り候而は、殆ど駕馭之策六箇敷可有之と、他日之變害不堪掛念候。兵隊之駕馭を失候ては不可救之大患と存候。就ては愚存にては別紙之策を以て、兎も角時機を相延し候外有之間敷、大久保良謀有之候乎と存候へ共、御含迄に愚意書取、呈尊覽候也。

十月十二日

實 美

岩 公

使節之儀は、既に御内決あり。決して不可變動。然りと雖ども時機延引いたし。其仔細は、今度の使節は君に代る大使なり。然るに朝鮮の頑固、使節を受けざるは、顯然たり。依て足下は殺さるゝの覺悟にて行かんことを欲するなり。

朝廷に於ても使節を殺すの覺悟なり、君に代るの使節殺されて戦はざるは、道理に於ても、情理に於ても、決して有るべからず。

然るに、如何せん海軍の不備、所詮戰術に缺くる所あり。勝大輔に問ふに、勝大輔曰く「戰術決して整はず、萬一政府より戰爭を命ぜば、職を辭するの外なし」と云々。今新に軍艦數艘を速に外國より購買することに著手し、宜しく急に其人を選んで米歐に派出し、堅牢の軍艦、數艘を購買し、海軍を備へ、然る後に發途すべし。仍て已むを得ず歳月を遷延せざるを得ず。

足下無事歸朝すること有らば、發遣の歳月を遷延するの理なり。唯遷延するものは、決して無事に歸朝することを保せざればなり。偏に望むらくは國家の爲に暫時忍耐せられんことを。

十月四日を以て、岩倉に對し、使節の目的使節行動の範圍を論じたる三條等、僅に一週間を隔てたる十一日に至り、「全く僕等の輕卒より遂に如此難事に立至り候事にて、對國家申譯も無之、尊公方に對し候ても慚愧之外無之、萬悔不及事に御座候」と滿腹懺悔の念を

表し、更に其翌日に及び「西郷も決心之事なり。兵隊之動靜も此一舉之都合に依り候ては、殆ど駕馭之策、六箇敷可有之と、他日之變害不堪掛念候。兵隊之駕馭を失候ては不可救之大患と存候」と今更の如く錯愕し、更に政府の内情に顧みて、一時、西郷の意見を轉ぜんとする因循姑息の彌縫策を案するに至れり。斯の如きは、到底、彼の使節目的を云々せる首相の行爲とは見るべからず。即ち此二通の書信は、有體に、當時三條が胸中の苦悶を描き出したるを知ると同時に、彼は極めて薄志弱行の人にして、天下の大事を擔當する器にあらざることを自白せるものなりき。

斯くて、岩倉の計畫運動は著々實地に顯れたり。大久保は此日(十二日)を以て參議に任じ、十三日、副島も亦同じく參議に任ぜられたり。岩倉は、其の時木戸、大久保と商議の結果、三條首相を訪ひ、板垣、副島を三條邸に招き、二人をして西郷に説かしめんとせり。

此の時、岩倉が三條と謀り板垣、副島をして西郷に説かしむるの計畫あるを知り、密かに西郷に告ぐるものあり、西郷は、之を聞くや否や、馳せて三條邸に至りしに、適ま板垣、副島等も既に來會せし時なりしかば、西郷は、三條、岩倉の兩相を詰問し、更に進みて速に閣議を開き、遣使問題を波せんことを要求したり。

斯くて岩倉の計畫は西郷の看破する所と爲りて、蹉跌せしかば、彼は更に西郷に説き之をして十四日の閣議に列せざらしめ、而して後、遣使問題を解決せんとの計畫に變更し、十四日の朝、書を西郷に寄せて、訪問の旨を告げしに、西郷は其書に接するや、直に馳せて岩倉を訪問し、之に質す所あり。岩倉乃ち西郷に謂て曰く「本日の閣議たる、遣使問題に係り、足下の身上に關するものあるを以て、余は本日足下が登閣を見合せられんことを望む」と。西郷、色を作して曰く「遣使問題は、國家の重要問題にして、小官の一身に

關する私事に非ず。請ふはより閣下と共に登閣して、意見を開陳せん」と。却て其の登閣を促し、かば、岩倉は、之を拒むを得ず、西郷登閣遮断の計畫も亦空しく失敗に歸したり。

十月十四日は、岩倉大使歸朝後、遺韓大使問題に關する第一回の閣議を開きたる日なり。此の日、閣議開くや、岩倉は提議して云ふ。「樺太問題、臺灣問題、及び朝鮮問題は、是れ皆國家の重要問題なるに相違なしと雖も、宜しく先づ其の緩急輕重如何を量りて而して之を處分せざる可からず。今若し全權大使を朝鮮に派し、征討の舉に三でんと欲せば、豫め露國と其の協商を遂げざる可らず。惟ふに朝鮮問題たるや、急は急なりと雖ども、樺太事件の急務なるに如かず。不幸にして日露の間、干戈相見ゆるに至らんか、朝鮮問題の如き亦顧みるに違なからん。故に樺太事件の解決は、急務中の最急務なり」西郷曰く「閣下戰略を以て之を論せば予も亦説あり。露國は世界の強國なり。我、若し露國と兵馬を交ゆるに至らば、正兵を用ゆるよりも寧ろ奇兵を以てするの勝れるに如かず。抑も敵を國強に待て、砲火を接するは、是れ兵の常道なりと雖、一たび敗戦の不幸を見んか、亦救援の繼ぐべきなく、國家の存亡測る可からず。故に初より奇兵を以て戦ひ、進みては朝鮮の北部若くは「ボンエツト」灣を經略し、退きては朝鮮に據りて防戦し、萬一其の防ぐ可らざるに及び、國疆を守りて決戦すべし。夫れ此の如くなれば數年を支ふるを得べし。此間に於て、列國の形勢變動せん乎、將た露國に於て内亂の起るが如きあらば、勝敗の數、未だ豫め知る可らざる也。戰略を以て論するも此の如し。然らば大使派遣の事、最も急務と謂はざる可らず。大使往て朝鮮に論し、之と修好條約を締結するを得ば可なり。若し之に反し、朝鮮人にして大使を殺害するが如きあらんか、出兵の名義、茲に立ち、其罪を世界に聲らして之を討するも列國豈之れに干渉するの理由あらんや。然れども、閣下の意見にして、先づ樺太問題より先にせんと欲するならば、敢て請ふ、遺露使節の任は、余之に當らん」岩倉曰く「樺太問題を處分するは、外務卿の

任也。外務卿命を奉じて露國と折衝し、彼をして對韓野心を絶たしむべし。願ふに此問題を解決するには多少の時日を費す可ければ、政府は宜しく此間に於て、内治を整理し、以て外征を謀るの力を蓄ふべし」と。板垣は西郷の議に賛成し、岩倉の説を反駁し、遺韓大使の即決を主張せり。此の時非遺使派の參議は、皆黙して語なく、其の甚しきは言辭曖昧、抗顔正言すること能はざりしと云ふ。獨り大久保は、之に反對し、西郷との間に激烈なる論鋒を聞はせりと雖ども、彼も亦た純然遺韓論に反對したるに非ず。唯た其の延期論を主張したるに過ぎざるなり。而かも此日の閣議は、議論紛然終に決すること能はず、翌日に延期せられたり。「岩倉公實記」に述べられたり。

又た、三條首相は、閣議の經過を奏上せんが爲めに參内し、他の閣員は、宮廷より賜はりし酒肴を喫しつゝ、寛談時を移せしに、獨り西郷は快々として一語を發せざりしかば、江藤戯れに西郷に謂て曰く「條公に向て其の決斷を迫るは、比丘尼に陽物を出せと云ふに等しからずや」と。西郷は聴きも終へず失笑し、列座の參議、亦皆之に和して拍手笑倒したりと傳へられたり。

十五日、第二回の閣議は開かれたり。此日は、三條岩倉を始めとし、遺韓派よりは、板垣、副島、後藤及び江藤の四人、非遺韓派に在りては大久保、大隈、大木の三人共に登閣せしが、獨り西郷のみは、閣議の決定如何を待つて決する所あらんとし、故らに閣議に列せざりき。

斯くて閣議の開くるや、大久保は、非遺韓派を代表して其の主張を繰返し、内治改革の急、一日も等閑に附す可らざるを論じ、板垣、副島等は遺韓派を代表して之を反駁し、雙々對峙して決する所を知らざりしかば、三條、岩倉の兩相は、其の裁斷に苦み、暫く兩派の參議を退席せしめ、二人秘密會議を開き、終に西郷の意見を容るゝに決し、再び閣議を開くや三條は宣言して曰く「西郷の進退は、其

繋る所甚だ大なり。故に己むを得ず建議を容るゝに決したり」と。是に於て大久保は之に謂て曰く「議既に決しなば、余亦何をか言はん。余は、我意見の行はれざる内閣に留ること能はず」と、驟然袂を拂て去れり。「岩倉公實記」に述べられたり。

斯くて西郷の意見は、閣議を通過せり。遣使問題は決定せり。唯た未だ其の裁可を得ざりしのみなり。

十七日は、閣議の経過を奏上し、遣使問題に關する勅裁を仰ぐの日なりしを以て、三條首相を始めとし、遣使派の參議、西郷、板垣、副島、後藤、江藤等皆登閣せしに、非遣使派の大臣參議は、一人も出席するものなかりき。

此の日岩倉は病と稱し、大久保も「奉職の目的立ち難し」との趣意を以て辭官、及び、位記返上の表を上り、木戸も亦「病に罹り、職事を曠うし罪を累ぬるを懼る」との趣意を以て辭表を上り、尋で大隈、大木等皆辭表を呈せり。蓋し岩倉は此に至り、殆ど策の爲すべからざるを知り、聯袂辭職をなし、以て閣議の實行を阻止せんとせり。

此の日、西郷は、三條首相に閣議の結果を奏上し、速に勅裁を得んことを逼れり。是れより先、岩倉は病と稱し書を三條首相に寄せて辭意を洩せり。三條は岩倉の書に接し、之を難じて曰く「使命の事は、國家の大事なり、宜しく岩倉右府以下參朝の日を俟て之を決すべし」西郷曰く「連日の閣議に於て、既に決定せし以上は、亦何ぞ右府以下の參朝を俟つの必要あらんや」三條曰く「此の如き重大問題を奏上するには、太政大臣左右大臣、參議の三職相會して之れを確定せざる可らず、請ふ一日の猶豫を與へられよ。若し明日に至りて、右府猶ほ參朝せずんば、余一人其の責を負ひ、斷じて之を決行せん」西郷猶ほ之を肯んぜずして即時決行せんことを迫る。時に後藤は三條首相の決意を察し、西郷に「僅に一日の猶豫のみ、首相の請を容れらるゝも亦可ならずや」と。百方之を慰諭せしかば、西郷も、己むなく枉げて之を諾し、固く明日を期して退朝したり。退閣の後、西郷は、出使始末書を草して之を三條に呈出せり。其の書

に曰く。

朝鮮御交際の儀、御一新の涯より及數度使節差立、百方御手を被盡候得共、悉く水泡と相成候のみならず、數々無禮を働き候儀有之。近來は人民互に商道を相塞、倭館詰居之者も甚困難之場合に立至り候故、無御據護兵一大隊可被差出御評議之趣承知致候に付、護兵之義は決而不宜、是よりして鬭争に及候而者、最初之御趣意に相反し候間、此節は公然と使節被差立相當之事に可有之。若し彼より交際を破り、戰を以て拒絕可致哉。其意底隨に相顯候處までは不被爲盡候而は、人事に於ても殘る處可有之、自然暴舉も不被計との御疑念を以て、非常之備を設け被差遣候而者、又禮を失せられ候得者、是非交誼を厚く被成候御趣意貫徹致し候様有之度。其上暴舉之時機に至候而、初て彼の曲事分明を天下に鳴し、其罪を可問譯に御座候。いまだ十分盡さざるものを以て、彼の非を而已責候而は、其罪を直に知る所無之、彼我共疑惑致し候故、討入を怒らず、討るゝものは服せず候に付、是非曲直判然と相定候儀肝要之事と見据建言いたし候處、御採用相成御伺之上、使節私へ被仰付候筋、御内定相成居候次第に御座候。此段形行申上候以上。

十月十七日

西郷 隆盛

此夜三條は、其書を携へて、岩倉を其の私邸に訪ひ、之を示して、遣使の議また翻へすに山なきを説き、反覆激論の後歸邸し、深夜西郷を招きて、岩倉の意志の在る所を告げしも、西郷は固く執て動かす、議曉に徹して止みたり。

岩倉は、三條が西郷の議に賛し、其の意志奪ふ可からざるものあるを知り、辭職に決し、書を裁して、其意を大隈に通ぜり。之に反して三條は、愈々閣議の勅裁を仰ぐべく、翌日を俟ちつゝありしに、十八日の曉に及び、深憂の極、俄然、精神に異狀を呈し、人事不省に陥りしかば終に辭表を裁し、岩倉に送りにて執奏を乞ふに至れり。

二十日 天皇親しく三條首相の邸に幸し、其の疾を問ひ、更に岩倉の邸に臨み、命するに太政大臣に代りて、太政を署理すべきことを以てし、左の勅語を賜はりたり。

國家多事ノ折柄。太政大臣、不慮ノ病患ニ罹リ、朕深ク憂苦ス。汝其視太政大臣ニ代リ、朕ガ天職ヲ輔ケ、國家ノ義務ヲ舉ゲ、衆庶安堵候様勉努力セヨ。

岩倉は聖恩に感激し、身を挺して國家に竭さんことを誓ひ、起て大命を拜するに至りたり。

遣韓大使問題が閣議に於て既に決定し、更に勅裁を仰がんとする一刹那に際し、三條首相の俄然として急病に罹り、辭表捧呈の已むなきに至りたるは、征韓派に取りて一大打撃たると同時に、一旦其の辭表を提出したる非征韓派をして其の頹勢を挽回し、更に致命傷を遣使派に與ふるの機會を與へるに至れり。

非遣使派の策士は、三條首相の疾病を機として、齊しく蹶起し、大隈、伊藤、黒田、松方等は、岩倉、木戸、大久保の間に奔走して縱横畫策する所あり。岩倉等は之れに由りて其の一旦沮喪したる意氣を回復し、あらゆる方法手段を講じて、宮廷運動までも敢てしたるの結果、遂に 天皇の三條、岩倉邸臨幸となり、岩倉は三條に代りて愈々首相の職を攝理することとなりたり。

岩倉は、太政大臣代理拜命の事あるや、大久保は其の翌夜岩倉を訪ひ、時局に處する善後策に就き熟議する所あり。

岩倉は、大久保の激勵に對し、再び其の倚託を空うすることなかるべき決心を示せり。

三條に代て首相の署理たる岩倉は、十四日の閣議に於て、一旦遣使論に賛成したりしも、彼は固より非遣使派の領袖として、最も熾烈に之に反對したる一人なりしかば、遣使派は爲に意見表示の機關を喪ひ、殆んど策の出づる所を知らざりき。

江藤は、岩倉の首相署理と爲るを聞くや、西郷、板垣、副島、後藤と議して曰く「今にして彼此の議論を爲すは、却て自ら之を破るの處あり。假令、岩倉にして首相署理たるも、既に一たび決議して、三條首相より大使派遣の内命下りし上は、今日の策唯、岩倉をして上奏の手續を爲さしむるにあるのみ。署理たる岩倉にして、豈異議を此間に挿むを許さんや」と。列座皆之を賛し、彼等は、二十二日相携へて岩倉を訪問せり。時に西郷は岩倉に謂て曰く「朝鮮遣使の議、三條首相既に之を決し、十八日を以て上奏勅裁を仰ぐの約ありしも、不幸、俄に大患に罹り、參朝する能はざるに至りしは、國家の爲めに甚だ遺憾とする所なり。此の重大事に臨みて空しく時日を遷延するが如きは、決して策の得たるものに非ず。敢て請ふ、閣下明日を以て發令の順序を決定せんことを。若し閣下にして三條首相疾病の故を以て之を難しとせば、宜しく參議をして之に代りて奏上せしむべし」岩倉曰く「此の如き大事は、參議を以て奏上せしむ可からず。且つ、予が三條と其見を異にせしは、卿等の既に知る所。今や、予、首相の事を攝理す、予の意見も亦奏せざる可からず。故に予は明日病を力めて參内し、彼此の兩説を奏聞し、以て宸斷を仰んとす。卿等、暫く勅裁の下るを待つべし」江藤參議之を辯難追窮し遂に江藤參議と岩倉右府との激論となり、唯だ殺氣滿座を襲ふを見るのみ、最後に西郷も岩倉に逼りしが、彼は徒に自説を主張するのみにして、他の説は一切聽かざりき。流星の西郷も亦激怒して蹶然と起てり、江藤等も相踵で起てり。

「岩倉公實記」に曰く。

二十二日、隆盛、正形（板垣）種臣、新平、利秋等具視の邸に至り、之に謁す。隆盛曰く「遣使の議、太政大臣既に之を決し、將さに十八日を以て上奏宸裁を仰がんとす。不幸にして太政大臣俄然と大患に罹り、朝參すること能はず。然るに此の如き大事の施行をして、徒らに時日を遷延せしむるは、國家の爲めの長計に非ず。敢て請ふ閣下明日を以て發令の順序を決定せんことを。若し閣下も

亦疾病の故を以て、之を爲すこと能はざるときは、宜く參議をし。之を攝行せしむべし」具視曰く「此の如き大事は、參議をして大臣に代り以て攝行せしむべからず、且つ予が三條氏と共に意見を異にせしは、卿等の既に識る所なり。今や予は旨を奉じ、太政大臣の事を攝行す。予の意見も亦具奏せざるを得ず。故に以て明日病を扶けて朝參し、彼此の兩説を奏陳し、以て宸斷を仰がんと欲す、卿等姑く勅答の下るを待つべし。」新平曰く「攝理者の務は、原任者の意を遵行するに在り、何ぞ原任者の意を枉げ、攝理者の説を併せて、之を奏聞するの理あらんや。且 聖上聰明と雖も、春秋漸く二旬有餘なり。故を以て國務は大小となく、内閣の議定を以て奏聞し、宸裁を仰ぐに非ずや。然るに此の如き大事に對し、兩説を具へて、可否を宸衷に決せられんことを奏請するは、抑、責を 聖上に歸し奉る也、大臣の爲す可き事に非ず」具視曰く「予不敏と雖も、三條氏其人に代りて職事を理むるに非ず。旨を奉じて太政大臣の事を攝行するなり。予が意見を併せて之を具奏するも何の不可か之れ有らん。況や今ま大臣、參議各皆其意見を異にす、宸斷を仰がざれば則ち之を決定すること能はず。尋常の事例を以て之を論ず可からざるなり。」隆盛等辭色激昂、抗論已む無し。利秋臂を擡げ、劍を撫すること再三回なり。具視衆論を排して曰く「予が眼睛の黒き間は、卿等の欲する所を行はんと欲するも得んや。」隆盛曰く「閣下意既に決す、某等如何ともする無し」衆皆坐を起ち辭して去る。隆盛他を顧て曰く「右大臣克く踏み張つた」と、蓋し具視の動かざるを嗟嘆するなり。

二十三日岩倉參内して、具さに遺韓大使問題に關する利害得失を奉陳し、意見書を上れり。其書に曰く。

臣具視謹で 天皇陛下に白す。抑、各國縮交の始め幕政衰弛の時に際し、條約對等の例を得ず、國權を奪はれ國威を失するを以て、人心乖戾し、國政整はず、或は金匱一畝あらんことを恐る。是以海内一致同心協力、國權を復し國基を固くし、保安の道を盡さんと

す。此れ 先帝の遺旨にして、陛下も亦神明に誓ひ期し給ふ所の聖旨なり。故に大政維新の初より、忠藩義國の士及草莽の輩に至る迄、國事に死する者、其數幾千なるを知らず、竟に今日の鴻業を致すを得たり。夫れ身命を抛ち、國事に殉するもの、皆聖旨を奉戴する誠意に出でざるなし。而て干戈既に戢り、名分既に正り、條理彌明に、各藩封土人民を奉還し、全國始て一致の治體に歸し、尋で廢藩置縣に至り、大權是れ立ち、大綱是れ舉り、郡縣の治全く成る。是に於て乎、國權を復し萬國並立の基礎を建てんとするの聖旨に従事せざるべからず。乃ち辛未の冬、臣 陛下の目的期望する旨趣を以て、特命を奉じ、歐米各國に使し、各國帝王及び政府の考案を諮詢し、臣が目撃觀察する所とを參酌し、條約改正等の議に及ばんとす。抑此舉たるや、國權の復すると聖旨の達すると達せざるとに關係し、至重至難なるは固り言を俟たず、然るに、臣其實地に就き其形勢を察するに其改正を議するの難き、更に意料の外に出で、功を一朝夕に奏すべきに非ず實効實力を著すに至らざれば、竟に國權を復する亦難し、國權を復せずんば、聖旨に報する能はず。此れ實に臣が焦心苦慮、眠食を安ぜざる所なり。夫れ實効實力を著す、勉て政理を整へ民力をして厚きに至らしむるに在るのみ、而て其之を爲す亦容易の事に非ず、故に臣歸朝復命の始伏て望む、陛下能く聖慮を此に留め、成功を永遠に期し、廢藩置縣を求むるなく、大に之が目的を定め、不動不撓、政治はれ理し、民力は厚からしめ、以て其實効を立て、以て其實力を用ひ、以て國權を復せんことを。然るに今臣竊に之を考ふるに、維新以來纔に四五年のみ、國基堅とするに非ざるなり。政理整ふとするに非ざるなり。治具備ふるに似たりと雖も、警虞難測、今の時に方りて未輕く外事を圖るべからざるなり。雖然朝鮮國我と隣好を修むる茲に數百年、彼れ非禮を我に加ふれば、我安ぞ受て止むべけんや、且遣使の議已に略ぼ定る。臣亦之を然りとす、然れども之を發遣するに至ては、之が緩急順序を審にせずんばあるべからず。何んとなれば、彼れ冥頑固結、若し禮を我の朝使に加へざれば、我乃ち之に

應ずるの處置なかるべからず。我之に應ずるの處置なくんば、是我が國權を損するなり、而て彼已に端緒を顯す、故に使を發するの日、乃ち戰を決するの日なり。是即ち軍國の大事、宜く熟々慮り、深く謀らざるべからず。且今萬國從衡の勢を察するに、東に形して而して其情西にあるもの有り、或は其端を示さずして、而て遠圖をなすもの有り、故に表面を以て其真情を測るに足らず。令や樺太の事頻に起る、是れ即ち目前の急、亦甚だ注意せざんばある可らず。凡是等の事先其情を審にして、而て朝鮮連與の意を絶たしめ、萬全を保つをなして、而て之が目的を定め、之が方略廟算を明かにし、其他船艦の設け、兵食の具、錢貨の備へ、及び内政百般の調理等に至る迄、豫め其順序目的を定め、而る後に朝使を發遣するも未だ晚とせざるなり、若し之か備をなさず、今頓に一使節を發し、萬一の事ありて後事難かず、而て更に他の患害にかゝるあらば悔と雖、追ふべからざるなり、故に之が備をなさず、今頓に使節を發するは、臣其不可を信ず。而て萬已るを後ざるの儀あるも、戰に従事するが如きに至ては、基を堅くし備をなすに非ざれば、臣實に其不可を知る、其議の顛末は之を口陳上奏す。伏冀くは、陛下事の末勢の緩急を深察し聖斷あらんことを。臣具視激切屏營の至に勝へず、昧死上言。誠惶頓首。

岩倉更に口演の大意を書して之を上れり。其文に曰く。

辛未の冬特命全權大使の命を辱うし、使を歐米各國に奉じ、今般歸朝復命するを得たり。抑奉使の事、實に國家重大の事件に係るを以て、焦心苦慮、勉て聖旨の貫徹せんことを期し、歐米各國を歴聘し、其帝王に謁し、聖旨を口陳し、其大臣に接し、我が政府の期望する所を論辨し、條約改正の目的を謀るに、之を改正する事一大至難の業にして、理論口舌の能く致す所に非ず、到底實效實力に非らざれば、我が期望する所を達する能はず、而て其實效實力を著す、徒に彼の皮想を學び、其體面を修飾するの能く致す所に非

ず、必ず國政の整備を務め、民力の富強を謀り、文明進歩の道を盡すに非ざれば、之を著すこと能はず。今我が國文明に進歩するの名あつて、富強の實未だ備はらず、之をして充備に至らしむる、亦功を且暮に期すべきにあらず。實踐の經營に依り、歐米各國形勢の大意を察するに、國勢民力、政教、治務、其由る所の根柢深ければ、枝葉日茂れるの理に出でざるなん。故に我が政治の急務とする所専ら力を此に致し、意を此に留め、奮勵從事せざる可からざるの旨趣を上奏せり。然るに本月十四日、内閣に於て、朝鮮遣使の議に會す、三條大臣、及、具視は、事の先後、勢の寛急を慮り、宜く順序を追つて以て可とすべし、今俄に使臣を發遣すべからずと論ず、衆參議皆之に同意す、然るに西郷參議獨り速に使を遣することを主張す、大久保參議、大隈參議、大木參議を除く外は議論稍や動き、其事決せず。十五日又其事を議す、大久保、大隈、大木三名前議を執て動かす、衆參議は西郷の論に同意するを以て、太政大臣も竟に其議を可とす。是に於て具視が説全く行はれず、或は國事を誤らんことを憂惧し、病に依り、朝せず。十七日夜、太政大臣は具視の第に來り情由委曲を告げ、大に前議を悔ゆるの語ありき。十八日拂曉、同氏病の將に發せんとするに際し、使を具視の第に送り、國の大事に任じ、意見一ならず、惶悚に堪へざるの旨を謝し、再び事を執る能はざるを告ぐ。此際に於て、辱くも車駕親臨、聖諭を奉ず、感激の至に堪へず、具視議論の合はざるの故を以て家居すること能はず、具視が意見と、議事の顛末とを奏聞し、謹で聖斷を仰ぎ、勅命に依り太政大臣の職務を代理し、各官と輿に聖旨を奉承し、職を盡し、以て宸襟を安んじ奉らんと欲す。天皇、岩倉に勅して曰く「國家の大事たるに由り、朕之を熟てし明朝を以て之を答へん」と。

廿四日 天皇、岩倉を召見し、左の勅書を賜はりたり。

朕總統ノ始ヨリ、先帝ノ遺旨ヲ體シ、誓テ保國安民ノ責ヲ盡サントス。頼ニ衆庶同心協力、漸ク全國一致ノ治體ニ至ル。於是國政ヲ

整へ、民力ヲ養ヒ、勉メテ成功ヲ永遠ニ期スベシ。今汝其視ノ奏狀、之ヲ嘉納ス。汝宜ク朕方意ヲ奉承セヨ。是に於て、岩倉は、大内史土方久元を木戸、後藤に、權大内史杉浦讓を大久保、大隈に、少内史日下部東作を西郷、板垣に、權大内史巖谷修を江藤、副島に遣はし、勅旨に添ふるに左の書を傳達せり。

過日來御評議の次第、並、具視意見、昨二十三日奏開聖斷相伺候處、重大之事件深く御熟慮可被爲在趣を以て、今二十四日勅答可有之御沙汰に付、今朝參朝候處、別紙寫文通勅答有之候條、本日可及御達候處、御所勞辭表御差出中に付不得已史官を以て此段及御達候事。

十月二十四日

右大臣 岩 倉 具 視

此の五參議中、西郷は二十三日に、江藤、板垣、後藤、副島は二十四日に、孰れも辭表を呈出し、翌二十五日、一同其の請を允されたり。

又た西郷等の辭職と共に、三條首相を始め木戸、大久保、大隈、大木の辭表は、皆却下せられたり。

朝鮮を扶植し、支那を保全し、西力東漸の勢を制し、以て東邦平和の基礎を確立するは、是れ實に皇祖皇宗の遺訓にして、大和民族の一大使命たり、而して明治六年の遺韓大使論は、日本帝國の國是、日本國民の理想、希望、要求を代表したるものなり。然るに、當時の政府當局者は目前の苟安を偷みて百年の大計を畫せず、朝鮮を以て一大敵國なりと看做し、帝國の使命を遂行するに躊躇し、之れが爲に閣議の分裂を招くに至りたるは、吾人の浩歎する能はざる所なり。

朝鮮問題は、我が帝國の歴史に取りては三千年以來の問題にして、維新政府としては、王政復古の天職より云ふも、之を解決すべき責任を有するは、論を俟たず。而して明治六年、西郷等の唱道したる主張は、彼れ西郷等二三子の主張にあらずして、徳川時代以來、先覺者が大和民族の使命として高調したる主張題目なりしことを知らざる可からず。鎖國時代の先覺者たる本多利明が『西域物語』に於て、佐藤信淵が『混同秘策』に於て、又眞木紫灘が『經緯愚說』に於て朝鮮扶植論を唱導し來りたる主張なりき。

我が政府が王政復古の曉、朝鮮との修交を促すに當り、彼れ之を拒絶し、朝旨を奉ぜざるに於て、全權大使を特派して之れが蒙を啓き、之をして皇化に浴せしめんとするは、國家當然の任務ならざる可からず。故に木戸孝允の如きは、維新の初め、堂々征韓を唱へ、之を岩倉具視に建議したり。即ち明治二年二月初日三條岩倉に呈したる書は、彼が平生の主張如何を窺ふに足るものあり。因て之を左に掲ぐ。

謹啓。先以兩閣下益御機嫌克御參仕。御盡誠爲皇家恐悅至極に奉存上候。東京も都合御靜謐乍恐御安慮被爲遊候様奉存候。

一 箱館進發之都合兎角約束齟齬仕。今以軍艦相揃ひ不申。甚及遷延候に付、誠に心急ぎ候得共、如何とも難仕、日々品海到着を相待申候。十日前に相揃候はゞ、必當月中には平定に至り可申と奉存候。遂々賊艦も然風破壊仕候由。彼地も度々大風波有之候様子。難船は賊艦而已と申事も無之事に御座候間遷延仕候も亦天乎と奉存候得共、此餘延引に相成候而は不相濟候間不日如何様とも手段相立候都合に付、必御懸念不被爲遊候様奉存上候。

一 先便言上奉り候月給論は速に御一定被爲遊度。只今之次第に而は大政一新も只月給而已に相成申候、五等官以上にて百幾十萬金と申様に相成申候。何卒上を削り下を御増被爲成候御詮議被仰附度。八九等之邊廿兩廿五兩は賜はり不申而は暮方六つ箇敷。また下

等之者丈け廉耻も薄き譯に御座候間無理之御遣方有之。賄賂に而もむさぼり候節殿軍に被仰付候は御仁慮に相反し候事歟と奉存候。總而下を増し上をへらし候之御主意徹下仕候様有之度奉存上候。

一 會而内々言上仕候建言一條も發上に至り、昨春來之微志聊相達し雀躍之至に奉存候。名實法度相舉り候ば一朝一夕御六箇數と奉存候。大綱之其名一旦相立候上は、其目は得と被爲盡御詮議萬世不朽之御規則被爲定度奉存候。名分を相正し、皇基之相定り候處、此外は無之、付而は御東幸之上、大小諸藩同意同論を以、數十藩も建言相成候は、大好機をまた相成し候と冥々に盡力仕。已に三兩藩は合論に至申候。土老公にも先日來段々御議論仕候處大悟彌御決心に而實に感心仕候。其中に於西京御建言之次第も相聞。別而御得意と被相察申候。已に箱館へ向け艦一條に付而も、舊幕十年前之勢に御座候得ば、如此之不都合は無御座。於于此は根顏之次第不少し々奉恐縮候。

一 過日も申上候通、征韓之一條得と御高案之上御勇決奉願度。征韓と申候而も只初發より干戈を以相征し候譯に而は無御座。今日皇國御國是と相定り候處を以、宇内之條理を被爲推候御儀是に相戻り候ときは、直に以干戈御征伐被爲遊候而、至當至極之御事と奉存候。元來御一新之御一新たる所以は皇國を御維持被爲遊候而こそ御名實相立候譯に御座候處。可慨嘆は宇内之大勢に對し候時は、皇國之急は昨年よりも今年に相迫り居申候處。上下只目前之平定に而已安堵仕前途大興起之目的は更に被相窺不申、去春來徳川氏之頭面を擊控いたし候は御一新において不得已之一條理に而、只々是而已に而、御一新者相濟候ものと相成候而は、實に政府は天下億萬蒼生之大罪人と相成申候。前途之目的不相立と申上候も、世間多くは賞論而已被相行。諸藩も舊幕之時より驕氣は大に増長し、名義と歟名分と歟申も多くは聲而已に成果。藩力を以相應に我儘に朝廷に申立、御一新之御主意を奉體、皇國をして萬世に維持仕候な

どと申所作ぶりは甚少く、多くは只己れに利を引候事而已に而、此儘に而は、四方小幕府之相集り候様之姿と相成。決而興起之基は相立不申。是等之處も御東幸之上に而則名分相立候處を以、御處置之御都合も可被爲在候得共、是亦御實を擧げ候に至つては必一時に難被行。依而彌征韓之儀御一決相成。箱館稍平定仕上は朝廷之御備早々御手を被爲着。只偏に朝廷之御力を以、韓地釜山府へ港を被爲開度。是元より物産金銀等之御利益は有之間敷。却而御損失とは奉存候得共、皇國之大方向を相立、億萬蒼生之眼をして内外に一變仕、海陸軍の諸技藝等實著に馳せしめ、他日皇國をして大興起し、萬世に維持仕候處、外に別策は有之間敷。亦蝦夷地を不能開して他に手を出し候等之世論も可有之候得共、是則を十を知て不知、蝦夷之事此後不失順序。只朝廷に而已蝦夷之利を御貪り無之候得ば、いか様とも手段は相立可申。又豊公之故智など論じ候者も可有之。是則時と勢とを不知、獨豊公を知る而已にて、形ち聊豊公に似たるものありと雖、其實、豊公に異なること十に八九。別に贅言不仕。元來皇國今日之人情規模尤小。只人之非を探り、人々能を妬み、人之惡を怒り、専ら内に而已眼を著け、宇内之大勢實に我皇國に急なるを不知。此姿にて四方暫時無事なるときは、種々之變態を生じ、人々益々惑ひ可申。韓國へ手を下し、一旦干戈に至り候とも、必急迫に不致。一地歩を占候上は、凡一年之入を定め、後來之掠了を立、其力之可續ものを以て無倦怠盡力仕候ときは、必兩三年を不出。天地大一變之實行相顯れ、萬世不拔之皇基彌相すわり可申。人生如朝露。年光疾似矢。所詮此まゝに而は、五年十年間、何之目的も相立中間敷、於于此無窮に方向を相開き置候而、今日之者寸歩之報酬歟と奉存。不取敢尙又奉言上候。已に韓國之使節之事被仰出候歟之由奉窺候付而者、前途之御大策御一決之被仰付度。偏に奉懇願候。先は右言上仕度。亂毫を奉捧呈。誠惶々々頓首百拜。

二月朔日

孝 尤 敬 白

條 公
岩 公 兩閣下 密呈

是れ木戸が、帝國の國是として、征韓の已むなきを主張したるものにして。彼は先づ征韓の方針を一定して、而して後朝鮮を開導せんことを期し、自ら特派大使の任に當らんことを期し、なり。世人は往々西郷を以て征韓論の首唱なるが如く思惟せるものあれど、征韓論の主唱者は、木戸に在りて西郷にあらず。西郷は唯だ六年朝鮮問題が愈々實際化して閣議に上りたる時に當り、之を主張したるに過ぎざりしなり。

此の如く、木戸の征韓論は、六年西郷の主張したる遺韓大使論と全然符合したるものにして、彼れ平生の抱負より云へば、宜しく之に賛成すべきに拘らず、當時彼が病と稱して閣議に列せず暗に大久保と共に之に反対し、西郷の大使論を排斥するに勉めたるは何故か。彼が歐米回覽の結果、彼の思想に變化を生じたるに由るものなりしが、征韓論實行の結果、西郷派の勢力制し得ざるものあるを慮かり、之に反対したるなりと思惟されたり。

又た大久保の如きも、遺韓大使論に對して、絶對的に之に反対せしにあらず。當時彼は副島の質問に應じて「五十日待たれよ内政整理案の完成するを俟て之に賛成すべし」と云へるに據るも、彼の反対も時機に關するに過ぎず。三條は勿論岩倉と雖も、一旦閣議に於て公然西郷案に賛成したる事實ありしに於て、彼の反対も主義上の反対にあらず。但だ西郷の全權大使たるに反対せしものゝ如し。而して六年の朝鮮問題が、明治初年以來の懸案として、宜しく解決せざる可からざる時機に際合し、結局論議兩派に分れ、閣議の破裂と爲り、其の結果、幾多の内亂を惹き起すの動機と爲りしは、留守内閣派と、遺韓大使派との軋轢即ち西郷派と木戸、大久保派と

の感情衝突、一朝一夕の故にあらず。適ま遺韓大使論の起れるを機として茲に衝突の活劇を演じたるに過ぎざりしなり。

一一 廟堂の立憲思想

明治六年遺韓大使論の中止は、維新の元勳に由りて組織せられたる内閣の分裂を招きたり。其の分裂の結果維新元勳の勢力を兩斷し、之をして朝黨野黨の二大鴻溝を畫するに至らしめたり。朝黨は大久保、木戸を中心として朝に留まり、野黨は西郷、江藤、板垣、後藤等を中心として野に下りたりき。而も野黨の中、政府改造の方法手段に關して、互に其の意見を異にし、其の勢力更に分裂して二派と爲る。國權黨たる西郷江藤の一派。民權黨たる板垣、後藤の一派是れなり。

國權黨に二派あり。其の一は大西郷と共に野に下りたる桐野利秋、篠原國幹、村田新八等が大西郷を圍繞して、私學校を鹿兒島に設け、熾に政府の自屈的外交に反対したるもの。其の一は征韓論に共鳴したる佐賀の有志、江藤新平副島種臣を擁して征韓黨を組織し、征韓論を主張して政府に反抗したるもの是なり。民權黨は片岡健吉、林有造、島本仲道等、板垣退助を推して、首領と爲し、立志社を高知に設け、民權自由を唱道したり。

後藤は、政權奉還を將軍慶喜に勸告したる一人にして、一面には意氣落落たる英雄的態度を具し他面には臨機應變の權數に富める民衆的政治家なりき。彼の野に下るや、民權論を提げて政府に肉迫して其の更迭を促すの最も機宜に適するを察し、「今や遺韓大使論中止の結果、國論沸騰、民心恟々として歸著する所を知らず。苟も政府にして善後の處置其の宜きを得ずんば、國家不測の禍を生ぜんも、未だ知る可からず。若かじ、維新改革の精神に基き、百尺の竿頭一步を進めて國民に由りて立つ所の民選議院を開設し、憲政の基礎を

確立せんには」と。之を板垣退助に謀りしに彼は之に賛成せり。適ま左院議員小室信夫、古澤迂郎、英國より歸朝し、後藤に向て、頻に歐洲各國の立憲政體に則りて民選議院を我が國に開設する必要を説けり。後藤の意忽ち動き、乃ち二人をして民選議院建白の旨趣を起草せしめんとし、之を板垣に紹介したり。

時に片岡健吉林有造の二人、時の政府に平ならず職を辭して野に在り。板垣乃ち二人をして民選議院開設の議を政府に建白せしめんとし、之に語りしに、二人之を辭し、且つ板垣に謂て曰く「民選議院開設論は、國家の重大問題なり。之を首唱し、之を建議するものは、天下の重望を負ふものにあらざれば上政府を動かさず、下國論を導くこと能はず。茲に至りて、民選議院開設の議を建白せんと欲せば、宜しく後藤と謀りて之れが議を決せざる可からず」と。板垣之を納れ、後藤と謀り、其の同意を得、古澤をして、其の文を起草せしめたり。而して其の建議案の成るや、板垣後藤は更に其の文を副島に示し、其の賛成を求めたり。當時副島は立憲政治の主義に對しては一種の見解を有したる政治家なりき。氏は其の建議案を閲し、其の文の旨趣、首として君主專制を廢して之に代ふるに議院政治を以てするに在るを以て、之を難じ、且つ之に謂て曰く「予は君主專制を全然非とする文字に對しては、斷じて之に同意する能はず。蓋し王政維新の大目的は國家の大權を君主に復して、以て君主政治の本體を明にするに在り。若し我 天皇にして親ら神武天皇の事を行はば、全國の臣民誰か皇徳に悦服せざるものあらんや」と。因りて有司專制の弊を指摘したり。板垣等之を然りとし、乃ち、君主專制の文字を有司專制に改むるの修正案を提出して其の同意を求めたり。副島曰く「蘇我馬子の跋扈も、有司專制なり。藤原氏の跋扈も亦、有司專制なり。故に有司專制の弊、漸く甚しからんとするに際し、其の禍を未萌に防制せんが爲に、議院を設立するは大に理あれど、君主專制に論及するは、尊王の大義に於て、之を非認せざる可からず」と。議終に之に決し、其の案成りて、更に江藤の賛成を求めたり。

此時に當り、前東京府知事山利公正、及び前大藏大丞岡本健三郎亦た民選議院論を主張しつゝありしが、板垣等の議に賛成し、是より、後藤、板垣、副島、江藤等共に相會して討論審議し、一面には憂國公黨を組織し、一面には民選議院開設の建議を爲すに決し、九名連署して之を左院に提出したり。實に明治七年一月十八日なり。其の建白は、古澤の起草に成り、副島が之を潤飾したるものに保ると云ふ。其の文に

某等、別紙奉建言候次第、平生の持論にして、某等在官中、屢及建言候ものに有之候處、歐米同盟各國へ大使御派出の上、實地の景況をも御目撃に相成り、其の上事宜斟酌施設認可相成との御評議も有之。然るに最早大使御歸朝以來、既に數月を閲し候へ共何等之御施設も拜承不仕。昨今民心恟々上下相疑ひ、動もすれば、土崩瓦解の兆無之とも難申勢に立至り候儀、畢竟天下輿論公議の壅塞する故と。實以て残念之至奉存候。此段宜しく御評議を可被遂候也。

高知縣貫屬士族	古澤迂郎
同	岡本健三郎
名東縣貫屬士族	小室信夫
敦賀縣貫屬士族	山利公正
佐賀縣貫屬士族	江藤新平
高知縣貫屬士族	板垣退助
東京府貫屬士族	後藤象二郎

佐賀縣貫屬士族 副島種臣

左院御中

民選議院設立建白書

臣等、伏して方今政權の歸する所を察するに、上帝室にあらず下人民に在らず。而も獨り有司に歸す。夫れ有司、上帝室を尊ぶと曰はざるに非ず。下人民を保つと曰はざるにあらず。而も政令百端、朝出暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。言路蔽塞困苦告るなし、夫れ如是にして、天下の治安ならん事を欲す、三尺の童子も、猶其の不可なるを知る。因循改めず恐くは國家土崩の勢を致さん。臣等愛國の情、自ら己む能はず、即ち之を振救するの道を講求するに、唯天下の公義を張る在るのみ。天下の公議を張るは、民權議院を立つるに在るのみ。則ち有司の權限る所あつて而して上下安全其の幸福を受る者あらん。請ふ遂に之を陳せん。

夫れ人民、政府に對して租税を拂ふの義務あるものは、乃ち政府の事を與知可否するの權理を有す。是れ天下の通論にして又喋々臣等の之を贅言するを待たざるものなり。故に、臣等竊に願ふ、有司も亦是の通理に抵抗せざらん事を。

今民選議院を立るの議を拒む者は、曰く、我民不學無智、未だ開明の域に進まず、故に今日民選議院を立る、尙應さに早かるべしと。臣等以爲く、若し果して眞に其の謂ふ所の如きか、則ち之れをして學且智、而して急に開明の域に進ましむるの道即ち民選議院を立つるに在り。何となれば、則ち今日我人民をして學且智に、開明の域に進ましめんとするには、先づ其の通義權理を保護せしめ、之をして自尊自重天下と憂樂を共にするの氣象を起さしめずんばある可からず。自尊自重天下と憂樂を共にするの氣象を起さしめんとするは、之をして天下の事に與らしむるにあり。如是にして、人民其の固陋に安じ、不學無智自ら甘んずる者は未だ之れ有らざる

なり。而して今其の自ら學且智にして自ら其の開明の域に入るを待つ、是殆ど百年河清を待つもの類なり。甚しきは、則ち今遽かに議院を立つるは、是天下の愚を集むるに過ぎざるのみと謂ふに至る。噫何ぞ自ら傲るの太甚しく、而して其の人民を視るの蔑如たるや。有司中智功固より人に過ぐ者あらん。然れども安んぞ學問有識の人、世復た諸人に過ぐる者あらざるを知らんや。蓋し天下の人、如是蔑視す可からざるなり。若し將た蔑視すべき者とせば有司も亦其の中の一人ならずや。然らば則ち均しく是れ不學無識なり。僅々有司の專裁と人民の輿論公議を張ると其の賢愚果して如何ぞや。臣等謂ふ有司の智も亦之を維新以前に視る、必ず其の進みし者あらん。何となれば則ち人間の知識なる者は必ず之を用ゆるに従て進むものなればなり。故に曰、民選議院を立つるは、是れ即ち人民をして學且智に而して急に開明の域に進ましむるの道なり。

且つ夫れ政府の職、其宜しく奉じて以て目的となすべき者は、人民をして進歩せしむるに在り。故に草昧の世、野蠻の俗其民勇猛暴悍、而して従ふ所を知らず。此時に方て、政府の職固より之をして従ふ所を知らしむるにあり。今我國、既に草昧にあらず、而して我人民の從順なる者既に過甚とす。然らば則ち今日我政府の宜しく以て其の目的となすべき者は、即ち民選議院を立て我人民をして其の敢爲の氣を起し、天下を分任するの義務を辨知し天下の事に參與するを得せしむるに在り。則ち國國の人、皆同心なり。夫れ政府の強きは、何を以て之を致すや、天下人民皆同心なればなり。臣等必ずしも遠く舊事を引て之を證せず。即ち昨十月政府の變革に就て之を驗す。岌々乎且つ危哉、我政府の孤立するや。何ぞ昨十月政府の變革天下人民の之が爲に喜戚せしもの幾かある。嘗に之が爲に喜戚せざる而已ならず、天下の人茫として之を知らざるもの十にして八九に居る。唯兵隊の解散に驚くのみ。今民選議院を立つるは、則ち政府人民の間に情實融通して、相共に合して一體となり、國始めて以て強かるべく、政府始めて以て強かるべきなり。

臣等既に天下の大りに就て之を究め、我國今日の勢に就て之を實にし、政府の職に就て之を論じ、昨十月政府の變革に就て之を驗す。而して臣等の自ら臣等の説を信する事愈々篤く、切に謂ふ、今日天下を維持振起するの道、唯民選議院を立て、而して天下の公議を張るに在る而已と。其の方法等の議の如きは、臣等必ず之を茲に言はず、蓋し十數張紙の能く之を盡す所にあらざれば也。但臣等竊かに聞く、今日有司持重の説に藉り、事多く因循を務め、世の改革を云ふ者を目して輕々進歩とし、而して之を拒むに尙早の二字を以てすと。臣等請ふ之を辨せん。

夫れ輕々進歩と云ふ者、固より臣等の解せざる所なり。若し果して事倉卒に出る者を以て、輕々進歩とするか、民選議院なるものは、以て事を鄭重にする所の者なり。各省不和にして變更の際、事本末緩急の序を失し、彼此の施設相見ざる者を以て輕々進歩とするか、是れ國に定律なく、有司任意改行すればなり。此の二者あらば、則ち適さに其の民選議院を立てずんばある可からざるの所以を證するを見るのみ。夫れ進歩なる者は、天下の至美なり、事々物々進歩せずんばあるべからず、然らば則ち有司必ず進歩の二字を罪する能はず、其の罪する所必ず輕々の二字に止らん。輕々の二字民選議院と會て相關涉せざる也。尙早の二字の民選議院を立るに於る臣等皆に之を解せざる而已ならず。臣等の見正に之と相反す。如何となれば今日民選議院を立つるも尙恐くは歲月の久しきを待ち、而後始めて其の十分完備を期するに至らん。故に臣等一日も唯其の立つことの晚からん事を懼る。故に曰く臣等唯其の反對を見るのみと。

有司の説又云ふ、歐米各國今日の議院なる者は、一朝一夕に設立せし議院にあらず。其の進歩の漸を以て、之を致せし者のみ。故に我今日俄かに之を模するを得ずと。夫れ進歩の漸を以て之を致せし者、豈に獨り議院のみならんや、凡そ學問技藝、機械、皆然り、

然るに彼數百年の久しきを積て之を致せし者は、蓋し前に成規なく、皆自ら之を経験發明せしなれば也。今我其成規を擇んで之を取らば、何ぞ企て及ぶ可らざらんや。若し我自ら蒸氣の理を發明するを待ちて、然る後我始めて蒸氣機械を用るを得べく、電氣の理を發明するを待ちて然る後我始めて電信の線を架するを得べきとするか、政府は應に手を下すの事なかるべし。

臣等既に己に今日我が民選議院を立すんばあるべからざる所以、及び今日我國人民進歩の度能く斯の議院を立つるに堪ゆることを辯論する者は、則ち有志の之を拒む者をして口に藉する所なからしめんとにあらず、斯の議院を立つる者は、天下の公論を伸張し、人民の通義權利を立て、天下の元氣を鼓舞し、以て上下親近し、君臣相愛し、我が帝國を維持振起し、幸福安全を保護せんことを欲してなり。請ふ幸に之を擇び給はんことを。

民選議院開設論の起るや、決して一朝一夕の故にあらず。幕末以來、學者論者の之を唱道したるもの多きは勿論。後藤象二郎、江藤新平等の如きは維新當初の憲政首唱論者にして、江藤は明治三年の交。三條首相に建言し、憲法會議を興し、國會を開設すべきことを論じ、明治六年左院に於ては國會開設の調査を爲したり。

六年政變の結果、西郷、垣板、副島、後藤等の野に下るや、朝野の人士、皆彼等の一舉一動如何に注目し居たる折柄、一朝、民選議院開設の建白書天下に發表するに至りしかば、世人は青天霹靂の觀を爲さざるはなく、且つ當時の新智識者流洋學者派なるものは、平生、講ずる所のものは、法律經濟工藝等に在りて、政治學の大本を究め之を實際に應用し、以て經國濟民の計を講ずるもの極めて少なりしが故に、此の建白に對しては、大抵、後へに瞠若せざるものなかりし程なりき。而して民選議院論は、一時、朝野を震撼せんとするの勢ありしも、一方に於ては、建白公表に先だつこと三日、岩倉具視が赤坂喰噓に於て土佐派の壯士に襲撃せられたる事件あり、

尋て民選議院開設建議署名の一人たる江藤新平が、征韓黨の擁する所と爲りて兵を佐賀に擧げたるあり。他の一方に於ては、官僚派の議院尙早論を唱へ、専制政治維持論を唱ふるありて、爲に政府の省する所と爲らずして止みたり。然れども、天下多數の人をして民選議院開設の必要を認めしめ、國論喚起の動機と爲りたるは、此の建白の効果として、後藤、板垣、副島、江藤等の功を多とせざる可からず。

三 政黨の端緒

後藤、板垣、副島、江藤は、小室、古澤、由利、岡本等と相會し、一方には、民選議院開設の建議を上ると同時に、他方には政黨を組織して天下の輿論を喚起せんことを期し、同志集合の俱樂部を創立し、名けて「幸福安全社」と稱す。由利は、其の郷人小笠原某等を誘ひ、小室は徳島人井上高格等を誘ひて來り、又た松山人長屋忠明、土佐人福岡孝悌、奥宮懋齋、坂崎斌等を首とし、其の他の有志之に加盟するもの少なからず。福井縣人時田魯、幹事と爲り、専ら其の事務を管理したり。

斯くて同志の團結成るや之を名けて「愛國公黨」と稱し、後藤、板垣、江藤、由利等、副島の邸に會して愛國公黨本誓署名式を舉行したり。實に明治七年一月十二日の夜なり。

四 民選議院設立の論争

民選議院開設の建議及び愛國公黨の組織、天下に發表せらるゝや、是れ迄、殆んど政治の得失を度外に附したる國民は、長夜の迷夢

より覺醒し、朝野の學士論客、競て民選議院の利害得失を論じ、輿論蔚然として興れり。是に於て乎、政府當局者並に官僚系に屬する學者は僅に口を「議院尙早」の四字に藉りて之に反對し、其の潮流を支へんとせり。

民選議院開設の建議に對し、「尙早論」を唱へて、眞先に之に反對したるものは加藤弘之（男爵樞密顧問官加藤弘之）なり。加藤は當時獨逸學の泰斗として推され、當時職を宮内省四等出仕に奉じたるもの。彼の尙早論は其の主義主張に於て、信念に於て見るべきものありしも、其の論は少なくとも、或る意味に於て、政府黨の意志を代表したるものなり。蓋し「議院尙早論」は政府が議院開設論に對する唯一の武器なりしなればなり。而も其の議院尙早論に賛成し、板垣後藤副島等の議院開設論を駁したるものは官僚派に屬する森有禮、西周等の新智識者なり。

又た民選議院開設論の建白に對し、首として之に賛成したるものは大井憲太郎（當時馬城臺次郎と稱す）なり。而かも當時職を政府に奉ぜしも、極めて公正無私の見を持し、其の建白に賛成したるものは、津田眞道、西村茂樹等の學者階級なり。茲に議院尙早論と議院開設論とを左に掲ぐ。

民選議院尙早論

加藤弘之

本文臣等愛國の情已む能はず乃之を振起するの道を講求するに唯天下の公議を張るに在るのみ云々、天下の公議を張る苟くも有志者の切に望む所なり。蓋し國家治安の基礎を固ふする公議を張るより善きはなし、然るに其の間に一難事なき能はず、何をか難事といふ、即ち公議必ずしも至論明説ならざるを云ふなり。歐洲文明開化の各國に於てすら、尙且或は之を免かる能はず、況や開化未全の我國に於てをや、蓋し議院を設立するは、専ら國家治安の基礎たる制度憲法を制定せんが爲めなり。而して制度憲法を制定するは、

先づ邦國今日の状態人情を詳察して、此の世態人情に恰當適切な者を撰ばざる可からず。然らざれば所謂方底圓蓋決して眞に治安の基礎たる制度憲法と稱するに足らざればなり。凡そ我が邦今日の世態人情に適切恰當なる者を撰ぶ、獨賢智者の能く爲す所なり、故に歐洲碩學の言に云ふ、議事院に要する所は通識なり、司法院に要する所は公道なりと。然るに公議は公道に易く通識に難き、是れ古今の通患なり、夫れ公議の通識に難きは何ぞや、蓋し庶智不學の民多きを以てなり、英人の言に云ふ、全歐各國中制度憲法の眞に邦國に恰當適切な者は獨り我が英國のみ、他國の制度憲法の如きは徒らに紙上の制度憲法たるに過ぎずと、是れ英人の誇言に出で、其の過當なるは固より言を俟たずと雖も、蓋し亦此理勢なきに非ず、是れ他なし英の議事院は賢者智者多くして、實に邦國の恰當適切な制度憲法を制定するに足ると雖も、他各國の議事院は蓋し之に及ばざるなり。然るに吾國開化未全の人民を擧て天下の事を協議せしめ、而して其の公議を採て天下の制度憲法を制定せんと欲す。恐くは木に縁りて魚を求むるに類せんのみ、普國先王非的利第二世（在位一千七百四十年より同八十六年に至る）は曠世の英主にして、當時君主政權の政各國に行はれ、時賢も多きは之を以て是とする世に在て獨り專權の不是を辯論し、務めて民權を擴張するの説を首唱し、且つ自ら云ふ、人君たる者は國家第一等の大臣なり、敢て恣に臣民を制馭す可けんやと、是に於て自ら制度憲法を改正して君權を限制せしかば、後世之を稱して歐洲政治一變の鼻祖となす。然るに此王にして當時遽に民選議院を興すなく、獨り政權を掌握して特裁の政を施せり。蓋し其心決して政權を恣にせんと慾するにあらず、唯當時普國人民の開明未に至らずして、政に參與するの識見未だ足らざるを以てなり。又た魯國今時猶ほ未だ實に民選議院を設立せず、是れ又其人民預政の識見未だ足らざるに由るなり。然るに吾邦にして魯國の猶ほ未だ爲さざる所を行はんと欲す、抑も難い哉。吾邦人方今漸く文化に向ふと雖も、農商に至りては多くは猶依然たる昔時の農商にして、庶智不學自ら甘じ、敢

振起するを求むるに至らず、唯士族に至りては大いに之を憂るが如しと雖も、然れども稍事理を解する者は恐くは僅々のみ。故に例へば政府の何者たる、政府收税の權利何の理に出る、臣民軍役の義務何の理に起る等、凡そ淺近平易の事と雖も、猶解する能はざる者十の八九に下らず、豈に懼れざる可けんや、然るに今是等の情實を察せず、一涯に民選議院を設立すれば、其公議決する所の果實は恐くは愚論取るに足らざる者のみならん、愚論猶ほ可なり、或は之に由て國家の大害生ぜざるを保つ能はず。凡そ人民知識未だ開けずして先づ大に自由の權を得る時は、之を施行するの正道を知らずして、之が爲めに却て自暴自棄に陥り、遂に國家の治安を害するの恐れあり、豈に懼れざる可けんや。歐洲近今の碩學鴻儒、民選議院の開化國に必要にして、未開化國に害ある所以を論ぜざる者なし、就中獨逸人ビーデルマンが著す所の政學書中に論ずる所、文簡にして意盡せり、因て左に其の大意を摘譯して、僕が論旨の杜撰に出でざるを證す。其の文に云ふ。凡そ久しく國家を維持するに足るべき制度憲法を制定せんと欲せば、必ず先づ其の時勢人情等に恰當適切なものを撰ばざる可からず。蓋し獨り文明開化の國に恰當適切なべき制度を以て、之を施す時は恐くは實に公益なきのみならず、却て患害を生ず可し、古來仁徳ある君主及び公直なる臣民等、其近隣の國に於て制定せる制度憲法の頗る仁善良正にして大功益あるを羨み、直ちに之に倣て自國の制度憲法を制定し、而して遂に其治安を誤りし例、儘之あり、其心は全く憂世愛國の至情に出ると雖も、唯彼我の時勢民情の相異なる所以を詳察するの智足らずして、事を處するの輕率なるが爲めなり。但し又一方より考れば、凡そ各國の政令相共に歸向する處の中心あり、故に各國の開化進歩するに隨て其政令早晚此中心に歸着するや必然なり。議院を設け人民の代者を擧げて政を議する制度の如きも必ず先づ此一理に由て議せずんばある可らず。按ずるに各國時勢民情の相異なるに及び各國政令の相共に歸向する中心あるを云ふ。何れの人民に論なく、文明開化の域に至れば必ず此制度を制定せずんば有る可

らず、然れども文化未だ全からざる國に於て遽かに此制度を制定せんと欲し、或は各國共に此制度を全く同一に爲さんと欲するが如きは甚だ謬れり。是故に此制度を制定せんには必ず先づ時勢民情を詳察して、之を制定するに至當なる時と及び其至當なる度を測定すること甚だ緊要にして、此事は獨り賢明の能く爲す所なり。若し至當なる時未だ至らざるに先づ此制度を立る歟、若くは其度甚だ過ぐることあるときは、未開の人民其受くる所の自由の權を正道に施行するに堪へずして、却つて自暴自棄に陥らざるを得ず又若し至當なる時既に過ぐるに猶此制度を立ざる歟、或は之を立つるも其度甚だ及ばざる者あるときは、既開の人民束縛羈絆に堪ゆる能はずして、遂に擾亂を醸すに至る必然なり豈懼れざる可けんや。

本文學且智而して急に開明に進ましむるの道即ち民選議院を立つるに在り云々。然るに遽かに民選議院を立つるの弊害以上論ずるが如し、焉ぞ開明の益を得るに暇あらんや。

本文、甚しきは今遽に議院を立るは天下の愚を集むるに過ぎる耳と謂ふに至る、噫何んぞ自傲の甚だしくして人民を視るの蔑如たるや云々。是れ一理なきにあらず、今日要路の有司と雖も亦未開の人たるを免れざる固より論を俟たず、然れども僕が知る所聞く所を考ふるに、今要路有司の外に學識卓越なる俊傑を求むるも、怒らくは數十名に過ぎざるべし。

數十名の俊傑あるも、未だ以て人民の聲價を増すに足らず未だ以て人民の開明を稱するに足らず、蓋し政府自傲の心蔑如の意あらざるも、姑く天下の事を以て自ら任せざるを得ざる所以なり。本文政府の職宜しく奉じて以て目的となすべき者人民をして進歩せしむるに在り云々、此論誠に然り、吾邦實に草昧にあらずと雖も、開化猶淺きが故を以て、人民の從馴實に過甚なり、是眞に憂ふべし、然りと雖も政府能く人民をして敢爲の氣を起し、天下を分任するの義務を辨和せしめんと欲するも、決して唯議院の設立に由て

得べきにあらず。

殊に學校を興し人才を教育するの漸に由るべきのみ。普國今日人民自主の心敢爲の氣旺盛にして遂に其國をして歐洲中の雄強國と成さしめしは、決して唯夙に議院を設立せしに由るにあらず、殊に非的利第二世以來政府心を専ら人材の教育に盡せしに因るなり。本文政府の強き者云々、此一條間然すべきなし、然れどもこれ亦遽に議院を設立するも其益なかるべし、唯遽に人材教育に心を用ひて以て議院を設立するに足る可き開明國となすに如かず。本文、臣等既に天下の大理云々、改革誠に善し、然れども改革を急にせんと欲する必ず輕々進歩の弊なき事能はず、寧ろ持重鋭を養ひ務めて漸を以てするに如かず本文輕々進云々、民選議院なるものは事を鄭重にする所の者なり。云ふは可なり、然れども今急に民選議院を立つるの議を起すは輕々進歩の誹を免る能はず、其理は上に論ずるが如し、末條の可否は以上論に由て大抵明白なるべし。

附言、卑見の大意を述べて閣下等に質す大凡此の如し。閣下等幸に教示を垂れよ。但し今此高論ある蓋し他日議院設立の萌芽なり、是僕高論に於て疑團なき能はずと雖も、亦に之を喜ぶ所以なり。因て考ふるに方今政府は姑く特裁の政を施さざることを得ずと雖も、元來民の爲に政府ありて政府の爲に民あるにあらざるの眞理を忘失するなく、偏に非的利の公心を以て自ら政權を限制し、務めて民の私權を伸張せしめ、言路を洞開し、教育を勸勵し以て吾邦をして速に開明國とならしむるを要す。且つ閣下等の論に由て考ふるに、今既に某二三縣に於て爲せしが如く、姑く府縣にて士族並びに平民の中等邊より選舉を以て府縣内に小議院を設立し、唯其府縣内の事を商議せしむるの舉あらば如何。但し議院を取捨するは姑く知事令等の權にあるべし。然れども是亦希望するが如き功益あるや否、或は却て害あるべきや、僕未だ之を考定する能はず、閣下等並に大分君子の高論を俟つ。

加藤の尙早論を唱ふるや、世論は、之を指して曲學阿世の説として之を嘲笑せり。板垣、後藤、副島等は、此等俗論にて世人を惑はすことあるを慮かり、古澤滋をして其の辯駁書を草せしめ、其の説を辯駁せり。

加藤君足下、前日示さるゝ所の民選議院疑問一冊、反覆熟讀、足下の用意良苦なるを知る、實に吾輩に於て厚贖と謂ふべし、若し措て答へずんば足下の意に負かん、因て鄙見を具し以て之を左に陳す。

足下獨逸人の言を摘譯し謂ふ、大凡政府の體裁を論ずる者先づ須く其國進歩の度及び其形勢如何を審にすべし云々、是れ歐人の所謂千八百年代學問の千七百年代に勝るものなり。吾輩の斯議院の宜しく置可を言ふや、我國今日不得已の情形に出づ、亦自ら謂ふ千八百年代の言を爲す者なりと。我國今日一新政府の組立皆其下に由て起る者なり、其切めや草莽浮浪の士首唱して藩士を動し、藩士亦其藩侯を動し、同心協力、幼冲の 天皇陛下を奉戴し、以て徳川氏の政府を踏し、政體を造り首として御誓文を掲げ、萬機公論に決すべきを以てし、別に各藩をして議員を出さしめ、以て天下の事務に干與せしむ、於是乎版籍奉還の舉、府藩縣三治一致の制、廢藩立縣の偉績を奏するに至る、用皆其下の群議に執り、天下の公論に決し、朝廷は則ち其の成を收む、是を以て其業たるや宏且大、而して其功を成すや易且速なり。廢藩の後、公議人復た置かず、其勢有司專制の弊なきに非ず、政府輓近の體裁英語の所謂「オリガアキー」なるものと尤も相近似するを致す、斯弊救はずんばある可らず、今足下普王非的利第二世の故事を援ひて、君主專政の利を證す、我國の事情に切なるの喩に非るなり。ミル氏嘗て曰く、シャアールマン、ピートル及英のウキリヤム第三世等の事の如き、皆當に史中の變を以て之を見るべし、若し政體を造るに方て徒らに如此の人物出づるを期して、其變に適せん事を以つてせば、眞に愚の甚しき者ならん、矧んや是等人物果して出づ、則ち縱令專政の制度に因らざるも亦能く其大事業を成し得べし、非的利第二世は

蓋しシャアールマン、ピートル、ウキリヤム第三世の流なり。夫れ我 天皇陛下の英明神武、他日將に必ず非的利第二世等をして獨り美を歐洲に擅にせしめざる者あらんとす、然りと雖も陛下の春秋猶弱し、則ち今日事務の急に應じて我國を維持提起するの道、獨り民選議院を立つるに在る而已。且夫れ今日斯議院を立つるの意、蓋し藩別議院を出すの制を收拾完備し、御誓文の意味を擴張せんとする而已。今我國の時勢を措き、唯非的利第二世の故事を援くは、是却て彼の千七百年代政事學者の誤りを襲ふに非ざるなきを得んや。況や非的利第二世の太子たるや、佛人ヴアルテル氏は實に千七百年代改正家の首唱にして、其説の廣布するや、一時殆ど歐洲各國の君相一として改正者に非るなく、乃ち羅馬法皇の如きも亦改正の法皇たるを致せり。是を以て當時其政を改正せし者の所以を見る可し。足下云ふ、我國にして魯日の猶未だ爲さざる所を行はんと欲す抑も難い哉と。夫れピートルの特起せしより以來、魯國政府は常に英武の皇帝、賢明の宰相あつて其手に斡旋せられ、其君相國勢相適して自ら其政體を成す。足下若し是の魯國政府の由て立つ所を詳にせば、則ち自ら民選議院を缺く所以を知らん。夫妄りに他國の政體を可否評論して我説を主張するは吾輩の好む所に非るなり。それ亦た之を評する言あり、吾輩復た必らずしも之を引かず、若し夫れ單に人民進歩開明の度を以つて之を言はば、魯の人民豈獨りギリキの人民に譲らんや。然るに魯は則ち民選議院を缺いて置かず、ギリキは則ち議院の利に便る者、其勢之をして然らしむる者ある耳。足下云ふ我國一般人民の景況此の如し、故に斯議院を立つる未可と、吾輩は則ち謂ふ、一般人民の景況若し果して如此ば斯議院立てずんばある可からずと。足下又云ふ。我人民の從馴過甚なるものは開化猶淺きが故なりと、是れ怒くは其言を顛倒する者ならん、何んとなれば則ち開化猶淺き者は人民從馴過甚なればなり。其從馴過甚なるものは從前の制度の過ち也。ミル氏曰く、人間の進歩は其不満足の功なりと。又曰く、今一の人民あり從馴過甚、事々物々其政府に依頼し乃ち其疾苦する所あるも忍で

之を受け、天災逃る能はざる者の如し、復安んぞ其能く進歩して以て其開化を上げずを望ん哉と。是故に我一般人民の地位を進めんと欲す。則其從馴過甚なる者を棄て、其固有敢爲の氣風を復せしむるに在り、而して之を爲すの道唯彼の從馴制度の過ちを挽め、其れをして我人民の進歩に適當せしむるに在る而已。

ミル氏云ふ蠻野の人民に要するは専裁の政府なり、奴隸人民に要するは師傅の政府なり、人民の地位已に是よりして上る者は、獨り議院の政體之れに適用する而已。一つの人民に適當する政府の體裁を定めんとするに就き、其尤と緊要なる者は、從前其人民の其次の地位に進む者を障碍して其路を塞ぎ居る者は、何者たるやを看出し來るに在り。

今若し一つの政府の體裁、此人民をして甲の地位より乙の地位に進歩せしむるに適當するも、過つて其内の地位に進むことを害するあらば、則ち此體裁は猶人民に不適宜の者なる可し。昔エジプト人の「ハヤラアキー」及支那人父母自ら居るの政府、當時にあつて適當の者なり。然るに此兩國人民の進歩茲に遏止して後進む能はざる者、則ち其制度の過ち人民をして其腦力上の自由及び其獨立上の氣象を失はしめしが故なり。

古來人間進歩上に在て其尤も有力なる者は、政府威權の本性を其人民の上に用ゆる度、國中權力の分賦及び命令服從等の景況なり。故に人間進歩に關係あるの尤も大なる者は則ち政府なり、唯然り若し政府其人民の進歩に應じて其政體を適宜ならしめずんば、則ち其人民の進歩因て以て之れが爲めに遮斷せらるべし。政府功德の第一なる者は其人民をして其次の地位に進み得せしむる者です。政府唯能く此功德を做し得ば「政府唯能く此功德を做し得ば」則ち縱令、他の缺あるも亦恕す可きのみと。且つ一般人民の景況此の如くにして復た進まざらしむ、則ち人民愛國の必亦た其本然の良を遂ぐる能はざるものあり。

ミル氏云ふ、何れの處を問はず人間仕業の限制せられたる處に従ふて即其感覺を狹隘にす。夫れ感覺の養は仕業に在り、一家内の相愛する者と雖も、亦其相互に助くる所の事物上に憑仗す、今此人民をして其國の爲め一も取扱ひ得ることならしむ、則人民の其國に於る恬として相關せざる者の如し、語に有之「君主専裁の下唯一個の愛國あり、即其君主是なり」と。是れ其人民をして全然服從せしむるの弊を切言せし者なり。

我國今日の勢斯議院の設立に急なる所以、及我人民の地位復た師傅の政府を要せざる者は、已に之を辨せり。且夫れ前日我人民の力現に能く一新の政府を立つ、何ぞ獨り此の議院を立つるに堪ざらんや。ミル氏又人民景況上に就て三大要件と爲す者あり。

第一 人民其爲めに立てらるゝ所の政府の體裁を喜ばざるも亦強ひて之に抗せざるを要す。

第二 人民此體裁を保つに就て其緊要なる者を做し得るを要す。

第三 人民其體裁の趣意に充るが爲めに其緊要なる者を做し得るを要す。

今若し一の政府の體裁を主張するものあり、右第一第二の景況、其人民に存在せんことを要とし、而して第三の景況亦た粗存在せんことを要せば、則其論は他の敢て非難し得ざる者なる可し。

今夫れ斯議院を立つるも、亦遽かに人民其名代人を擇ぶの權利を一般にせんと云ふには非ず。士族及び豪家の農商等をして獨り姑く此の權利を保有し得せしめん而已。是の士族農商等は則ち前日彼の首唱の義士維新の功臣を出せし者なり。

抑も吾輩の左院に建言せしより、世の之を評論して以て新聞紙に投書する者亦尠しとせず、然るに未だ曾て一人の斯議院の設立を以て非とする者を見ず、其可否する所徒に吾輩身上の事に止る耳、是に依て之を觀れば、亦右三要件の我人民に存在するの一斑を窺

ふ可し。因て之を取捨し、以て其の形を造らしむ、則ち其散漫たる者統一する所あり、而して其動て政府と相互に其用を爲す者、將に臆測の外に出んとす。維新の始め天上の之を拒む者多く、其言ふ可く而して行ひ難きの説を以てす、然るに一旦之を發するに及んでや、其説乃ち沮敗す、世の一二口舌を以て争ひ難き者、乃ち如茲矣。今吾輩の斯議院に於ける復た焉んぞ躊躇せんや。

足下斯議院の立つを危ぶむに其愚論の府たらんを以てす。是れ未だ必ずしも然らず、今斯議院立つ則ち其擇ばれて以て議員となる者、朝野の人之を共にす可し、則ち復た焉んぞ其賢智の府たらざるを知らん哉。且つ一旦公衆衆人の前に立つ、則ち内自ら省する所あり、而して其有能者に譲り復た噉々絮語すること能はざる者人情必然の勢なり。乃ち英佛議員の如きも其黨派中先輩に従ふ者常に七八、吾輩故に謂ふ、足下獨り其愚論の府たるを危ぶむ者怒くは思ひ未だ此等の事に及ばざる耳。

足下謂ふ、且斯議院を措いて専ら心を教育に用ふ可しと、夫れ人民の爲め其教育を主張する者は固より仁人の事なり、然るに足下の會て一言を人間腦力上の教育に論及せざるは何ぞや。故に今又ミル氏の言を引て以て足下の参考に供す。且つ吾輩所謂人民をして學且智而して急に開明に進ましむるの道は即ち民選議院を立つるに在る所以の理を明白にせん。

人の一生涯中に其思想及び感覺を大にするの機會に遇ふ事甚だ稀なり。

人の仕業は毎日大抵一様の事を繰り返して、日用の急に應ずるに其の仕慣れたる所の手段を以てする者なり。故に其之を做し來る手続き或は其造られたる所の物件等も會て其人の腦力を思想感覺に啓き進むこと莫し、縱令有益の書あるも其人の之を讀むの志を起すに由なし、且つ人の自己より勝れたる教育ある人に接近し得るは甚だ難きものとす、此故に宜しく人民をして公共の事務を取扱はしめ、以て是等の不足を補ふを得せしむ可し。如此して以て行ひ、公共事務の其人民に付與せらるゝ者多く且つ大ならば、則ち是を

以て此の人民をして教育あるの人民となす可し、昔者アゼン都士の知識遂に他の人民に勝りし者、獨り其腦力を廣大に得しが故のみ。自由政府功德の中に就きて其殊に尤なる者は、智覺と感覺の教育なり。苟くも人民其國の事務に干與し得るの効此如く大なる者あるを疑ふ者あり、然るに苟くも人民の智覺及び感覺の教育と云ふ者、突々として夢幻の如き者に非る外は、唯能く此路に由つて來り得可し。何人を論ぜず、若し此路獨り能く此二者を來す所なる者を難する者あらば、余は唯其佛國名士トクヴェル氏の有名なる著述を一閱せんを乞ふ可し。

人民教育の事を主張する者屢々言へるあり曰く、獨り書籍議論を以て教育とするに非ず、人間の事は譬へば則ち算術の題の如し、決して空理に非ず、故に仕業は只能く仕業に由つて學び得らる可しと。此言や之を反覆する宜しく益々頻數なる可し。

今兒童の姓名を記するを學ぶや、其習慣の効に由る然るに人の其腦力を用ひ及び其行を導くに至つては則ち獨り只教に由て之を學び得可き歟、人の學校に在て學ぶ所の者固より貴重とす、然るに獨り是のみには非る也。其の教育の尤大なる者は其平生の業に在り。夫れ人間の活計以て其良能を相發するに足るもの殆んど希なり。而して汲々乎其日に従事する所の活計遂に其著意する所及其謀る所の利只其一身一己の上に止り、公共の事を視る恬として相關せざる者の如く、以て其人をして私慾怯懦に陥らしむるに至る、是故に宜しく之を權衡するに一箇反對の物を以てす可し、即ち人民をして公共の事務を取り扱ひ得せしむるに在り。故に其公共の事務を取り得る大小多少の度に視て、人民其思想感觸の狹隘を脱し得可し。於是乎人民始めて萬種の事を習知するを得、其腦力は以て廣大を致し而して其一身一己の外、天下復た一般の公利なる者あり、及び一般の幸福は皆に其身の幸福たる而已ならず、即ち其一個の勉強に憑る等の事を覺ゆるを致す可し。故に凡そ知識を其人民に遍くせんと欲するの志は、唯公共事務及び天下の事を可否し得るの

權利を以て其人民に推し及ぼすの度に視て成就す可し。

足下又斯議院を立るを急とするを以て輕々進歩の譏を免かるゝ能はざる者とす、足下今此文を熟讀し之に參するに天下方今の時勢を以てせば、則ち亦自ら然らざる者を見る可し。

嗚呼足下の厚意此疑問を示さざるに非ずんば、則ち安んぞ能く其相發するの深きを得ん。是れ實に足下の賜なり。歐米の事情は足下の暗する所なり、國家の改正進歩を助くる者は、學者の力常に多きに居るのみ、今吾輩の足下に望む所亦た豈啻此疑問に止まらん乎哉。

議論の周密精到なる、尙早論を排撃したるに對し、加藤は一矢も之に報ゆることなくして止みたり。時に大井憲太郎も亦馬城臺次郎の變名を以て、加藤の尙早論を駁し、辯難數回に及べり。吾人は茲に馬城の加藤に對せる駁論、及び加藤の馬城に答へし論文を左に掲げて、以て當時の時論如何を窺ふの參考に供せん。

民撰議院設立の議に就き讀んで加藤公閣下に質す。公は不急の民撰議院を設けて輕々進歩の弊あるを論じ、勉めて持重説を養ひ人材を教育するの是なるを説く、人材教育の論固より間然なし、只其民撰議院を置くと否とに於ては、鄙見全く公の論と相反す、請ふ教示あらん事を。

馬城臺次郎

加藤弘之に與ふるの書

本文の意今遽に民撰議院を起すも其論愚にして取るに足らざるを論ずるに在り。然りとせんか之を然りとして事を遙遠に期し、人

民開智の日を待て之を起さば、遂に其間有司專制の弊尙相繼ぎ、恐くは士民政令を信ぜず。政令を信ぜざれば、則ち人民之に服せざるの弊なきを得ず。故に曰く民撰議院を起さば假令其論取るに足らずと雖も士民をして親しく其議に預らしむるを以て、士民安じて其令を信じ其令に服す可し。士民其令に服せば國以て安し。即ち所謂人民自ら制定して自ら守る所以なり。故に曰く必ず人民に議するを以て非なりとせず。

本文履歴を普國に假り、論理上に據りて尙民撰議院設立の早きを論ず。其論亦可なり。蓋し必ずしも論理上に膠柱し普國の沿革に拘泥する能はざる者あり。曰く普國フレデリック王改革の時に在ては、尙諸國獨裁の政行はれて民其政に安んじ、民撰議院設立の事を願る者なし、然れども今我國に於ては現に各國の制度を混同して立法上に關する法制と行政上の成規とを合同して、其區別立たず、加ふるに萬幾有司二三の徒の決を以て、予は民撰議院を設けざるの是なる所以を知らざるなり。

本文一旦議院を開き會議の制を立る後、若し十議中八九愚なるに方て政府之を取らざれば、倍々人民有司の專制を咎むるに非ずや、云々不肖の見大に反す。若高論十中八九愚に居るとせんか愚論何ぞ之を聽用するの理あらん。又有司專制以て愚論と爲すも其理の歸する所豈之を聽用せざるを得んや、彼此の公判を爲すには參議院の如きを以て固より之が制を立ざる可からずと雖も、即ち民撰議院は彼是の弊なからしむるに在るに非ずや。故に曰く民撰議院は行政權をして横恣ならしめず。有司專制の弊を撓るに宜しく。民情の壅塞鬱屈を開き上旨をして下に達せしむるに益ありと。若し高論の如く其愚論を恐れて之を起さざれば、其愚論止まん歟、只暗に不肖を唱へ、遂に國家の患難を醸す可きのみ。況んや方今の人民亦或有司と大に徑庭せざるに於てをや、不肖其或は人民中有司と徑庭せざる者あらん歟を恐る。高論の如く愚論果して多く、有司の外人無き時は憂ふ可からずと雖も、事情政體を見聞し、黑白水

炭の辯を爲す普國當時の人民と差あり。恐くは有司の専制に堪ゆること能はざる可し。是即ち古今時勢の相均しからざると國其國に依て人情の異同ある所なり。故に曰く民政議院の擧たる眞に之を機變の妙法と云はざる可からずと。

本文、民政議院を開き公議を取るも其公議必ずしも至論明説ならざるの難あり、文明の各國尙且之を免かれず。況んや我未開の國に於ては云々。其論を免かれざる所なり。蓋して至論明説固より之を我未開の人民に望む可からず。愚論用ゆるに足るもの果して少なからん。然れども我國今日の世態人情に恰當適切な制度憲法を制定するに於て、有司二三の徒の決を以てするの是なるを知らず。愚も亦宜しく之に預り、其所見を述べしめ、而して後に政府之れを所裁し、以て確定せば民能く其制度憲法を信奉するの理なき事能はざるのみならず。若しくは大に有司をして世態人情に通曉せしむるの益なしと云ふ可からず、故に曰く民政議院の設立必ず非ならずと。

本文人材教育の専務と爲す可きを論ず、然らば民政議院の設立を不念とし之を専らにせんか蓋し人材教育の功たるは之を遠達に期すべく一朝容易に其績を見る事能はず。是を以て今日民心の向背を定め之を固持せんとする特り教育の急を首唱して願ざるを得んや。故に曰く此時にして此舉ある亦機宜の法と云はざる可けんやと。

本文今日邦國の世帯人情に恰當適切な制度憲法を撰ぶ獨り賢智者の爲すを得る云々。此論亦然り。争か愚不肖者の能く爲す所ならんや。蓋し有司のみ必ずしも賢智者にして眞に其任に當ると云ふを得ず。故に暫く愚民をして宜しく其意見を交へしめ、利害得失相秘する事なからしめ、恰も世態人情に的確定なる者を撰ぶの道を推究す可し。有司固より人民の上に在り。世態人情を量料するに人民は實に愚只之を守らしむ可し。之を知らしむ可からずと爲すは恐らくは非ならんか。但し我當時の民政議院即ち方今の士民

を以て法律制定の事を専裁せしむるに非ず。只其法案を議し、其意見を聞き、若し誤て政府の法案を非難するあれば、該官能く之を辯論主張して承可を取る可しと雖も、民政議院態に其權を以て政府に抗するの理なし。民權旺盛なる國の議院と雖も、稍々其權利を制限する所あつて猥に之を犯し、政府に矛盾する者を許さず。況んや我羈束の人民固より此理ある事なし。只或は却て善美を得る事あらんのみ。假令ば民間の利害地方官その責に任じて漏ることなからん。蓋し世襲の士族は人民と相離居すること多年。全く其利害を異にし、曾て人民の痛楚を知らず。亦眞に人間の利害に疎く、農に商に其謀るや迂遠なり。維新以來撰擧發用を得しもの首として民間の利害得失に注視するも、國內諸州の利害たるや恐くは尙盡さざる所あり。今之を證せんは民政議院の議士に薦擧するに士族のみを以てせば、全國一般の利害を量料するに足るもの有りと雖も、一州の利害を知らざる者多からん。是即ち生來範圍の中に住して人民間の情に疎きに因る、故に曰く方今人民も亦必ず其所見を發表せざる可からずと。

本文我國方今漸く文化に向ふと雖も、農商多く昔日の農商にして、不學無智自ら甘んじて振起するを求めず。唯士族の徒之を憂ふと雖も亦僅々にして政府の何物たる、臣民の何物たる、民に納税軍役の義務ある何に因る事知らず、云々。亦間然する所なし。眞に憂ふ可き極と云ふべし。蓋し之を人文開明の日を待て知ると云ふ可けれども、抑も今日の有司も亦或は其職に任じ、其の事に就て初て税の何物たる政府の何物たる軍役の義務何の理に因るを識得せし者亦少なしとせず。然らば則ち此等の事を見聞せしめ、初て其理を了得せしむる時は、亦上意能く下に行はれ民心狐疑する所なし。固より我未開の人民をして民政議論の眞面目を得せしめんとするの難事は言を俟ずと雖も、只上下の情相壅塞する所なからしめ國治に裨益あらしめば如何。

本文政府能く人民をして敢爲の氣を起さしめんと欲するも、決して唯議論の設立に出で得可からず。殊に學校を興し以て行ふ可き

時は之を行ふ事常道なり。必ずしも人材教育宜しく之を専らにす可し。議院を開て以て人民の國事に干與するの權利あるを知らしめ延て本文に充する所の自主の心、敢爲の氣を振起せしむ可し。若し人あり議して云はん。未開の人民をして敢爲の氣を促し起さしむれば恰も孺子に刀劍を與ふるが如しと。孺子に與ふるに刀劍を以てせば必ず不慮の患難ある可しと雖も、既に我羈束の民に、人民自主の權利あり。故に政府の國家に對する義務亦權利あるを知らしめ、以て敢爲の氣を挑撥するも民焉ぞ無道を以て政府に迫らん。政府焉ぞ之を制するに術なからん。只或は血稅誤解の暴動の如きを未萌に防ぐの良器たらんとす。何んとなれば凡て暴動は上旨下に達せず。民其旨の何に因るを知らず、官舎の不是なるかと疑ふの念より起る者多ければ也。

本文改革を急にせんと欲する、必ず輕々の進歩の弊なきを得ず。寧ろ持重鋭を養ひ、務めて漸を以てするに如すと。其の持重鋭を養ふの道如何せば可ならん。方今人心恟々或は政令の有司の擅斷に出るを疑ふ者亦たなしとせず。殊に理財上の事、稅則其他政府の處置如何に關し、既に有司の中にも尙且つ各自の所見を自信して非を該路の有司に嫁し、暗に不服を唱ふる者あり。政府の命令必ずしも盡く民の信服する所にあらず。今を以て之を測る時は、政府を怨望するの徒從て増加し、恐く不測の難を生じ、持重鋭を養ふ事を得可きや。治安の日を保持する益以て難からんとす。是れ不肖か大に恐懼する所にして、此弊何に起るか。是れ殊に其政令の公に出でざるに因る所なり。故に不肖今日を以て惟ふに民政議院を設立し下情の鬱屈を伸し、將來萬機の政をして公議に出さしめんと期して、更に公議を張るの舉あらば、亦圖治を補ふに庶幾からん。故に曰く持重鋭を養ふの説亦大難なりと。本文今、直に民政議院を置くを要せず。只或は地方會議を設けば如何。但し是亦其功を期す能はず云々。不肖の論之と相反す。地方會議才可なりと雖も、今日の急は民政議院の他にあらず。何となれば民政議院は政府毎歲の出納を調理し、稅則より其他人民に賦す可き臨時收納等を詳查

し、尙其改正を爲すの特任あり。我國の議院其實に任するを得ずと雖も、今日民政議院を起す所以のもの、斯く人民に關する重大の事件は之を民に議するを以て本旨とす。然らば地方會議の民能く此任に堪ゆるや否公は夙に法律に涉獵せしを聞く請ふ其批評を賜へ。

其他公の意専ら民政議院の失を論するに在り。蓋し事々物々必ず得失なきを得ず。然れども民政議院を置かず、荏苒今日の姿を以て人材教育を専務とし、勉て持重鋭を養ふの論に至ては、他に其方法ありて不測の難なからしむるに足る可き者あらば知らずと雖も、恐くは其説亦民政議院の弊を償ふに足るや否や。不肖之を辯する事能はず。只公並に大方君子に其可否を質すのみ。

馬城畫次郎に答ふるの書

加藤 弘 之

民政議院の鄙見につき馬城君の忠告あり僕大に喜ぶ、然れども猶卑見の相異なる所あり、因て左に其大旨を述て之に答ふ。

本文の意今遽に云々、有司專制の弊害固より可懼、然りと雖も唯有司の專制を懼るゝが爲めに民政議院を立てんと欲せば野蠻國の如きは有司專政或は更に甚しき事なる可し、然れば高論野蠻國と雖も亦民政議院を立てんと欲するや、野蠻及び未全開の國に於ては有司專政を防ぐ必ず他術を以てせざる可からず、好て他術を用ゆるに非ず唯己むを得ざるが爲なり、他術とは何ぞや賢良方正の有司を用ふるのみ。

本文、履歷云々、普國非的利の時特裁の政各國に行はると雖も民決して之に安せしにあらず、各國人民政府の暴權に抗して民權を伸張せん事を謀れり、然りと雖も非的利は公明正大の心を以て特裁の政を行ひ、敢て暴權を用ひず、常に人民をして進歩せしむる事

に勉力せり。

本文民政議院を開き云々、愚論と雖も之を聽て政府之を所裁するは固に美事なり、然れども一旦議院を開き會議の制を立て、後若し十議中八九議愚なるに於て、政府之を政らざることあらば、人民倍々政府の專制を咎むるに至らん是甚だ愚ふ可し、故に僕は愚論と雖も決して蔑如す可らず必兼聽せざる可らず、然れども今遽に議院の制を立て、聽くは不可ならん歟。本文人材教育云々、人智の開明は勸學の術に優る者あるを知らず、縱令一朝其績を視る能はずと雖も如何ともすべからず、唯政府公明正大の心を以て政を施し、教育を勸勵し以て開明の日を俟つに如かず。

本文今日邦國の世態云々、僕が意人民は實に愚唯之を守らしむ可し、之を知らしむ可らずと云ふにあらざるは僕が教育の必要なる所以を論説するを以て察し玉ふ可し。又高論有司のみ必ずしも賢智者にして其任に當ると云ふを得ずと云ふは實に可なり、故に方今の世は有司の外に賢智者あれば、自ら好まざる者の外は務めて之を擧げて有司となすを要す、又高論民權旺盛云々、民權旺盛なる國は即ち人智開明の國にして人民亦自主の權の制限せざる可らざる所以の理を知るが故に却て之を犯す事少し、未全開の人民は此理を知る事の少きが故に遂に其權を暴行するの恐れあり。

本文、我が國方今云々、此論實に然り、然れども恐くは此得を以て以上の失を償ふに足らざる可し。

本文、政府能く人民云々、此論亦大に可なり、然れども人民自主の權は民の私權なり、國事に預るの權は其公權なり、同日に論ず可らず、但し上下下に達せるが爲めに暴動ありと云ふは實に確論なり、然れども上旨をして下に通ぜしむる、必ず姑く他術を用ひざるを得ず、他術とは何ぞや、専ら賢才を擧て地方官に置き、懇々民に説論して上意を下に通じ、下情を上に通ぜしむるに在り。

本文、改革を急にせんと欲する云々、持重鋭を養ふは即ち教育の外一要術あるを知らず、又高論方今人心恟々云々、僕亦今の有司を以て最賢最明と爲すを得ず、或は大に服せざる事あり、故に方今有司の賢愚良否を論じ飲令の善惡當否を辨じて、務めて賢明の有司をあげ善美の政を施せざる所以を討論するは實に忽にす可らず、然れども唯有司賢明ならず、政令善美ならざるの故を以て議院設立の必要を説く時は、即ち前に論ずるが如く、野蠻と雖も亦民政議院必要なりと云ふの論に歸す可し。未だ曾て歐洲の硬學鴻儒にして、開明の深淺を謀らずして議院を起すの必要なる所以を説ける者あるを知らず。至し之れあらば請ふ教示せよ。

其他公の意専ら云々、此論誠に然り、僕亦兩三年前迄は高論の如く吾國にも民政議院は速に起さざる可らずと思へり、然るに其後猶洋書に就き、及び實際に照し、熟考して遂に民政議院の尙早きを知れり、故に民政議院の失を云ふは唯時勢如何に在るのみ、僕は獨逸人ビーデルマンの論を信ず。

附言 試に問ふ君は大政一新と廢封立縣を以て眞に天下の輿論に出しとするや、僕は思ふ、若し議院をして七八年前に在らしめば此二大改革決して斯く速に成らざる可しと。蓋し此二大改革たるや、數個雄藩數百有志専ら名義を正し、其智と賢とを以て天下の嚆矢となりて企てし所にして、當時輿論は唯數個雄藩數十有司の名義論と及び其智と權とに制せられて遂に之に服し、其後に至り漸く其事の大正至善なるを悟るに至りしのみ、君以て如何となす。

再び加藤弘之の説を駁する書

馬城 臺次郎

民政議院の儀に就き加藤公閣下の教示を賜ふあり、快然欣喜何事か之に超さん。公の如き大方賢明の在るに非らざれば焉ぞ不肖が鄙見を通暢するを得ん。蓋し鄙見愈高論と相違庭す、再三再四の教示を賜ふあれば幸甚、仍て左に其概意を述ぶ。

本文、有司専制の弊を挽る暫く他術を用ひざる可らず云々、蓋し有司専制の弊なからしめんとする 獨り議院に在るのみ。賢才を擧げて其弊なからしめんとする豈難からずや。其難き事高論民選議院を難するの比にあらず。我が國に於ては最も難し。文明各國と雖も難する所にして即ち議院の設けある所以なり。假令若し賢才を擧げ得ると雖も、豈議院を置ずして其當を得其弊なきを得んや。況んや賢才を擧げて當を得んとすと言ふの論は言ふ可く行はれざるの事なるに於てをや。抑も行政權をして横恣ならざらしむるは立法權を張るに在り、立法權をして擅制せしめざるは行政權を墮さざるに在り、故に民選議院の權を制限するには政府あり、元老院あり、參議院あるが如く、立法行政の權は互に相對峙せしめ以て其當を得、國を維し民を保す、苟も偏倚する所あれば決して其當を得ず、有司専制の弊より延て百般の弊に至る事目前に在り。

又人智開明の日を待つて民選議院を起さん、但し當今有司専制の弊なきを得ざるに因り之を治するに賢才登用を以てせんと云ふ論に就て、不肖大に疑惑を生ず、然らば従前賢才を擧ぐるの道立たざるより有司専制の弊を醸し來ると云ふの意なるや不肖然るを知らず、何となれば方今有司自ら言ふ、人智未開有司の外人在るを知らず、宜しく有司自ら任せる可からずと。又方今有司専制の弊の醸成する所以豈管登用の當否のみに在らんや。怒らくは之を治するの道を究めず、之を治するの器具即ち議院の制備はらざるに根據する所なり。但し高論の意大に賢才を擧げて善美の政を施さんとするに在る事教示中に明々たり、然れども不肖尙且信任安思して甘心するを得ず、何となれば前項に論ずる怒れあり、加ふるに若し高論の實行あるも、議院を設けるは是より上なるものあるを知らざればなり。又高論に従ひ賢才を擧るを以て弊なく當を得る者とせば、立法に議院を要せず、司法に覆審院檢事局を要せずと云ふの論に近きを免れず。故に宜しく立法權は斷然行政權と分置し、互に其權限を冒さしめず、以て大に法制の可否得失を議し、今一層の改政を

企起せざる可らず、今や憂國を以て自ら居るもの日一日に倍蓰する、然るに其説の洩す所なし、之を公に論じ公に決するの道立たざるに於ては恐くは不測の患難を醸んとす、故に如かず其法を設くるには。

本文、民權旺盛なる國は即ち人智開明の國云々、請ふ不肖が論を熟閱し給へ、民權旺盛の國は即ち自由國なり、然れども尙制度の在るあつて猥に政府に矛盾するを許さず、我國亦制度を以てせば豈之を襲ぐに術なからんやと云ふに在り。民權と暴權と混するなからん事を請ふ。

本文、自主の權は私權なり國事に與かるの權は公權なり云々、不肖固より其區別を知る、未だ之を混同したるを知らず、只從來羈束の人民たるを以て人々自主の權利あり、政府たりと雖も猥に之を屈撓せらるゝ理なく、政府は人民自主の權利を保護すべき義務あり、又然るを以て國家に對する權利あるものなる事を人民に知らしむると云ふに在り、請ふ又熟閱あらん事を。

本文、人智開明は教育に優る者あるを知らず云々、亦然り、人智開明最も急なり宜しく教育を専らにす可し、敢て人智開明の方法あるや否やを問ひしに非ず、今日の勢或は不測の患あらんとす、故に此時にして教育の急のみを首唱して他を顧みざるを得るや、但し其教育のみを首唱するには別に不測の患を豫防する方法あるや否や、教育専務持重養銳の論は今日を濟ふの論に非ず、教育は恰も治世に兵を講ずるが如くならざるを得ずと云ふにあるのみ。

本文、距今兩三年前迄我が國民選議院を起さざる可からずと思へり、其後洋書に就て實際に照し云々、不肖は民選議院を兩三年前に求めず却つて今日に求む。是則世態人情に移動あり大に昔日に異なる所あるを見るに因るなり。

又曰く僕は獨逸ビーデルマンの言を信ずと、ビーデルマンの理論我國に師となす可きや否や、其言を信ず可きや否やを驗するは、

即ち我國今日の世態人情に適合するや否やに於てせざる可らず。恐くは高論民選議院を非とし今日に安ずるきの時勢にあらざる可し。

附言 大政維新と廢藩置縣を以て眞に天下の輿論に出でしや否やの疑問に對し、不肖固より之を天下の輿論に出るとせず、何となれば七八年前有司專制の弊今日より甚だしき者あり、是れ公の君側に在て能く知る所ならん。故に維新の功は全く愛國者に在り、廢藩の績は公議に在り、此二つ者焉ぞ之を有司の專制に出るとせんや。其公論に在るを證明せん、當時諸藩公議人を出し上旨の在る所を知り、且公議を決するに至る故に此美事あるを得る耳。若し有司專制なる時は豈此美舉に及ばんや。故に今日復び維新の功廢藩の績を顯はさんとする民選議院と同日に論ず可けんや。然るも之を思はず人情の移動を察せず時機を量らざれば焉ぞ濟時の論たるを得んや。不肖切に昔日の功績を希望す、然るに高論に依れば愚を拙て民選議院を起すかの如く、時勢の移動を論ぜず只非を民選議院に歸するが如し、不肖切に昔日の功に譲らざる者あらん歟と之を埋没せしめざる亦容易ならず能力者の埋没を恐るゝ言請熟聞あれ。英雄或は時を替へ世を異にす、然るも有司專制因襲專行の國に於ては數十年前の時論今日に於て行はれ、七八年前の苦難今日に跋扈するあるも其人を得たるに非ず、其法の立たざるに因るのみ。其他今日の時勢人情を量つて不肖は民選議院の大に失あるを知らず、却て其益尠ならざるは數回の不肖が論を以て高察する所あれ。

時に森有禮も亦民選議院建白に對する批評を草して之を公にせり。其文左の如し。

人民普く國政を議するに至るは國の獨立を實にし民の昌榮を進むるの兆なるは言を待たざる也。過る十八日の日新眞事誌に左院へ宛てたる副島氏始め八名の建言書を載せたり、之を看るに民選議院を建るの議也、其論悉く國政に關せざるは無し、乃ち此國の獨立、

民の昌榮を目的となす者也。然れども其志意未分明ならず又文義穩ならざるを覺ゆ今茲に其一二を評す。

一、昨今民心恟々上下相疑ひ動もすれば土崩瓦解無之共難中勢に立至り候儀竟天下の輿論公議の壅塞する故と、今其實否は暫く措て證せず、先づ假りに之を實と認めば、則ち此形勢を醸し成したる實は誰に歸すべきや、單に之を目今の在官者に歸して可なからんか、抑も建言署名の君子在官の時と今日とを比すれば其差異果して如何ぞや。竊かに聞く、往日朝鮮を撃つ議を主張せし人は多くは此諸君子なりと、此議若し行はれば今此公議輿論壅塞の弊は無かるべしと云ふも一概に之を信じ得可らざるなり。昨年十月の布告に新聞紙發行の條目中國體を誹り國律を議し及び外法を主張宣議して國の妨害を生ぜしむるを案す政事法律等を記載する事に付妄に批評を加ふる事猥りに教法を記入し政法の妨害を生ぜしむるを禁す等の箇條あり抑も此等の布告は諸氏に在官の時に成れり、建言書の始めに別紙奉建言條次第平生の持論にして其等在官中履及建言候者と有之候とあるを見れば、彼の新聞紙發行の條目は定て不満足ながらも同意して發せられし者なるべし。然れば彼の民心恟々上下相疑ひ土崩瓦解の形勢輿論公議壅塞等も、右新聞紙條目と同じく心ならずも諸氏亦助けて之を醸し成したるものと看ても無理にあらず。蓋し今日の形勢は目今在官の者忽然と醸し成したるものに非ざるなり。

二、建言別紙中に朝出幕政刑情實に成り賞罰愛憎に出云々、此文は蓋し誤て加入せる者ならん、建言諸氏の如き有名なる識者より發せし言と萬々思はれず。

三、所謂民選議院なる者は其制果して如何ぞや、政府人民に令して之を立るにあるか、將た今之を政府に申告し以て人民隨意に會議を興すにあるか、或は政府の許可を得て之を立るにあるか建言書に此段宜敷御評議を可被遂候也とあるを以て察すれば、政府は人

民の爲めに議院を立つ可しと云ふの義ならん、若し果して然らば是れ乃ち人民の議院に非ずして全く政府の議院なり。蓋し「民選」の文字は民間の人物を政府の選にて誤る議院の義なる可し、政府の好にて設る所の議員なるが故に、若好まざる時は既に設立議院と雖も之を廢するは還た政府の随意なる可し、若此の如くなれば議員無忌憚政事を議する能はざる耳ならず、還た政府に對して柔順ならざるを得ざるは自然の勢にして、理の當然更に辨せずして明なり。既に柔順なれば議する所も又徠て政府の所爲と稱揚し、終に政府の太鼓持と云はれる如く世上の批評を受けるに至る可し。

西周も「亦駁舊相公議一題」と云へる、論を草し、之を公にせり。其の文に左の如し。

余舊參議諸公の左院に建白し民選議院を起すの議を讀み、竊かに疑なき能はず。昔みに其言の蔽はるゝ所を擧て之を言はむ。蓋し其大意に云ふ。政府の強きを致すは天下人民の同心を致すに在り。人民の同心を致すは民選議院を起すに在り。而して所謂議院の法は西洋の成規を取て之を我に施すに在り。猶汽車電信の法は西洋の發明にして取て之を我國に用ふるが如し。若し我自ら汽車電信を發明するを待ち然後汽車を用ひ、電線を架するを得んと言はゞ、則ち政府は應に手を下すの事なかるべしと。嗟亦何ぞ其言の條理を失するや。汽車電信の如き西洋に在りて何等の學に在て之を講し、何等の書に於て之を論するや。格物也。化學也。器械也。而して彼の政事也。法律也。教法なりと同日にして論すべきにあらず。余未た英の引力佛の引力と法を異にして日の電氣米の電氣と道を異にするを聞かず。獨り政事に至ては之に反する者あり。英の議院佛の議院と其法を同らせず而して英の政體米の政體と天壤相反す。今汽車の如き我の才學ある者を撰み之を西洋に遣り講究せしむる事數年ならば其術を盡すに足らむ而して之に資本授け之に事を幹せしめば則其功を竣むるも日を期して待つ可し。

然らば乃ち政事に至ても亦同一轍にして必ず治功を見んと欲するや。且今將に論者の心に問はん。汝誠に一拳石を取て之を空中に擲て而て其石汝の力の比例に従て上て天に朝せん、然るに上り極まれば必ず下る。其下るや自乗の速方を以てせん是三尺の童も疑はざる所なるべし。而して今誠に汝が未だ平素の交なき一貧人を雇ひ之に百圓金を附し、遠く三十里の外に至て一物品を買はしめよ。而て汝は其人の必ず其物品を買て復命するを知る事、石の空中より落ると同一たるを期するか、抑余聞く西洋政事の學に在ては、人民開化の度を審かにし、時に適し、地に適し、以て其宜しきを制するに在るのみと。是彼の物理の諸學と本來の理法を異にする者なり。今比して之を一にせんと欲す。西洋にありて果して其學ありや。曰く人民政府に對し租税を拂ふの義務あれば則ち其政府の事と與知可否するの權利を有す。是天下の通論なりと。通論の二字何等の義ぞ。人民既に租税を出す。則ち是に對して其保護を望むの權利を有すべし。然に其之に參與召否するの權利は則ち其國創めて政體を建る時に在て之を定むべし。今それ政府を以て國民約束より成る者として之を論す。國民曰く我が力業の半を汝有司に出して汝を養ふ。汝之が爲めに我を治めよと謂ふ。是一約束なり。國民或は曰く我れ我が力業の半を汝に出し以て汝を養ふ。汝之が爲めに我を治めよ。而して、汝をして肆縱ならざらしむる爲めに我れ先づ法を制して之を與へむ。汝此法に遵て我を治めよと謂ふ。是亦一約束なり。故にルウソウ氏の説に據り、政府を以て全く約束より成るとするも、政府の事を與知するの權利は、租税を出すと相對するの權利に非ず。況んや一國の政府は必ず約束に與る者に非ず。古來歴史上の沿革其源を異にする者あるに於てをや。是を以て天下の大理を究めたりと謂ふ余未だ何等の學に淵源するを知らず。又曰く人民をして學且智に開明の域に進ましむる道即ち民選議院を立るに在りと。又曰く先づ共通義權理を保護せしめ、自尊自重天下と愛樂を共にするの氣象を起さしむと。所謂人民の權利を保せしむるの道は何にか在る。之を民選議院に在りとするか。之を司法の任に

在りとするか。上抑壓の政なく而して司法誠に其平を得ば、人民の権利保全すべし。かの自尊自重天不と憂樂を共にするの氣象を有するは學識あるの人に望むべし。其學識を起す之を文部の政に求めずして之を議院を開くに求めんとするは亦眞に其道を得るの手段と謂はむか、且夫演劇の一技の如きも、之を演ずるを學んで而も後に舞臺を開かむか。又先づ舞臺を開けて而して後に之を演習せむか。嗟澤劇の如き既に之を開くも答の來る無きは則止まむ。而縦ひひ演技其法を失するも、亦害なかるべし。今天下の政事の如き、亦是を演習の場地となすべけんや。

凡此等の論者、諸公身既に嘗て廟堂の上に在て自ら體驗する所なりとせば則ち余諸公の爲めに慨せざるを得ず。且夫帝室漸く其榮を失ひ、政令百端、朝出暮改政情實に成り、賞罰愛憎に出るの數言、諸公聯を去るの後數年間にして政府是を改むる事能ざれば、則ち之を謂ふも可なり。退く數月にして顧みて之を政府に責む。亦自ら其面に唾する如きのみ。余竊かに諸公の爲めに取らざる所なり。然りと雖も方今の勢政權の歸する所上帝室に在らず、下人民に在らずと云ふ者は則ち之あり。之を維持して堅牢不拔ならしめむと欲する、或は議院ありて其權を分つに在るも亦其理なしと謂ふ可らず。唯之を民選に取り違かに西洋下院の法の如くならんを欲するは、之を時に徴し、之を人民開化の度に質して未だ肯察を得たりと謂ふ可らざる者の如し。余今敢て議院を起すの可否に就て之を論ずるに非ず。殊に其論中僞論甚だ多きを恐る。此々の僞論、天下人民の耳目を煽動し、誤て一旦僞論家の議論立つ事あらば、則ち僞論家僞論家と相議し、天下の事岌々乎として亦殆からざらむ乎。

森有禮、西岡の評論出づるや、津田眞道等は民選議院賛成論を草して之を世に公にしたり。其の文に曰く。

民選議院賛成論

津田 眞道

前參議副島氏等民選議院の建言ありてより以來、互に辯駁方を盡し、攻守力を竭し、新聞上恰も一種の戰場に似たり。續て又地方長官會議を開くの特詔あり、又華族會議を創むるの説あり、或る人曰く、各種の議員國是を討論して以て政府の擅制を防止す是歐米各國の富強彼が如き所以なり、今や我大日本帝國に於ても之に亦倣ひ三種の議院を興さんとす、豈國家の最大美事にして一大福社ならずや、即ち先生の所謂時世の然らざるを得ず、事情の止むべからざるものにあらずや。曰く余が淺見聊か之に異なるところあり請ふ筈に之を論ぜん、紳士華族相集り相議して英國上院の體に倣ひ皇上を禱補し國社洪大にせんと欲す、其意は則ち美なり、其志は則喜尙すべし、然れども其事は則余未だ其可を知らざるなり。蓋し議院の國家に裨益ある所以は専ら其智識にあり、紳士華族は概するに皆封建の舊藩君にして、諫を納れ人に長たるの徳ありと雖も、大凡深宮に生長し甚だ事情に迂濶にして、智徳の如きは尤其短所なり、然り而して廢藩の後諸侯漸く鄙事に慣稍狡智に涉り或は其徳を損する所ありと雖も、其智識に乏しきは則依然たり、乃ち依然たる短識の人蟻集蝶議す將た國家に在て何の損益あらん其見解に至らざる期し難きのみ、安ぞ余が所謂時世の然らざるを得ず事情の止むべからざる所ならんや。寧其巨萬の贖金を以て専ら其力を華族學校を創立し、名師を聘して子弟を教育し、其子弟をして有用の學術に長じ眞正の知識を開かしむることに如かず。此時に至て紳士華族或は上院を興し、或は廟堂に昇り、内閣に座し、屹然として國家の柱石と爲り、富強を致し國福を長すること、英國の名宰相の多くは貴族中より出る如くならんことを、是余が紳士諸侯の爲に特に將來に期望する所なり。抑前藩君諸侯の如きは舊に勇退封土を奉還し、全國郡縣一和の治を爲す、其今日に功あるや亦鮮少ならず。故に亦世事を問はず只管琴書を友として山水の間に徜徉するも心中瀟灑たること光風霽月の如き君子なるを失せず況や其子弟を教育し他日の洪益を圖るに於てをや。地方官は 天皇陛下に代り該府縣を治て政を行ふ人なり即 天皇陛下の代官なり今や之を會集

して代議人となす、果して 天皇陛下の代議人なりや將た人民の代議人なりや、名實の相悞はざる事由の垂戻せる是より甚だしきはなし。夫の各國に派出する所の國主は本國君主政府の代官也、今の代議人は派出する所の我國使を召し歸し各國帝王の名代とするに類す宇内豈此理あらんや。仲尼曰く名正しからざれば言順ならず言順ならざれば事成らずと。地方官會議の事成て國家に裨益ある吾未だ之を信すること能はず亦安ぞ所謂時勢の然らざるを得ず事情の止むべからざるものならん乎。民選議院は民の選舉する所にして信に國民の代議人也、我帝國三千萬人の中其選に應ずべき知識を有するもの絶て其人無しと謂ふべからず、然ども之を選舉する所の人亦相當の知識を有するを要す、蓋其人直に國事を議せずと雖も其人を選舉は即國事に干與するなり、故に歐米各國此議員を選舉するにして人民の政權と云ふ。彼國議員選舉の法則を按ずるは婦女、幼者、廢篤疾及び無學文盲第知識を缺く所の人は總て此政權を有する事を得ざるを以て通法とす、故に選舉せられて議員となる所の人に制限を設けずしこ却て選舉を爲す所の人に制限を加ふ、然り而て婦女、幼者、癡癩人等は之を除くを固より容易なれども文字有無の分別を爲すこと甚だ難しとす、故に一種の規則を設くるを要す、彼國に於て概するに租税を納る多寡を標準とし分界を立つ、蓋是止むを得ざるの策のみ。然ども之を捨て未だ他に良法あるを聞かず。故に我國に於ても亦大略之に倣ひ、更に我國の風俗事情を折衷して其規則を定むべし、士族は從來文字あるもの稍新く平民は豪富にあらざれば書を讀む者稀なり、故に今代議士司選の人を定めて悉皆華士族とし、并に平民の多く租税を納るものとし、其平民都會に於ては譬へば二百圓乃至千圓以上の地券を有するものに限る、村落に於ては五十圓乃至百圓以上の地券を有するものに限るべし、其婦、幼、廢、篤疾及徒上の刑に處せられたる者は之を除くこと固より論なし、右の如く定めたる選者を初選者と名づく、初選者百人にして相當の鑑識を具する人一人を選舉し之を本選者と名づく、而して此本選者の更に選舉する所の人を代議士とし議院に會集して

國民に代りて國事を商議する人とす。紳士、華士族、文人、武夫、豪農、富商、空窮書生、野人の別なく皆選まれて代議士たることを得べし、唯だ其見識國事を可とするに足るを以て目的とするのみ、而して徒以上の刑に處せられたるものは之を除くべし、代議士の教は我日本國統計人口三千萬の中より六十名乃至百二十名を選舉すべし、されば二十五萬人乃至五十萬人に就て一人を擧ぐるに當る。代議士は四年を以て一期とし、新陳交代すべし。又代議士を分ちて左右二班とし、滿三年毎に半數一新を要す。譬ぞ左班は甲の年に撰び右班は丙の時に撰び右班は丙の時に撰ふなり、右に列擧する所是其大略なり、議長を任ずるを始として一切詳細なる條目は歐洲各國の選舉法を折衷し我帝國人文の度に適して宜きを得べし、但此は豫め特に數名の署官を任じて法案を草せしむるを可とす、右の如くして選舉する所の代議士は眞に我日本國民の代議人にして名實共に正當なり、以て其事の成るを卜知するべきのみ而して此代議士は三千萬人中の六十乃至百二十人たり、何ぞ我國相當の知識に缺く所あらんや、蓋是萬機公論に決すといへる御誓文の意を更張する所以なり、代議士は議法を以て其職務とし其特權とす然れ共議する所の法を我帝國に頒行すると否ざるとは特に 天皇陛下の帝權にして代議士權利の絶てなき所とす、代議士は又歳入歳出等を始めとして國家の大事を監督する權を有すべし、是に於てか人民始て政府の專横を妨止し、政府をして政令度に適し開化自然の運行か妨ぐる所なからしむべし、其裨益豈淺少なりと謂んや、且や我國民人民求く壓制の下に屈して人性自由の氣象を挫折す、此氣象や是國の元氣なり、國の元氣萎縮して振はず國威の振はざる所以なり、今之を振作して旺盛ならしむるの方法他なし、人民をして國事に干與せしむるなり、人民をして國事に干與せしむるは民選議院を始むるに如くはなし、然らば即ち此事や未だ必ずしも事情の止むべからざるものにあらずと謂ふべからざるに似たり、公議輿論の歸する所果して安くにかある。

當時西村茂樹も亦板垣後藤等の説に賛成し、民選議院開設の議を建て、之を政府に提出したり。

民選議院の義に付建白

西村 茂樹

謹んで按ずるに、天下の事理あり實あり、理可にして實不可なる者あり、實可にして理不可なる者あり、理可にして實不可なる者と實可にして理不可なる者とは、時務を知るの俊傑に非ざれば其用捨を定むること能はず、理可にして實亦た可なるものに至ては何れの國何れの時に於ても苟も之を行はんと欲する者あれば之を行ふて害あること無かるべし。夫れ民選議院の如きは理を以て論ずれば至公至平の極なり、實を以て論ずれば歐米諸國の富強の功績あり、方今政教休明なりと雖も、未だ一二の缺點なしと云ふべからず、國人安富なりと雖も未だ一二の怨民なしと云ふべからず、誠に宜く言路を洞開し上下の情を通すべきの時なり、頃者副島數氏民選議院の議を見るに、其言病あるが如しと雖も其主旨に至ては敢て論難すべきことなし、世の論者多く曰ふ、數氏の言蓋し激する處ありて發する者なれば其言恐くは正理に合はず、故に之を用ひ難しと、愚謂へらく然らずと、凡そ非常の功は激に因て成る者多し、然れども激して善なる者あり、華盛頓佛蘭格林等の英吉利に叛きしは激の善なる者なり。羅伯卑爾段敦等の法蘭西正家を覆へせしは激の不善なる者なり、激何の不可なることかあらん唯其事の善不善を問ふべきのみ。假令數氏の言激する處ありとも、發して民選議院と爲るは又激の善なる者なり。論者又曰く方今民の知識未だ明かならざれば民選議院を興すの時猶早しと、愚又謂へらく然らずと、夫れ英國の初て議院を開きしは一千二百年の際に在り、英國の民聰敏なりと雖も六百年前の状態は恐く本邦今日の民と及ばざりしなるべし、然れども始めに貴族の會議を起し、尋て民選の代議人を出し、一千三百年の初に至り終に議院の制確定し、連綿今日に

至り、萬國に冠絶するの良法と爲り、國の富強民の開化共に議院の助に頼る事甚多し、然れば今日本邦に在て議院を興さんとするは、愚惟其晚きを思ふ、固より其早きを圖らざるなり、近今開化日に進み火車火船より電機電燈の如き工藝の末に至ては殆んど歐米諸國と並び馳するの勢あり、猶り政體の本に至ては未だ確定せる法度なし、是有志者の深く憂ふる處なり、夫政體は本なり工藝は末なり、其本を棄て唯末を之れ務む恐くは計の得たる者に非るなり、然れば今日の要務は政體を確定するに如く者なく政體を確定せんとするには民選議院を興すより先なるは無かるべし、唯茂樹が掛念する所は民選議院の施設の方法如何に在り、夫れ良法善政と雖も施設の方宜に背く時は却て國を亂し民を病ましむるに至る者往々之あり、然れども副島數氏既に民選議院の議あれば、其施設の方法に至ても必らず善美の説あるべし、願はくは諸氏に命じて其施設の方法を上言せしめ、其言果して善ならば速かに之を行ひ、若し不善ならば反覆熟議して善に至らしめ、然後之を施行し玉は、國の幸福民の利益是より大なるは莫かるべし。

茂樹固より副島數氏と一面の讒なし、數氏の爲に遊説するの嫌なかるべし、唯國の爲め民の爲め黙して止む事能はず、因て越俎の罪を犯して贅言を上陳す、希くは裁する所あらん事を、恐惶頓首。

西村茂樹名は鼎字は重器、泊翁と號す。下總佐倉藩士。初め安井息軒、大槻磐溪に就て儒學を修め、蘭英の學を手塚律藏に、兵學を佐久間象山に學び得る所あり。明治三年、佐倉藩大參事と爲る。發ち辭して東京に上り、家塾を開く。六年時事に感ずる所あり。參議木戸孝允、山田顯義、毛川元徳、細川護久、池田章政、池田輝知、伊達宗城、松平春嶽、松浦詮、中村止直等と謀り、貴族議院を興さんことを期し、大日本會議上院創立案を起草したり。

大日本會議上院創立案

- 一 會議上院の議員は舊諸侯を以て、之に任ず。
- 一 凡そ舊諸侯にして曾て土地人民を所有したる者は老少の別なく皆議員たる事を得べし。
- 一 議員は自ら議場に出づるに及ばず、其舊臣をして代議員たらしむべし。
- 一 代議員の数は舊大藩三人、中藩二人、小藩一人たるべし。
- 一 代議員は常に東京に在るべし。其旅費日當等は舊藩主にて適宜に之を給與すべし。
- 一 議事院は東京中通宜の地に之を建築すべし、其費用は舊藩高に割合して之を出すべし。
- 一 議長副議長は議員の投票を以て舊藩士にて之に任ずべし、其任期は三年たるべし。
- 一 議員は世襲とす。代議員の任期は五年とすれども都合により再任する事を得べし。
- 一 代議員の中より幹事五名を置き議長を助けて會務を整理せしむ。
- 一 幹事の任期は五年とす。其選舉は代議員全體の投票たるべし。
- 一 書記會計は議長之を指命す、此二職には任期なし。
- 一 議事は毎月一回之を開く議題は少くとも五日以前に各代議員に配布す。
- 一 議題は議長より之を出す、然れども議員中議案を提出する者ある時は議長の認可を経て議題とする事を得。
- 一 議事は公衆の傍聴を許す。
- 一 一回の議案は三題に過ぐる事を得ず議決に至らざる間は連日之を議する妨げなし。

- 一 議事は及ぶだけ詳に之を筆記し其議決を併せて之を出版し官省及び府縣に贈與すべし。
 - 一 議院は政府に建議する事を得。
 - 一 議員中代議員を出さず自ら出て事を議せんとする者は勝手たるべし。
 - 一 大日本會議下院の設立は是を後年に期すべし。
- 然るに事行はれずして已みたり。

五 立憲開始詔勅と元老院

八年四月廿五日、元老院の官等を定め、又々從前正院分局に出し、建白書類は、自今、元老院 出さしむることとし、同日、勝安芳以下十四名、議官に任ぜられたり。即ち左の如し。

- 八年四月廿五日參議兼海軍卿より任命 勝 安 芳
- 同年四月同日、外務少輔より任命 山 口 尙 芳
- 同年四月同日、陸軍少將を以て兼任 烏 尾 小 彌 太
- 同年四月同日、陸軍少將を以て兼任 三 浦 梧 樓
- 同年四月同日、陸軍少將を以て兼任 津 田 出
- 同年四月同日、陸軍少將を以て兼任 河 野 敏 錄
- 同年四月同日、權大判事より任命

同年同月同日、三等侍講より任命

同年同月同日、任命

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

副島は、元老院議員に任ぜられしも、之に應ぜず、勝、福岡も任命後、直に辭職したり。

越えて廿七日、公選投票を行ひ、後藤象二郎其選に當り、元老院副議長に任ぜられたり。七月二日に及び、熾仁親王以下十一名、議官に任ぜられたり。即ち左の如し。

八年七月二日任命

同年同月同日、特命全權公使より任命

同年同月同日、辨理公使より任命

同年同月同日、教部少輔より任命

加藤 弘之

後藤 象二郎

山利 公正

福岡 孝悌

吉井 友實

陸奥 宗光

松岡 時敏

副島 種臣

熾 仁 親王

柳 原 前光

佐 野 常民

黒 田 清綱

同年同月同日、京都府知事より任命

八年七月二日、式部寮五等出仕兼太政官五等出仕より任命

同年同月同日、任命

同上

同上

同上

同年同月同日、任命、二等侍講を兼ね

又、井上馨は八年十二月廿七日に及び、始めて議官に任ぜられたり。

七月五日、車駕親臨、元老院開院式を擧げ、左の勅語を賜はりたり。

本日、朕爰ニ親臨シテ始メテ本院ヲ開キ、爾衆議官ニ詔ク。朕、前日、衆庶ニ告クルニ、元老院ヲ設ケテ立法ノ源ヲ廣ムルノ旨ヲ以テシ、乃チ爾衆議官ヲ以テ、立法ノ官タラシム。尙クハ爾等各乃ノ心カヲ一ニシ、乃ノ職任ヲ盡シ、允ニ上下ノ幸福ヲ圖ラハ、實ニ國家無疆ノ幸ナリ。欽テ斯意ヲ體シ、其能ク贊襄セヨ。

元老院は、設立の初めに於て、當時朝野の人才、論客、學者を網羅し、上院議員として、其の本領を具するに足るもの、少なからざりしも、其の權限狹隘にして、到底立法府たるの面目を發揮するに足らざりき。元老院設立の初めには彈劾權を有し、侃諤の論を闢はし、聊か立法府たるの面目を存じたりしも、其の後、之を削除するに及び、未だ幾ならず第二の左院たるの觀を呈するに至れり。

然れども 天皇には深く輿論の趨く所を察せられ、九年九月六日、親しく太政官代に幸し、元老院議長有栖川熾仁親王を召し、元老院に於て、憲法を調査せしむべき旨を命じ、左の勅語を賜はりたり。

朕、爰ニ我建國ノ體ニ基キ、廣ク海外各國ノ成法ヲ斟酌シ、以テ國憲ヲ定メントス。汝等、其レ宜シク之方草案ヲ起創シ、以テ聞セヨ。朕將ニ之ヲ擇ハントス。

親王乃ち議官を會して聖勅を傳へ、憲法取調局を元老院内に置き、中島信行、柳原前光、細川潤次郎、福羽美靜、神田孝平を以て委員と爲し、之を戒飾して聖德を發揚せんことを期し、又た書を岩倉に寄せて意見を問ふ所あり。其の書に曰く。

前日國憲起草の勅を奏するや、速に委員を命じ、事に従はしむ。因て憶ふに、國憲の事たる、至重至大、客易に決すべきに非ず。故に草案起創は本院の命を受くる所なりと雖ども、可否を議定するに至ては、固より 陛下の親裁を仰がざるを得ず。勅旨も亦起草に止るを以て、草案成るに及びては、直に奏聞し、親撰に供せんとす。是れ熾仁の勅を奉じ起草する所以の意なり。然りと雖ども、其起草たる、用意深切たらざる可からず。故に其成るや、先づ之を足下に密寄し、草案の理趣を詳明し、斟酌する所ありて、後、之を奏聞し、以て親撰に供し、更に本院の會議に附せられんことを望まんとす。故に鄙衷を陳し、以て密聞す。足下之を諒せよ。

岩倉之に答へて曰く「草案を密寄せらるゝに至らば、當に意見を附して参考に供すべし」と。然るに、未だ幾ならず十年の内亂起るに際し、憲法調査も亦た、終に等閑に附せらるゝに至れり。

六 大隈の擡頭

國會期成同盟の代表者たる片岡健吉、河野廣中が閣下に伏して、捧呈したる國會開設の請願書は、政府に拒絶せられしと雖も、國會開設の要求は、國民の聲なり。天下の勢なり。天下有志の士、風を聞いて起ち、西は九州の一角より、北は奥羽の邊陲に至るまで、國會開設を渴望せざるなく、輿論は翕然として響の聲に應ずるが如く、天地爲に色を變し山河爲に震撼せんとするの勢あり。是に於て、西南戦捷の勢に乗じ、峻法苛律を以て言論集會を檢束し、國民の輿論を壓迫せんとせし政府當局者も、此に至り倅然として色を失し、始めて民心に抗すべからざるを知り、憲法制定、國會開設の議、廟堂に起りたり。

明治十二年十二月、參議山縣有朋、憲政に關する意見を上る。翌十三年二月、有栖川熾仁親王、左大臣に任ぜらるゝに及び、當時、民間の志士或は太政官、元老院の門を叩き、或は當局諸公を歴問し、國會開設願望の主旨を陳するもの前後相踵げり。

參議黒田清隆、山田顯義、井上馨、伊藤博文等、皆憲政に關するの議を上り、尋て參議大木喬任も亦た其の議を上る。岩倉三條及び熾仁親王に謂て曰く「各參議、已に聖旨を奉體し其の意見を上る。宜しく各參議を御前に召させられ、親しく其の蘊底を叩き、肺腑を吐露して以て其の所見を上言せしむべし。請ふ左大臣之を奏上せられんことを」と。三條亦た之を懲慙せしかば、熾仁親王終に之を諾したり。

伊藤、山縣等各參議の憲政に關する意見書、既に提出し終りしも、獨り參議大隈重信は、未だ其の意見を上らざるを以て、明治十四年三月、有栖川宮熾仁親王、大隈に對して之を促すや、大隈之に答へて曰く「臣は、各參議御前に召さるゝの時に於て、親しく上言する所あらんとす」と。天皇之を聽させ給はざりしかば、大隈は終に意を決して意見書を草し、熾仁親王に由て之を上れり。其の文に曰く。

第一 國議院開立の年月を公布せらるべき事

人心大に進て而て法制太た後るゝときは、其弊や法制を暴壞す、人心猶ほ後れて而て法制太な進むときは、法制國を益せず、故に其進む者未だ多からず、其後るゝ者稍々少きの者に當り、法制を改進して以て人心に稱ふは、則ち治國の良圖なり。

去歲以來國議院の設立を請願する者少なからず、其人品素行に至ては種々の品評ありと雖も、要するに是等の人民をして斯の如き請願を爲すに至らしむるものは、則ち是れ人心稍々將に進まんとするの兆候にして、自餘一般の人心を察するに、其の後るゝ者亦た稀少ならんとす、然らば則ち法制を改進して以て、國議院を開立せらるゝの時機稍々方に熟すと云ふも可なり。

又た人心稍進み法制稍後るゝときは、人心の注著する所、一に法制の改進に在るが爲めに、夫の人民に緊要なる外國に對峙するの思想と、内國を改良するの思慮とは、殆ど其胸裏より放離し去り、唯た制法改革の一途に熱中せしむるに至らんとす、是れ亦國家の不利なり。

故に民智の度位を察し、國內の清平を謀り、制法を改進して、以て漸次立憲の政を布かせらるべき聖勅を執行あらせられんことは、則ち今日應に擧ぐべきの大綱、應に立つべきの根本なり、請ふ速に議院開立の年月日を布告せられ、憲法制定の委員を定められ、議事堂の創築に著手せられんことを、(開立の年月日第五條に詳説す)。

第二 國人の輿望を察して政府顯官を任用せらるべき事

君主の人物を任用拔擢せらるゝは、固より國人の輿望を察せらるべきことなれども獨裁の治體に於ては國人の輿望を表示せしむるの地所なきが故に、或は功績に察し或は履行に求め、其最國人の爲めに屬望せらるべしと叡鑒ある人物を延用して、政務の顧問に備

へらるゝも是れ已むを得ざるに由る者なり、若し政體に於て國人の輿望を表示せしむるの地所あらんには、其輿望を察し以て人物を任用せらるべきは無論なり、斯く如くせば則ち撰拔明に其人を得て、皇室益々尊かるべし。

立憲の政治に於て輿望を表示するの地所は何ぞ、國議院是也。何をか輿望と謂ふ、議員過半数の屬望是なり、何人をか輿望の歸する人と謂ふ、過半数を形る政黨首領是也。抑も國議員は國人の推撰する者にして、其の思想を表示する所なるが故に、其推撰を被りたる議員の望は、則ち國民の望なり、國民過半数の保持崇敬する政黨にして、其領袖と仰慕するの人物は是豈輿望の歸する所にあらずや、然らば則ち立憲の治體は、是れ聖主が恰當の人物を容易に叡鑒あらせ給ふべき好地所を生ずる者にして獨り鑒識撰擢の勞を免れ給ふのみならず國家をして常に康寧の慶禮を享有せしむるを得べきなり、何となれば斯くて撰用せられたる人物は、人民参政の地所なる國議院に於て過半数を占有するが故に、外には則ち立法部を左右するの權を握り、又聖主の恩寵を得て政府に立ち、自黨の人物を顯要の地に配布するが故に、内には則ち行政の實權を操るを得べし、是を以て内外戻らず、庶政一源より發し、事務始て整頓すべければなり。

其の政體は立憲にして其國康寧の慶福を享けず、或は時として紊擾紛亂の勢態に至る、列國治亂の迹を按するに、是等の不幸に陥入するの病源は、常に執政者が其地位を眷戀愛惜して捨て難きと、當時の君主が其寵遇の顯官を罷免し能はざるとより、立法部に於て輿望の歸したる政黨の首領と、行政顯官との間に軋轢を生ずるに因らざる者なし、夫の有名の立憲國なる英國の如きも千七百八十二年以前は、則ち是の如き狀勢なりし也。然れども積年累歲の經驗より同年以降は君主も輿望を察して顯官を撰用し、國議院中多數政黨の首領たる諸人に重職を授與するに至れり、然りしより以來は政府議院の間に於て復た軋轢の迹を見ること能はず、同國政黨の

争は常に議院に於てするも復た政府に於てせざるに至れり。

立憲政體の妙用は其實に在て其形に存せず、立法、行政、司法の三權を分離し、人民に参政の權理を附與するは是れ其形なり、議院最盛の政黨の領袖たる人物を延用して、之を顯要の地位に置き、庶政を一派に歸せしむる者は是れ其實なり、若し其形を取て而て其實を捨てば、立憲の治體は徒に國家紛亂の端緒を啓くに足るのみ。然らば則ち前述せる君主が人材登庸の責任より論ずるも一國康寧の政理より論ずるも列國治亂の實例に鑑照するも、政府の顯官には議院中なる多數最盛政黨の領袖たる人物を任用あらせられざる可らず。然れども人智の薄弱なるが爲に、一回は國民の輿望を得たる政黨も、其施政の巧拙に因て又衆望を失ひ、議院中の多數勢力却て他の政黨に移轉することあるべし。是等の場合に於ては、聖主亦衆望を察せられ、新勢力を得たる政黨中の人物より更に顯官を拔擢せられざるべからず、議院政黨の盛衰より生ずる斯の如き顯官の更迭は最も整然たる秩序あるを要とす。其新陳交代の間に存すべき順序は左の如くならんことを要す。

内閣を新に組織するに當ては、聖主の御親裁を以て、議院中に多數を占めたりと鑒識せらるる政黨の首領を召させられ、内閣を組立つべき旨を御委任あらせらる可し、然るときは是の内勅を得たる首領は、其政黨中の領袖たる人物を顯要の諸官に配置する組立を爲し、然る後公然奉勅して内閣に入るべし。(内閣の組立を委任せらるゝは通例政黨の首領を可とすれども、時として其黨中自餘の人に命ぜらるゝも可なり、但し斯くの如き場合と雖も行政長は猶其首領ならざるべからず、英國にも時として此例あるを見るなり)斯く最盛政黨の鑒識せらるゝの時に於ては、政黨に關係せざる宮方或は三大臣に顧問あらせられんこそ可なるべし。

内閣を組立る所の政黨、稍々議院に失勢するときは、政府より下付する重大なる議案は反對黨の爲に攻撃せられて、屢々議院中に

廢案と爲るべし、是れ即ち内閣政黨失勢の兆候なり、斯くの如きときは庶政一派に出ること能はざるが故に、失勢政黨は是時を以て退職するを常とす。

斯く失勢の兆候既に現然たる時に於て其政黨勢威に眷戀し猶ほ行政部を去らざる時決議を爲さん事を勸諭すべし。是の勸諭に従ひ、處決して而して失信用なりと決する時は、議院より聖主に對し内閣既に信用を議院に失ふ、速に親裁更撰あるべき旨を請願すべし。失勢政黨猶ほ退職せざるときは、聖主は議院の求めに應ぜられ之を罷免せらるべし。(英國等の例に因り失勢の兆候現はれしと同時に退職するを例とすべし)

然れども、執政政黨既に議院に失勢の兆を現はし、失信用の議決を受けんと欲するに臨むとも若し廣く國人の意想を察し其實に我が政黨の多數の屬望あるを洞識し、現在の國議員は誤撰なりと認むるときは、聖主の允許を蒙り、聖主に特有し玉ふ議員解散の權を以て直ちに是れを解散し、其改撰議員に於て我が政黨の多數ならん事を望むべし。若し多數たらば内閣を永續せん。若し少數たらんには則ち退職せざるべからず。是の解散權は則ち各政黨が最後の依頼と云ふも可なり。(是權は最も濫用を慎むべし濫用すれば大害を醸す英國の如きも是例は兩三回に過ぎず)以上政黨更迭の順序は大抵國の例に依るものなり。

第三 政黨官と永久官を分別する事

前述するが如く政黨の盛衰より顯官更迭を生ずるの時に方り、其更迭は全部に及ぶべきや將た幾分に止るべきやは則ち重要な疑問なり。凡そ諸般の事務は最も習熟を要す。加ふるに官衙の事の如き、其細瑣の條件は多くは舞法古例を参照するが故に最少の費額を以て淹滞なく最多の事を辨せん欲するには、屬僚下吏の永續勤務を以て最も緊要なりとす。然るに是等の官吏をして常に政黨と

更迭を與にせしめば其不利便蓋し言ふ可らざる者あらん。且幾萬の官吏其進退を政黨の盛衰に繋げば、各派軋轢の勢轉暴激を極むるに至らん。故に官吏中に於て其職任命を司て細務を親報せざる者と、任命に服事して細務を親執する者とを區別し、甲を政黨官として政黨と共に進退し、乙を永久官則ち非政黨官として終身勤続の者たらしむべし。又上等官人の中に於て、其地位重職に在りと雖も一國の治安公平を保持する爲に政黨に關與せしむべからざる者有り。是等をば中立永久官となし一種の終身官となすべし。(英國の例に出る)

政黨官の種類を略記すれば、參議各省卿輔、及、諸局長、侍講、侍從長等是なり。以上の政黨官は大概議員として、上下院に列席するを得る者とす。(大抵英國の例に依る)政黨官、及、非政黨官の別は、憲法制定の時に於て猶ほ詳議を要するが故に、今唯大要を掲ぐ。以下亦同じ)永久官の種類は各官廳の長次局長を除て以下の奏任官、及、屬官等是なり。是等の官人は議員たるを得ざる者とす。(同例)

中立永久官は、三大臣(政黨に關與せず聖主を輔佐し奉り、内閣組立の爲め最盛政黨に内勅を下さるる等に於て顧問に備り、公平に國益を慮られんが爲め、其非政黨官たらん事を望む。且大臣は三位と與に無人則闕の官と定められて可なるべし)及び軍官、警視官、法官是なり。以上三種の職は、皆國內の治安公平を保持するに在るが故に、其公平中正の令徳を備へん事を欲すべし。若し是等の官人にして熱心政黨に關與せば他黨を壓するが爲めに、或は兵力、或は裁判權を用ひ、國內の治安を妨げ、或は其公平を失し、社會の騷亂を醸生するに至る。是其中立不偏を以て令徳と見做す所以なり。以上の官人も亦議員たるを許さざる者とす。(同例)

又永久官、則ち非政黨官にして政黨に干與するの迹あれば、其主張たる者之を退職せしめて可なり。何となれば政黨官たる主張と

の關繫に於て公事に不利なる事多ければなり。(同例)

第四 宸裁を以て憲法を制定せらるべき事

法規已に立ち、而し人々に依るときは事輒く定る。定規未だ立たずして而て人先づ集るときは事動て定まらず。今や無前の治體を天下に施されんと欲するに當り、其完成に緊要なるは社會康寧の秩序なり。籌策一たび絶ゆるときは六馬奔逸して秩序容易に收復すべからず。故に先づ宸裁を以て憲法を制定せられ、是に依りて國議員を招集せられん事を欲す。右憲法の制定に付ては内閣に於て委員を定められ、速に著手せられんことを冀望す。

憲法の制定は重要な條件にして、就中上院の組織、下議員の選舉權、被選舉權等に至つては、最深密の用意を要す。是等の諸件は憲法制定の日に上陳すべきが故に今は是處に贅言せず。

前述するが如く、立憲治體の妙用は多く其實に存するが故に、憲法は極めて簡短にして大綱に止らん事を要す。又憲法は二様の性質を具備せんことを要す。二様とは何ぞ其第一種は、治國政權の歸する所を明にする者なり。其第二種は、人民各自の人權を明にする者なり。政黨の政行はれて而して人權を堅固にするの憲章にあらずんば其間言ふ可からざるの弊害あらん。是れ則ち人權を詳明するの憲章を憲法に添付せんと欲する所以なり。

第五 明治十五年末に議員を選舉せしめ十六年首を以て國議院を開かるべき事

立憲政治の眞體は政黨の政たるが故に立法行制の兩部を一體たらしめ、庶政一源に歸するの好結果を得るに至るは、已に前述する所なり。之を畢竟するに立憲の政は社會の秩序を紊らずして、國民の思想を平穩に表示せしむるに在り。然るに全國內政黨無きの時

に於て、卒然國議院を開放せば假令一朝幾多の政黨を生出すべきも、其根本堅固ならず、一般人民も亦何れの政黨は如何なる主義なるや知る能はずして、政黨の勢威頻々浮沈すること多からん。果して然らば其混亂紛擾の慘憺を政治上に現出し、夫の社會の秩序を保持するの治具に依而却て之を紊亂するの恐あり。戒愼せざるべけんや。政黨の時立せざるは、蓋し之を生ずる地所なければなり。然れども立憲の治體を定めらるるを公示せば、政黨の萌芽を發生すること應に速なるべし。斯して一歳若くは一歳半の年月を経過するを許さば、各政黨の持説大に世間に現れ、國人も亦甲乙彼此の得失を判定して、各自に其流派を立つるに至らん。是の時に於て、議員を選挙し、議院を開立せば、能く社會の秩序を保持して立憲治體の眞利を收め得べし。故に議員開立の布告は太た速かならん事を要す。開立の時期は卒然急遽なるべからず。是等の事理に因て考案すれば、本年を以て憲法を制定せられ、十五年首若しくは本年末に於て之を公布し、十五年末に議員を召集し十六年首を以て始めて開立の期と定められんことを冀望す。斯の如くんば、以て大過なかるべきを信するなり。

第六 施政の主義を定めらるべき事

凡そ政黨は、幾多の源因より成立すと雖も、亦専ら施政主義の大體を同くするを以て租結集する者なり。而て政黨の盛衰を致す所以の者は、則ち其施政主義が人心を得ると否やとにあり。又各政黨が互に人心を得んことを望み、相攻撃する所の點も亦各自の主張する施政主義に在り。故に政黨の争は則ち施政の争にして、其の勝敗は則ち施政主義の勝敗なり。前述するが如く立憲の治體定立せられ、國人の輿望を察して政府の顯官を任用せらるゝに至るときは、則ち政黨成立せざるべからず。政黨を成立せんと欲するときは、則ち其持張する施政の主義を定めざるべからず。故に現内閣をして一流の政黨を形する者たらしめんと欲せば、其成立に最緊要なるは

則ち施政の主義を定むるの一事是なり。然るが故に國議院設立の年月を公布せらるゝの後に於て、直に現在内閣の施政主義を定められん事を切望す。施政主義に就ては、重信所見の在るあり他日別の之を具陳すべし。

第七 總論

立憲の政は、政黨の政なり。政黨の争は主義の争なり。故に其主義過半数の保持する所と爲れば、其政黨政柄を得べく。之に反すれば政柄を失ふべし。是れ即ち立憲の眞政にして、又眞利の在る所也。若し其形體に則りて而て其眞精を捨てば、獨り國土の不幸のみならず、蓋し又執政者の禍患なり。昔に執政者當時の禍患なるのみならず、其戀權の汚名を後世に遺傳するに至らん。

假令、純潔清白の心事を以て政を天下に行ふも尙ほ戀權自利の心あるを疑はるゝは是れ執政者の病患也。然るに今や立憲の政を施さんとするの時に當り、立憲國現行の通則に反し、其眞利を捨て、而て却て戀權の痕を現さば、執政者にして焉ぞ國人の爲に厭忌せられざるを得んや。況んや其戀權は却て速かに失權の種たるをや。

然りと雖も權勢を棄却するは、古より人情の難する所にして惟國家を利するに熱渴する者獨り能く之をなす。政府は強大の威力を蓄する今日の執政者にして勢威に眷戀せず、立憲政治の眞體を固定せば其徳を後昆に表示するに足らん。又假令社會の毀譽に關せざるも亦自ら願て以て中心に快然たるを得ん。

世人常に曰ふ。邦國の治亂は多く政治の慣習に生ずと。果して然らば社會の秩序を紊さずして靜穩なる政黨更迭の新例を定立し、政治上に於て國人に康寧を慶享せしむるの端緒を啓かんこと、是豈に今日の執政者が應爲の急務にあらずや。右謹で議す。

熾仁親王之を覽て大に驚き、密に之を三條、岩倉に示したり。其の後、六月、岩倉が、内閣に於て、大隈と會するや、之に謂て曰

「嚮に殿下、三條と予とに限り、密に足下の建議を示せり。予之を讀むに、足下は十六年の首を以て國會を開かんと欲す。予は其準備の未だ完全せざらんことを恐る。請ふ其詳なるを聞かん」大隈曰く「今日は時機已に迫る。到底、姑息の手段を以て維持すべからず。譬へば、此に人あり、園林を觀んと欲し、門前に麿集するに於て、依然其半扉を開かば、相争て闖入し、其の狼藉言ふべからず。如かじ、其未だ麿集せざるに先ち、其の雙扉を開き、之を待たんには。今、十六年の首を以て國會を開かんとするは、即ち輿論の先鞭を著くるものにして、所謂其の雙扉を開き、之を待つる善巧的手段のみ」岩倉又又大隈に謂て曰く「足下の見、伊藤と異同なきや否や」大隈曰く「唯た小異あるのみ」と。

これより數日後に岩倉は三條を訪ひ、大隈と問答の顛末を語り、相議して曰く「大隈の建議を伊藤に示し、其の異同を問はば如何」と。三條之を善とし、乃ち大隈の建議を御前より請下し、以て之を伊藤に示し、伊藤之を覽て曰く「嚮に予の建議を大隈に示すや、大隈は其の主義を同うすと答へたり。然るに、今や此の如き意見を上言し、以て之を實行せんことを冀望するは、其意の在る所を知るに苦まざるを得ず」と。書を岩倉に贈り、其職を辭せんことを乞ひ、疾と稱して朝せざりき。

岩倉乃ち大隈を招き、伊藤と面晤して其の意思を疏通すべきを論し、大隈乃ち親しく伊藤を訪ひ、終に其の建議を撤回せり。是に於て二人の意思、一旦氷釋するに至れりと云ふ。

大隈の建議は、福澤諭吉の手に成りしものなりと聞きしも、其の果して然るや否やを審ならざるも、各參議の建議中に於て、一種の異彩を放てるものにして、是れ則ち大隈が立憲政治家として、他の各參議と其の撰を異にする所以なり。

七 國會開設と詔勅

政府の危機は刻々と迫り、此際岩倉具視の不在は、薩長黨の不利とする所なり。蓋し、當時内閣の危機に處して大事を決するものは、首として岩倉の英斷に待つるの外無かる可からず、而も岩倉は、事實に於て最も 陛下の御信任を辱うし、且つ薩長派の信頼する所と爲りしを以てなり。是に於て、三條は、九月六日、又書を岩倉に寄せて内外切迫の情勢を告げ、其の歸東を促したり。

九月十八日、參議山田顯義、微服潜行して京都に入り、岩倉を訪ふて曰く「嚮に大隈の建議に因り、伊藤と紛紜の事情ありしは、唯、一時相互の意見齟齬する所あるによるものと、看過したりしも、頃日竊に聞く所に據れば、大隈は、河野敏鎌（農商務卿）と相議し、黨派を樹立し、民権論者と其の氣脈を通じ、以て事を謀るものゝ如し。又た開拓使官有物件の處分に就て物議の喧嘩を招きたる所以のものは、大隈に關繫ある富豪が巨萬の金を各新聞社、及び、各政談者流に投じ、官有物拂下處分問題を痛論し、政府を攻撃せしむるに由ると。此の富豪某々の如きは、前年北海道諸製造所の拂下を内願せしも、其の拒絶する所と爲りしを以て、今回の官有物拂下處分を聞き、憤慨措かず、此の講議を施すに在るものゝ如し。要するに、大隈派が内外相應じて大に欲するものを行はんと欲するの機會を作らんとするに外ならず、然るに、官有物件の處分は、開拓使の申請一理あり。又た工場拂下の規則に抵觸せず、故に政府は、一旦許可を與へたるを以て、若し世論沸騰の爲に遽に其の指令を取消すが如きあらば、政府の威信に關するや、大なり、今日は、其代價未だ決定せざるを以て、詳細に物件を調査し、時價相當の金額を納附せしめば、必ずしも不可なかるべし。」岩倉曰く「官有物件の處分は、當初より予其議に與からざるを以て、今、直に其可否を答ふること能はず。但だ新聞社、及び、政談會の如き、十分之が取縮法を厲行

し、之を鎮制せざる可からず」山田曰く「官有物拂下處分問題は、末なり。今日の計は、憲法編纂に従事し、國會開設の期を豫定するを以て根本の問題と爲す。因て、車駕還幸の日を俟て速に其議を執行せられんことを望む。其時に於て、大隈の意見を採用せらるゝ乎。又は内閣諸僚の意見を採用せらるゝ乎。一に宸斷如何に在り。若し内閣諸僚大隈の意見を採用せらるゝに至らば、大隈の職を黜け、其の黨與の官吏は、一切之を排斥せざる可からず。閣下請ふ疾を力めて歸東せられんことを」岩倉曰く「憲法制定は、一昨年來、予の卒先して首唱する所なりと雖も、今日に及びて未だ行はれざるは、予の遺憾とする所なり。今や併せて國會開設豫定の期を決議せんことを奏上するは予の賛成する所。但だ大隈免黜の一事に至ては、前日大隈と伊藤との間、意思疏通したりと云ふに於て、伊藤と面晤したる後に非ざれば、同意すること能はず。又た予は疾未だ平癒せずと雖も、東駕還幸の前日は、即ち十月十日までには歸東すべし」と。山田乃ち之を領て去る。

九月二十七日、三條は電報を以て岩倉の歸東を促がし、十月一日海軍卿川村純義をして、迅鯨艦回航の便を借り、神戸より京都に至り、岩倉に謁し、其の歸東を促がさしめたり。川村の岩倉に謁するや、之に謂て曰く「時局危急なりと雖も、内閣員各其の心を一にして之が挽回に盡力せり。前日山田拜謁の際、陳述するが如く、憲法調査に従事し、國會開設の期を豫定するは、目下の急務なり。而して之を執行せんと欲せば、閣下の力を借らざる可からず。又た官有物拂下の處分は予、西郷、大山と共に黒田に説けり。彼れ未だ明答を與へずと雖も、必ず平穩に解決すべきを信ず。願くは閣下予と共に迅鯨艦に搭じて歸東せられんことを」岩倉曰く「予當に歸東して時局の爲に微力を致すべし。但た官有物拂下處分問題に就ては政府既に認可の内命を傳へたる後なるを以て、今遽に之を取消すは未だ可ならず。足下宜しく西郷、大山と同郷の交情を以て、黒田を懇諭し、黒田より前日の申請を撤回せしむるに努力すべし」と。四日、岩

倉終に京都を發し、兵庫に至り、川村と共に迅鯨艦に乘じ、六日歸京せり。此の日三條、岩倉を訪て機事を議し、井上參議亦至り、岩倉に謂て曰く「今日の事、唯た閣下の決心如何に在るのみ。願はくは神算を決せられんことを」と。

七日、伊藤は、岩倉を訪ひ、國會開設準備の勅諭案、内閣、元老院、及、參議院章程案を示し、速かに之を開議に附せられんことを請ひ、且つ大隈近日行動の詳細を陳して其の免黜を要請したり。西郷も亦た岩倉を訪ひ、之に説くこと伊藤の言の如し。此の日岩倉は太政官大書記官井上毅を召見し、勅諭案を示して其の意見を問へり。井上辭し去るの後、答書を岩倉に致せり。其の書に曰く。

内 啓

一 勅諭云々の件。

第一 主上聖慮確定、廟議畫一を示す。

第二 内閣の一致を示す。

第三 此人心動搖の際、此勅諭あるに非ざれば、挽回無覺東更に換言すれば、人心の多數を政府に牢結すること無覺東。

第四 此勅諭は、縱令、急進黨を鎮定せしむること能はずとも、優に中立黨を順服せしむべし。全國の士、猶中立黨多し。

今此舉あらざれば、彼等も變じて急進黨と爲ること疑なし。

第五 此勅諭に由て政黨を判然せしめ、反對黨は明かに抗抵を顯はすに至るべし。是れ極めて得策なり。

以上之理由なるにより、毅は必要不可易と存候。若し此一手段を闕き候はば、百事無力に相成可申と確信仕候。

先時匆々奉言上十分に微意を盡さず、遺憾に奉存候間、猶奉陳述候。

右奉申上候、頓首再拜。

十月七日

右府公閣下

明日、井上は、又た書を岩倉に寄せて前意を詳陳せり。其の書に曰く。

屢、奉言上候は、御煩讀之恐無之にあらず候得共、中心憂念に不堪、猶奉仰臺鑑候。現今の景況、立志社、其他、昨年之請願連中は、府中に於て、國會期成會を催し、福澤は盛に急進論を唱へ、其黨派は三四千に滿ち、廣く全國に蔓延し既に鹿児島内部にも及び、其他各地此二三十日來、結合奮起の勢にて、此儘打過候には、事變不測と相見え候。若し還幸後、早々聖旨を以て、人心の方向を公示せられず候而、一度彼より先鞭を著けられ候に至らば、憲法も徒に空文に歸し、百年之大事を誤り、善後の策なきに至り候は、必然と奉存候。況や此度内閣に小變動を生じ候はば一層風潮を激し、一時之勢は政府之全力を用ひされば、撲滅すべからざるに至るべし。是を爲すには、勅諭を以て、廟謨を示し、且、名義を正うし旗色を見せ、全國勤王の士に力を著け候事、第一之急務と奉存候。伏願此事猶臺慮を被回、速に御決斷被遊候はゞ、國家之大幸と奉存候。如此一大事、末生之知る所に無之候得共、下問之辱きに奉對、再應奉言上候。頓首再拜。

十月八日

右公相閣下

此日、伊藤も亦岩倉を訪ひ、機事を議し、辭し去るの後に於て、時局挽回の方策に付陳言する所ありき。其の書に曰く、

今朝參殿仕候處、御待賓中、立談寸刻、不能盡愚意殘懷之至奉存候。只今西郷來訪承候處、黒田賜謁之際、黒田より御直に開拓使一件、及一言、如何様御處分有之候とも異議無之段は、御聞取被爲在候趣、右にて三大臣公御協議上には御充分なる事と確信仕候。却説一昨朝供尊覽置候詔書案御發表云々之義も今朝西郷へ御談示有之候哉に奉窺候處、一昨朝も申上候如く、此義は博文大勢を察し、將來の爲に計畫する所、今日不得已の御處置と千思萬考之餘に申出候儀、深く御熟察を奉乞度候。又退而勘考仕候、到底國會論の局は、早晚御結無之而は、明治政府の艱難無休時事は、申上候迄も無之。且、薩長中興補翼の功績も竟に水泡に歸し候のみならず、却て天下後世の爲に禍害を残し候様にて不相濟事に付、夫是前後照考の末、此有極の御處分を申立候次第に御座候。又現状に就て申上候ても、此大御英斷なくては、内々如何程の御良考有之候共、恰も曇天に太陽の光輝を蔽はれたるが如くなるべく、寧ろ大號一發、晴天白日に威令を御伸張相成方萬々奉希望候。勿論期限の長短に至ては、一年二年の間、強て争ふべき儀にては無御座候へ共、却て人心收攬の効無之様にては政策の得たるものに無之。先づ明治二十三年に御治有之候はば、緩急其宜しきに適すべきかと奉存候。此儀は此節御英斷中の骨子と奉存に付、尙上陳仕置候。今朝條公へも再應申上置候に付、御相談奉願上候。拜具。

十月八日

岩倉右大臣殿

伊藤博文

亦以て政府が如何に慌惶狼狽し、輿論の重圍を破らんとするに汲汲たりし乎を知るべく、之と同時に、國會開設準備の發令案が、如何に彼等苦心慘愴の餘に出でし乎を知るに足れり。

又開拓使官有物拂下指令取消に就ては、西郷、川村及び樺山資紀より切に黒田に説く所ありしに、黒田は、初め之に應ぜざりしも、

後、翻然として過を改め、終に之が指令取消説に同意し、時局問題に關し薩派の代表者として伊藤等と共に奔走する所少なからざりき。而して十月六日、彼は書を岩倉に寄せて時局挽回の英斷を施さんことを促がせり。其の書に曰く。

拜啓、川村より只今閣下御歸京被遊候旨吹聴を請け、日夜三秋の如く、待上兼候。然者山田參議、川村卿より詳細情實御聞取相成候通に而、實に國體に關する無此上危急之場合に而苦慮罷在申候。既に明日大隈參議歸京之由疾くに御了承候半、近頃恐縮之至御座候得共、御還幸前に閣下條公は勿論、其他、伊藤參議等へ協議、智謀を回らし、必ず天下の輿論とて陰に計策を働き候に、萬々相違有御座間敷、決して御動搖無之、彼の術中に陥らざる様、奉悃願候、返す／＼も姑息之情義に惹かれず、斷然たる御處分無之候而は、臍を噬とも不被爲及、不可救御難題に立至、天下萬民をして塗炭の苦界に陥らしむるは案中にて千載之遺憾に御座候に付、是非何く迄も根本之大病根驅逐、根軸を堅固にし、確乎不拔之標準を立られ、上は奉安敬慮、下は億兆之民をして堵に安じせしむるは、今日に在り。非常之事を處するには、從て非常之變を生ずるは、自然之者に付、如何様なる事到來候共、御動搖なく、御英斷禍を轉じて福と爲すは、是より外に有御座間敷、又時機を失しては、一世那翁さへ、一夜の後れに帝王の尊きも遂に擄と爲り、其他、優柔不斷、國家を亡したる主、枚擧するに遑あらず、即ち該時の如し。油斷大敵にて、時機を失はず、御遠算なきは勿論、斷然、御決行有之様、悃禱之至に堪へず、恐々敬具。

十月六日

清 隆

岩 倉 公 閣 下

二仲 拜趨陳述仕度候得共、至急を要する事故、不取敢衷情書面を以て上申候也。

亦た以て黒田が翻然として自省し、薩長聯合の策に一致し、大隈派を排斥するに至りたる所以を知るに足れり。
九日、三條、伊藤、西郷、山田等、岩倉邸に會し、國會開設準備の勅諭宣布等の順序を議せしが、岩倉は左の條目を書して之に示せりと云ふ。

- 一 千住驛に於て、車駕を奉迎し、行宮に於て、目下朝野の形態を言上の事。
- 一 還幸の後、三大臣直に談合し、諸事一決奏聞、宸斷を仰ぐ事。
- 一 大隈參議免黜處分順序の事。
- 一 國會開設勅諭の件は、何年を期し、斷行すべきことを議決し、宸斷を経て直に宣布の事。
- 一 内閣、及、元老院章程改正、宸斷を施行の事。
- 一 開拓使官有物拂下處分、速に相定め、公衆をして安堵せしむる事。

此日、黒田は更に書を岩倉に寄せて、斷然意を決して大事を處分せんことを勸告したり。其の書に曰く。
拜啓益御清勝奉恐賀候。楮 聖駕還幸の期既に明日に相迫廟堂上大事の御場合に奉恐察候。過日来、屢、尊諭拜承、鄙情も縷陳仕置候間、今更申迄も無御座候得共實に不容易時會に付、此を爲すには、最初は如何程確乎たる決意にても其事に臨めば、又種々の情實出來、之に牽繞せられ、機會を誤り終に十分之奏功を得ざるは、往々人情の所不免、殊に今般の事の如きは、實に國家の安危に關し候場合に付、初より身を死地に置き、是非爲し遂ぐるの決心に無之候ては十分の成功は無覺束、若し事成らざれば、斃れて後已むと申位にては、既に一著を放著し、事機を失ふの基と存候。偏に閣下御注意の程千祈萬禱之至に御座候。古今大事を誤り候者、纒に一

瞬間の遲疑に依り、遂に回復す可からざるの勢に至り候例不少。禍福之機其間髪を不容、廣く之を古今に徴する迄も無之。王政復古の際、徳川慶喜、犯闕の時に當り、伏見烏羽開戦の後に至り、賊勢強衆の風聞有之、廟中紛紜、既に薩長を黜くるの説を爲すものも有之候位の處、獨り閣下泰然御動搖無之故、大久保參議と共に暴説を排せられ候に依り、遂に慶喜排退の功を奏し、今日の偉績を見るに至りしは、兼而感銘罷在候儀に有之、且又明治六年征韓論紛紛之節も廟議一定之後、内閣多少之更迭、陸軍武官之紛擾ありしも、遂に持重して、大變動を生ずるに至らざりき。是等の處能々御推考被下度。將又非常之困難を來すは、當然之儀に御座候間、今後種々言ふべからざるの障害を起すは、勿論に有之、既に木戸、大久保の如き、共に維新の大業を賛け、艱難辛苦を同ふせん者すら、平定之後には猶多少の情實に依り、御配慮を煩し候儀、往々有之候に付、今般の事件落著の上は、殊に其邊御垂念被爲在候様今日より冀望仕候。右區區之衷情瀝陳仕置度。草々如此御座候。御諒照奉願候。頓首。

十四年十月十日

黒田 清隆

岩倉右府公閣下

當時各參議が岩倉に信賴して時局の難を濟せんことを期し、腐心焦慮の状態を眼前に見るの感あり。

十一月十一日 天皇の北海道より還幸させ給ふや、即夜、三條、熾仁、岩倉の三大臣を始めとし、寺島、山縣、伊藤、黒田、西郷、井上、山田の各參議を延見して御前會議を開き、大隈參議免職の件、國會開設勸諭の件、内閣及び元老院章程改正の件、參事院設置の件、開拓使官有物拂下の件を議したり。當時、各參議が連署して上りたる奏議に曰く。

國會開設の奏請

臣等謹而惟るに 陛下夙に立憲の政體を建てんことを期し給ひ、乙亥の歲聖勅を下し、元老大審二院を設け以て其基を爲す。聖慮の深き神算の遠き、臣民俱に仰ぐ。爾來其緒を繼ぎ、地方會議を起し法典を改良し、蒸蒸日上。然して、政換漸に従ひ、進むに躁急を以てせず、俄に立憲の實を擧るに至らざる者、他なし、中興の業纒に其成るにつき、釐革の時機未だ熟せざる者あるに因り、將に他日を俟て徐ろに擴充する所あらんとするなり。臣等竊に視る、方に國會の開設を熱望する者量るに匆急の心を以てし、言に許して行に果さずとなし、或は過激の論を爲すに至る。今の時に及て、速に一定の廟議に依り、明かに天下に提示するに非ずんば、人民或は皇猷の在る所を知らずして其方嚮を誤るに至らん。是れ宜く先づ國會開設の期を豫定し、舉行の順序を措畫し、以て大政の嚮ふ所を公示し、人民をして廟議の一なるを知らしむべし。

抑も立憲の政體を創むるは前古未曾有の大局にして、尙且後來萬世の鴻業を成さんとす。其或は經畫未だ周からずして、匆卒事に従ひ毫釐の差或は千里を誤るに至らば、大計一たび左して復た回すべからず。是れ宜く設備慎重、舉行序に循ふべくして、其間仍ほ數年を要せざるべからず。況や中興草創の事業未だ了局に至らずして、施行方に半なる者多きをや。聖謨既に示すに豫定の期を以てして、而して民間猶故らに私議を逞くし、急を争ひ躁を競ひ、以て事變を煽動するが如きあらば、此れ乃ち王化を阻し國安を害するものなり。宜く處するに國法を以てし、良民を惑すに至らしめざるべし。

憲法を定むるの標準に至ては、臣等竊に以爲く、建國の本各源流を殊にす。彼を以て此れに移すべからず。祖宗基を創め傳ふるに神器を以てす。民と之を守る萬世不易の道なり。陛下時機を照鑒し、古今を變通し將に政權を分て之を衆庶に公せんとす。蓋し實に祖宗の遺烈を掲げ懿訓を廣むるに過ぎざるなり。今民間政談を爲すものを視るに、好て歐米詭激の説を主張し、國體の何たるを顧

みざる者往々之れ有り。臣等實に之を危む。竊に願くは憲法の成る、各國の長を採酌するも、而も我國體の美を失はず。廣く民議を興し、公に衆思を集むるも而も我王室の大權を墜さず乾綱を總攬し、有極を建定し、以て萬世不拔の基を垂れんことを。

臣等又竊に按ずるに、立憲君治の國其の以て基趾を鞏固にする所、抑も亦道あり。一に曰く元老院の設、貴族老成の組織する所たり。二に曰く陸海軍は帝王の親ら統帥する所たり。

蓋し國に上下兩議院あるは車の兩輪あるが如し。而して元老院は將に以て下院と並び立ち、其平衡を持し急變激進の弊を防ぎ、永遠憲法の保障、王室の載翼たらんとするなり。現に我が元老院の設置に其端を啓き、而て未だ其實を擧ぐるに至らず。今宜く其組織を一變し、之を更張すべし。其の概略左の如し。

第一、皇族僅に滿十八歳に至れば、元老官に列し、任期を限らず。

第二、華文爵位の例を設け、有爵の貴族となし、其俊良を抜き、任期を定めて元老官を勅任すべし。

第三、士族の封建武門の世に於ける、平民の上に位し、教育素あり、氣節有爲の人多く其間に出づ。是れ宜く貴族の一部たるべし。今其中に抜き、之を榮用し、華族と俱に元老に列せしめ、其報效を收むべし。但之を採るの方法は同族の公撰に於てし、一府縣各若干人を擧げしめ、其任期に至ても華族に比すれば亦較短縮に就くべし。

第四、文武官の勳舊に採るは仍ほ舊貫に仍る。

陸海軍制に至つては、蓋し天子は兵馬の元帥にして、軍人は王室の爪牙なり。故に軍人たる者純ら國を愛し君に忠なるの義を結び、政を議するの權あることなし。今宜しく其紀律を制し、陛下又親く之を鼓舞振作し、其義方を示し、其れをして傳へて習風を成し、

以て國家の干城たらしむべし。

以上陳ふる所を總ふるに、國家開設を豫定するは、大政の嚮ふ所を公示する所以なり。憲法を定むるに、國體を重んずるは、篤く祖宗の遺業を守る所以なり。元老院を更張し皇族、及、華士族を以て之に充るは國の基趾を固くする所以なり。元老院の組織既に更張を経ば、豫定の期に依り、國會を開設し、互相平衡して偏重なきを得ん。其軍制を肅し、軍心を一にするに至ては、則ち又國を衛るの要を以て緩くすべからざるものなり。是れ皆臣等區々の誠に 陛下立憲の聖猷を贊襄し、始を成し終を克くすることを願ふ所以なり。謹で所見を具し、聖裁を仰ぐ。臣等誠惶誠恐謹で奏す。

寺島 參議

山縣 參議

伊藤 參議

黒田 參議

西郷 參議

井上 參議

山田 參議

明治十四年十月十一日

天皇之を嘉納し、明治二十三年を以て國會を開設することに決し、翌十二日、大詔な換發せられたり。所謂國會開設の勅諭、即ち是なり。

勅諭

朕、祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣ギ、中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ總攬シ、又夙ニ立憲ノ政體ヲ建テ、後世子孫繼クベキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス。嚮ニ明治八年ニ元老院ヲ設ケ、十一年ニ府縣會ヲ開カシム。此レ皆漸次基ヲ創メ序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非ザルハ無シ。爾有衆、亦朕ガ心ヲ諒トセン。

願ルニ、立國ノ體、國各宜キヲ殊ニス。非常ノ事業、實ニ輕舉ニ便ナラズ。我祖我宗、照臨シテ上ニ在リ。遺烈ヲ揚ゲ、洪模ヲ弘メ、古今ヲ變通シ、斷ジテ之ヲ行フ。責、朕ガ躬ニ在リ。將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ國會ヲ開キ、以テ朕カ初志ヲ成サントス。今在廷臣僚ニ命ジ、假スニ時日ヲ以テシ、經畫ノ責ニ當ラシム。其組織權限ニ至テハ、朕、親ラ衷ヲ裁シ、時ニ及テ、公布スル所アラントス。

朕、惟フニ、人心進ムニ偏シテ、時會速ナルヲ競フ。浮言相動カシ、意ニ大計ヲ遺ル。是レ宜シク今ニ及デ謨訓ヲ明徴シ、以テ朝野臣民ニ公示スベシ。若シ仍ホ故ヲニ躐急ヲ爭ヒ、事變ヲ煽シ、國安ヲ害スルモノアラバ、處スルニ國典ヲ以テスベシ。特ニ茲ニ言明シ、爾有衆ニ諭ス。

奉 勅

太政大臣 三 條 實 美

明治十四年十月十二日

是れ實に戊辰三月五條の誓文、八年四月十四日の立憲詔勅と共に憲政史上に炳耀するに足るべき詔勅なりとす。

或は曰く「十一日の夜、國會開設の期限に就ては、大臣參議中、各區區の議ありて、或は十八年と云ひ、或は二十年と云ひ、或は二

十三年と云ひ、或は二十五年と云ひ、更に一決する能はざりしを以て、以上は、只管、聖斷を仰ぎ奉るの外なしと爲し、此旨、上奏せられたるに、天皇には暫らく御勘考遊ばされ、終に御筆を執らせ給ひ「二十三年」と筆太に記して曰く「爾等、能く此責に任じ得るや」と。是に於て、大臣參議一應御前を退き、評議を決定し、又た御前に進み、奏して曰く「臣等一同、鞠躬盡瘁、誓て其の責に任じ、必ず二十三年を期し、國會開設の勲慮に副ひ奉らんことを期すべし」と。是れ其二十三年を期して國會を開設するに決したるなりと云ふ。(明治政史參照)之を要するに 天皇が速に閣臣の奏議を容れさせ給ひ、國會開設の大詔を渙發せられたるは、空前の盛事にして、又曠後の聖斷なりと謂ふべし。

二十一日、太政官職制章程を改正して參事院を置き、又た内閣參議と各省行政長官との分任組織を改め、再び兼任組織の制に復し、閣臣の更迭ありたり。其任免即ち左の如し。

免兼官	參議兼元老院議長	大 木 喬 任
兼任司法卿	參議(正四位勳一等)	大 木 喬 任
任元老院議長	參議(正四位勳一等)	寺 島 宗 則
兼任參事院議長	參議(正四位勳一等)	伊 藤 博 文
兼任農商務卿(兼參議議定官如故)	陸軍中將兼參議(議定官正四位勳一等)	西 郷 從 道
兼任内務卿(兼參議議定官如故)	陸軍中將兼參議(議定官正四位勳一等)	山 田 顯 義
任參議兼大藏卿	内務卿(正四位勳一等)	松 方 正 義

任元老院副議長	大藏卿(正四位勳二等)	佐野常民
兼任參議(兼陸軍卿議定官如故)	陸軍中將兼陸軍卿(議定官正四位勳二等)	大山巖
兼任參議(兼海軍卿議定官如故)	海軍中將兼海軍卿(議定官正四位勳一等)	川村純義
任參議兼文部卿	文部卿(正四位勳二等)	福岡孝悌
任參事院議官	工部卿(正四位勳二等)	山尾庸三
任參事院副議長	司法卿(正四位勳二等)	田中不二麿
任參議兼工部卿	元老院副議長(從四位勳二等)	佐佐木高行

第二章 政黨啓蒙時代

一 板垣自由黨を組織す

我が帝國に於ける政黨の結成は、明治七年一月板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平、由利公正諸氏の名を以て、組織せられたる愛國公黨を以て、其の端緒とすと雖も、愛國公黨は其の實、一種の政治的俱樂部に過ぎずして、政黨としての組織體を成するに至らず。而して其の能く政黨としての組織體を成し、其の主義綱領を天下に發表したるものは、自由黨を以て其の嚆矢すべし。

是より先は、明治十三年十一月の交、國會期成同盟會員は愛國支社に會同し、其の會名を改めて、大日本國會期成有志公會と稱し、國會開設請願に對する善後策を講じてありしが、當時會員の議、二説に分る。其の一は、國會期成の同盟運動を持續して益々此の結合を擴張すべしと云ふ説、其の二は國會開設を目的とするのみにては、未だ十分ならず、宜しく自由主義に立脚する政黨を組織すべしと云ふ説、是なり。而して多數の議は國會期成有志公會の名を存し、自由主義の政黨を樹立することに就ては、又別に一團體を組織すべしと云ふに歸著せり。

河野廣中氏等は夙に政黨組織の志あり、其の準備として東北有志會を興し、中央に在りても、屢ば同氏と謀る所ありしが、此に至り、以爲らく「國會期成同盟の版圖、大なるが如しと雖も其の基礎未だ鞏固なりと謂ふを得ず。其の善後策としては、純然たる政黨を組織して同主義の糾合を圖り國民の輿論を喚起して政府を鞭撻し、憲政建設の目的を達するに若かず」と。同志と共に政黨を組織するに決し、先づ同志糾合の爲め、十一月廿日には、江東中村樓に、二十七日には、枕橋八百松樓に自由懇親會を開きて、同志の意思疏通を圖り、三十日には、國會期成同盟員の集會を向島植半樓に開き、前後政黨組織の議を盡すこと數回、終に二月十二日、及び十五日、築地壽美屋樓の會合に於て、立憲の事略ぼ定まるに至れり。此の日の來會者、河野廣中、松田正久、山際七司、内藤魯一、沼間守一、山田平左工門、森脇直樹、島地正存、植木枝盛、林包明の諸氏等にして、沼間氏は推されて座長と爲り、左の盟約四箇條を議定したり。

第一條 我黨は我日本人民の自由を擴充し、權利を伸張し、及、之を保存せんとするもの相合して之を組織するものとす。

第二條 我黨は、國の進歩を圖り、民人の幸福を増益することを務むべし。

第三條 我黨は、我日本國民の當に同權なるべきを信ず。

第四條 我黨は我日本國は立憲政體の宜きを得るものなるを信す。

尙ほ申合規則數條を定め、中央集會所を東京に設くること、毎年一回大會を開くこと等を決し、東京横濱毎日新聞社を以て、自由黨通信所に充て、沼間氏を擧て主任委員と爲したり。

又た土佐の立志社は、同盟合議書の第四條に基き、憲法調査の急務を認め、調査局を其社中に設け片岡、山田、島地氏等之を督し、坂本南海男、山本幸彦、植木枝盛、廣瀬爲興、北川貞彦氏等を以て其の委員と爲し、更に谷重中、森脇直樹、兒島稔氏等を加へ、廣く歐米各國の憲法を調査し、善美なる立憲政治を建設せんことを期したり。

二 大隈改進黨を組織す

自由黨は、愛國社再興、國會期成同盟會を中心として組織せられたる國體にして、慷慨憂國の志士に富めりと雖も、其の議論動もすれは矯激に馳せ、知識階級資産階級に屬する人士は之に與するを欲せず、是れ實に自由黨の缺點にして、此の缺點を補はんが爲に、知識あり、名望あり、資産ある各階級を網羅して、自由黨と對峙する政黨を組織するは、時代の要求なりき。此の要求に感ぜんが爲に政黨組織に著眼したるものに、前に福澤諭吉、後藤象二郎氏等あり。後に大隈重信伯あり。而して改進黨は、此の時代の要求に應じて生成されたるものなりき。

是より先に、福澤諭吉は、政黨組織尙早論を主張しつゝありしが、明治十四年大詔渙發の結果、自由黨の組織せらるゝや、彼は俄に政黨組織の己むなきを認識し、英國流の政黨を樹立し、知識あり名望あり、資産ある各階級を網羅するを、必要なりとし、之を後藤象

二郎氏に謀れり。蓋し後藤を推して、其の首領と爲し、國民中樞の勢力を集めて、政界に於ける地歩を占めんとするに在りき。後藤も意願る動き、一日板垣退助、中島信行、谷重喜、片岡健吉、竹内綱、河野廣中氏等を高輪の私邸に招き、彼等同志の諒解を得て、新政黨を組織せんとせり。其の案は、後藤自ら其の黨首として、老成家、貴族、資産家及び學者の各階級を網羅して、自由黨の缺點を補はんとするに在りき。然れども、其の案は、河野等の反對に由りて、後藤も遂に政黨組織を斷念するに至れり。

野に在りて、自由主義を唱道し、民選議院開設論を主張し、自由黨を組織して其の首領となりしものは、板垣退助伯にして、彼は憲政創建の殊動者として、憲政史に特筆すべき第一人者なれど、朝に在りて、憲法制定、議會開設の議を主張し、其の議容れられずして、野に下り、自由黨と對峙して、立憲改進黨を組織し、藩閥黨に反抗したるものを大隈重信伯と爲す。板垣をして、憲政創建史に缺くべからざる第一人者とすれば、大隈も亦憲政創建史に特筆すべき殊動者なり。

改進黨は、十四年の政變に關係して野に下りたる前農商務卿河野敏鎌、前驛遞總監前島密、判事北島治房、沼間守一（前元老院書記官）、矢野文雄（前統計院幹事兼太政官大書記）、小野梓（前一等検査官）、牟田口元學（農商務大書記官）、春木善彰氏等が大隈伯を中心として組織したる政黨にして、帝國に於ける知識階級を網羅したる團體なり。彼等は明治十五年三月十四日を以て、立憲の旨趣書を發表し、越えて十六日、明治會堂に於て、立憲改進黨の結成式を舉行せり。其の議決したる主義政綱並に黨則を掲ぐれば、左の如し。

大詔一降立憲の事定まる。我儕帝國の臣民は萬世一遇の盛時に遭ふ。惟ふに此際如何の計畫を爲し、如何の職分を盡し、帝國臣民たるに愧ることなき乎。他なし、唯一國の政黨を結び、相集まり相同ふして、我興望を表するあらん耳。來れ我兄弟、來て我政黨を結び、我臣民たるの職分を盡せよ。

幸福は人類の得んことを期する所なり。然れども少数専有の幸福は我黨之に與みせず。蓋此の如きの幸福は所謂利己のものにして、我黨の冀望する王室の尊榮と人民の幸福とに反すればなり。王室の尊榮と人民の幸福は我黨の深く冀望する所なり。然れども一時暫且の尊榮幸福は、我黨これを欲せず。蓋此の如きの尊榮幸福は、所謂頃刻のものにして、我黨の冀望する無窮の尊極と永遠の幸福に反すればなり。是を以て若し一二私黨の我帝國を専らにし、王室の尊榮と人民の幸福を蔑にし、目前の苟安を偷み、遠永の禍害を顧みざるものあらば、我黨は之を目して以て公敵と爲さんとす。我黨は實に王室の無窮に保持すべき尊榮と人民の遠永に享有すべき幸福を冀ふの人を以て、此政黨を團結せんとす。來れ我兄弟來て我政黨を結び、以て其冀望を表明せよ。政治の改良前進は、我黨の冀望して止まざる所なり。蓋し政治にして其改良を加へ其前進を爲さざれば、徒らに無窮の尊榮を冀ひ、空しく遠永の幸福を望むも、終に之を餘ふするを得べからざればなり。政治の改良前進は、我黨之を冀ふ。然れども急激の變革は我黨の望む所にあらず。蓋し其順序を逐はずして遽に變革を爲さん事を謀るは、即ち社會の秩序を紊亂し、却て政治の進行を妨礙するものなればなり。是を以て夫の陋見に惑ひ、徒らに守舊を主とし、夫の急躁を競ひ、好んで激昂を務むるもの、如きは、我黨の卻て共に其冀望を與にせざるものなり。我黨は實に順正の手段に依て我政治を改良し、著實の方便を以て之を前進するあらんことを冀望す。依て約束第二章を定むる如左。

第一章 我黨は名けて立憲改進黨と稱す。

第二章 我黨は帝國の臣民にして、左の冀望を有するものを以て團結す。

一 王室の尊榮を保ち、人民の幸福を全ふする事。

二 内治の改良を主とし、國權の擴張に及ぼす事。

三 中央干渉の政略を省き、地方自治の基礎を建つる事。

四 社會進歩の度に隨ひ、選舉權を伸潤する事。

五 外國に對し勉めて政略上の交渉を薄くし、通商の關係を厚くする事。

六 貨幣の制は硬貨の主義を持する事。

此の日會衆百數十名。會衆の席に著くや、河野敏録氏起て衆に諮る「黨規に基きて我黨の總理を推戴せんと欲す。就ては直に吾人の尊敬する所の大隈重信君を推しては如何」と。滿場一致之に決す。是に於て大隈伯は起て承諾の旨を表して云へり。

今や吾人は諸君より一日の長あるを以て、其の推す所と爲り總理の重任を汗し、諸君の冀望に負かんことを恐る。惟ふに、一黨の領袖として、濟々たる多士を指導するは容易の業にあらず。然れども、政黨は天下の公事にして私事にあらず。故に吾人は公正無私、天下國家の爲に貢獻する精神を以て、其の主義を持し其の難局に當り、上は 聖天子の恩遇に報じ奉り下は社會の希望に應ぜんと欲す。而して吾人が政治改進を以て自ら任じ、諸君と共に政治上の運動を共にするは、吾人の快事とする所なり。否吾人は諸君と共に其の進路を同うするにあらざれば、上は聖恩に報じ、下は社會に盡すこと能はざることを自覺す。吾人不肖なりと雖も、微力を盡し、公正無私の心を以て、驅勉事に従はん。諸君よ、黨事に關して其の忠告と匡正あらんことを切望す。

尋て前島密の發議に由り、河野氏は黨衆に代りて、左の謝辭を大隈伯に呈せり。

大隈總理閣下に白す。閣下今黨衆の請を容れ我黨に總理たるを諾せらる。嘗に我黨の幸のみならず、誠に國家の大幸なり。願ふに

方今天下多事、所謂前虎後狼の時運に際し、斯政黨を總理する事素より易々ならず。唯た閣下の聰明必らず之を勞とせざるも、我々黨業に在りては深く其勞を謝せざるを得ず。唯だ我々は將來黨約を守り、閣下の節度に服し、同心協力我黨希望の實を表するに至りて聊か閣下の勞を省くあらんとす。茲に黨員に代り謹て答謝す。

終りて掌事三名を選擧せしに、小野梓、牟田口元學、春木義彰三氏當選す。

此の日議定したる改進黨の内提を掲ぐれば左の如し。

立憲改進黨内規

第一條 我黨は總理一名を置く。黨員多數の同意に取て之を推薦す。

第二條 我黨は掌事三人、書記二人を置き、黨中の庶務を司らしむ。

但し其掌事書記は總理之を選任す。

第三條 黨業に加はらんとするものは、黨員三名以上の紹介を要す。

但し掌事は其紹介を受け、之を黨業の名簿に登録し、月次會に於て之を黨業に報告すべし。

第四條 黨業を脱せんとするものは其旨を掌事に通知し、掌事は月次會に於て之を黨業に報告すべし。

第五條 我黨團結の希望に背き若くは我黨の面目を汚すべき行爲ある黨員は、月次會の決議を以て之を除名すべし。

第六條 黨業に加はるものは、東京に在ては一ヶ月金五十錢を納れ、我黨維持の元資に供すべし。

但し其年六月卅日を限り之を掌事に交付すべし。

第七條 毎月十五日午後三時より東京事務所に於て黨業の會合を開き、其交誼を厚くすべし。

但し來會の黨員は金五十錢を納れ其會費に充つべし。

第八條 本規を改正せんとするときは、月次會に於て之を議定すべし。

大隈伯は、更に其の懷抱せる平生の政見を小野に語り、改進黨が皇室の尊榮を悠久に増進し、國民の福祉を將來に確保すべき善政主義を實現せんことを期する旨趣を告げしが、小野氏は其の要旨を起草し、「改進黨人に告ぐ」と題する一篇を印刷して之を黨員に頒てり、更に其の要旨を摘みて掲ぐれば左の如し。

維新中興の偉業は一二民族が政權を專有するのを排却し去ることを目的としたのであるから、政府はその當初の素志を何處までも貫いて、上は皇室の尊榮を計り、下は萬民の幸福を修むるこそ誠にその本分であるまいか。否四海一途庶民をして倦まざらしむべきは明治政府の宜しく勉むべき所ではないか。たゞ、内閣諸公は果してよくさうした徳を具へて居るであらうか。よく其の義務をつくしたらうか。天下具眼の人々は必ずその實相を知つてゐやう。唯私は一二民族が吾が帝國の政權を專有するのを排撃せんがため、中興の偉業を翼賛し奉ることに力めた一人として、今後と雖も依然その主義を持して變ずることがないであらう。否益々その志望を固うして、維新中興の偉業を大成し、帝國萬世の基礎を建て、そして皇室の尊榮を無窮に保ち、人民の幸福を永遠に全うせんことを冀望する次第である。

ところが世上間々自ら稱して尊王主義の黨派だと唱へ、その善徳あり氣に修飾するものがある。然しその多くは一二民族を以て、皇室の藩屏にあて、或は兵力を以て皇室を守らんと欲するものに過ぎない。甚だしきは、君主を表面に露出して、直に行政の衝に當

らせ給はんことを冀ひ、皇室を推して危険の地に立たせ給はむことを欲するものがある。

そんなことで果して皇室の尊榮を謀ることが出来やうか。否斯る事を以てしては、皇室の尊榮を謀ることが出来ない。たとへそれが出来ても、これ一時の浮榮である。私はそんな浮華暫且の尊榮を満足することが出来ない。

勿論、皇室が尊榮を保持し給ふには自らその道がある。萬衆が幸福を享有するにはその則がある。苟くもその道とその則とを得なければ之を冀ひ、之を望むとも到底之を得るわけにゆかぬ。諸君、わが黨は政治を改良前進して、その無窮の尊榮を保ち、その永遠の幸福を全うしたいと冀はないものがあるなら、私はそれらの人々とその進路を共にすることを欲しない。今や海内の鎖鑰は開放して閉ぢず、海外改進黨の風潮は自在にわが國に流入して而もその勢が甚だ盛んである。宇内の輿論が全く改進黨に傾いた今日、大膽にも之に逆行しやうとするは笑殺すべきである。況や事物の道理よりすれば、改良前進は天地萬衆の常則である。誠に各種の事物を取つて之を吟味せられよ。其何等の事何種の物たるを問はず皆疎より精に改り、雜より殘に進まぬものはない。日々に改良、月々に前進してやまぬではないか。然るに今傲然として之に抵抗し天地の大勢に背かうとするのは誤である。

私は明治の初年から政治の改進黨を以て自ら任じ、維新政府の大政に參與して、微力の及ばん限、その改良前進に力を致した。唯政府の組織に依つて、私の懐く冀望を十分に満すことが出来なかつたので、隨つて間々諸君の意思をさへ満足せしめ得なかつたことは、私が最大の遺憾とする所である。けれどもわが帝國の風潮は漸く改進黨の事理を冀ふ勢となり、剩へ諸君の輔翼を辱うするに至つたので、私は早晚社會の信用を得てその遺徳を慰むる愉快があらうと信ずる。政治の改良前進はわが黨一致の冀望で、私が平生の所志である。けれども之を實現するには、必ず順正の手段と著實の方便とに由るべきである。私は天下の道理を實行するに當つて二つの道

があるやうに思ふ。その一は直行して道理の極所を查出して、その手段と方便とを求め、進歩して之に達することである。願ふに政治を改良し前進するにも必ず以上の二途に由らねばならぬ。けれども道理の極所を查出するに及んで、直行之に至らむことを冀ふのは、チャンチャツク、ルウソオの餘流で、その極は社會の秩序を紊亂し、政治の改進黨を妨碍するに終るであらう。それは我が黨の冀ふ所でない。故にわが黨はかの政治を改良前進するに當つて、順正の手段と著實の方便とを求め、追歩して、その目的を達するに至らんことを冀ふのである。唯わが黨は手段と方便とを求め、我政治を改良前進せんと冀ふ。故にルウソオの餘流を汲み、「ジャユピン」者流の二の舞を演じ、躁急激昂以て過激の變革をしようと思ふものがあるなら、私は之を卻けて、その進路を與にすることを欲しない。私は爾く急激の變革を排するが我黨はその守舊の内實を掩ふのに漸進の外貌を以てする黨派と區別することが肝要である。唯わが黨は政治の改進黨を尙ぶの政黨である。順正の手段と著實の方便とを求め、做し得るだけ、完全に政治を改良し、前進せしめたい。それで爲すべき機會に逢つて爲さず、名を漸進に假つて、故らに遅々として私利を暗射するが如き黨派とは類を異にする。

三 改進黨の生成に努力せられし人々

自由黨は、國會期成同盟會を中心とし、其の勢力と爲りし要素は、地方の有志家より成りしと雖も、改進黨は之に反して、中央に於ける知識階級を中心とし、漸次各地方に及ぼし、全國に於ける資産あり、聲望ある中産階級の人物を網羅したり。

改進黨の中樞幹部は四大要素より成立せり。其の一は河野敏録氏を中心とする前島、北島、牟田口氏等の一派。其の二は矢野文雄氏を中心とする藤田茂吉、大養毅、尾崎行雄、箕浦勝人氏等、即ち東洋議政會の一團。其の三は小野梓氏を中心とする高田早苗、岡山兼

吉、山田一郎、天野爲之、市島謙吉、山田喜之助氏等の大學派。即ち鷗渡會の團。其の四は沼間守一氏を中心とする島田三郎、大岡育造、肥塚龍、角田眞平、青木匡、波多野傳三郎、小川、丸山政各氏等即ち嚶鳴社の一團是れなり。

小野梓氏は東洋と號す。土佐の人。維新の初め、東京に出て昌平學に學び、明治五年米國に遊學せしが、尋で大藏省の官費留學生と爲り、英京倫敦に至り、政治、經濟、法律の學を修め、歐洲大陸を巡遊して七年、歸朝し、九年司法少丞に任じ、翌年太政官少書記官、元老院書記官を経、十三年會計検査院を置くに及びて、一等検査官と爲る。十四年の交、彼は太政官の趨く所を察し、政弊革新の議を建て、參議大隈重信に献ぜり。

小野氏は二篇の建策を大隈伯に呈して云へり「今や内閣の組織を一變し、施政の方針を定めんと欲せば、憲政建設の基礎を樹立せざる可からず」と。政黨組織の考案油然として彼の腦裡より興る。(此の歲十四年)六月十日、同志と共に時事問題に及び、政黨組織の己むなきを論じ「今の時に當り政黨を組織せんと欲せば、先づ政治上の主義方針を確定せざる可からず」と。乃ち同志小野爲治郎、高田早苗、岡山兼吉、市島謙吉、天野爲之、砂川雄峻、山田喜之助、山田一郎氏等と相會し、政理の研究に従事し、政黨組織の議に及び、時に小野氏の邸は墨水の畔に在り。困て其の會を名けて「鷗渡會」と稱す。

改進黨の興るや、小野氏は其の一團を率ひて之に参加し、其の幹部の一人と爲れり。

矢野文雄氏は慶應義塾出身の俊才にして、大隈の知る所と爲り、其の推薦に由りて、統計院幹事兼太政官大書記官と爲る。十四年、大隈伯の政府を去るや、其の職を辭して野に下り、同志と共に東洋議政會を組織し、「郵便報知新聞」を機關とし、言論、演説に由りて國會開設憲法制度の急を宣傳せり。當時藤田茂吉氏は報知新聞の主筆として、才名を馳せ、犬養毅、尾崎行雄、箕浦勝人、加藤政之助、

吉川喜六、森田思軒、小栗貞雄の各氏等亦皆其の筆を執り、顧問としては幕府の遺老栗本鋤雲氏あり。改進黨の興るや、矢野氏は此等の政客を率ひて之に参加し、小野氏と共に參謀の位置を占め、改進黨の勢力を扶植するに勉めたるは、矢野氏の力を多しとせざる可からず。

沼間守一氏は、幕府の殘黨にして、維新の初め、司法省出仕に任じ、明治五年、河野敏録氏に隨て歐洲を視察し、歸朝の後、明治八年、尾猿澤銅山の獄を斷じ、其の聲名益々顯はる。尋て河野氏の推薦に由りて元老院權大書記官と爲り、十二年職を辭して野に下り、専ら詞訟代言の業務に従事せしが、選ばれて東京府會議員と爲り議長に當選す。實に明治十三年一月なり。是より先に、氏は、益田克徳、須藤時一郎、大島貞敏、小加美稻等の各氏と法律講義會を設け一は法律の研究に、一は言論の練習に勉めしが、後其の組織を一變して、政治研究の機關と爲し、名けて「嚶鳴社」と稱し、毎月日曜日を期して、柳橋萬八樓に會す。尋で横濱毎日新聞を買収し、之を東京に移し、「東京横濱毎日新聞」と稱し、言論に演説に、民權論の本鐸として國會開設の急を唱道せり。初め自由黨の興るや、其の創立に参加せしが馬場辰猪氏と相合はず、去りて改進黨の組織に努力し、島田三郎、大岡育造、肥塚龍、角田眞平、高梨哲四郎、吉田次郎の各氏等と共に之に参加し、一方の勢力として重きを爲したり。

初め大隈伯、河野氏の改進黨を組織するや、福澤諭吉氏に對して、其の入黨を懇懇せしが、福澤は獨立不羈を標榜して之に應せず、其の門下にして、改進黨に入りしものは、牛場卓造氏等數名に過ぎざりき。

四 改進黨の政綱發表

改進黨の組織せらるゝや、矢野、沼間、小野の各氏等の領袖背謀り、改進黨の主義綱領を發表せんが爲に、此の歲五月十三、十四の

兩日に亘りて、大演説會を明治會堂に開催され、其の演説竝に人名を掲ぐれば左の如し。

十三日

内治の改良を主として、國權の擴張に及ぼすべし。

外國に對し、勉めて政略上の交渉を薄くし、通商の關係を厚くすべし。

社會進歩の度に隨ひ、選舉權を伸潤すべし。

政治學一斑

郡區長公選論

政治家の德義を論ず

十四日

王室の尊榮を保ち人民の幸福を全うすべし。

中央干渉の政略を省き地方自治の基礎を健つべし。

貨幣の制は硬貨の主義を持すべし。

政府政黨に對する道を論ず。

讀米國憲法權利法典之條。

民權張らずんば國權伸ひず。

藤田 茂吉

大 養 毅

沼 間 守 一

鳩 山 和 夫

矢 野 貞 雄

青 木 匡

島 田 三 郎

肥 塚 龍

小 野 梓

井 上 寛 一

高 梨 哲 四 郎

尾 崎 行 雄

政治家は實務に通ぜざる可からず。

益 田 克 徳

改進黨の組織せらるゝや、當時掌事として、内に在りて専ら黨務處理の衝に當りたるものは小野梓氏にして、外に在りて副將として演説に、言論に、黨勢擴張に努力したるものは、矢野、沼間の兩氏等を以て其の重なるものとす。佐々木高行氏の手記中に、「此節沼間等の遊上は、甚しきものにして、夢中に爲りて、政黨の事を計畫し、之が爲に通宵睡らざることとは有之哉の趣に候」とあるに據るも、其の一斑を窺ふを知るに足れり。

小野氏は大隈伯の旨を衝み、改進黨の政綱として「施設の要義」を起草し、之を天下に發表せり。其の要旨を摘みて之を掲ぐれば左の如し。

一 國會開設の期は 聖天子既に垂勅せられ、其の組織の如きも亦時に及びて至正の憲章を立てさせ給ふことを知る故に、我黨は今國會の組織に就て黨議の所在を説かず。一に 聖天子の明勅を奉ず。然れども立憲政體の實益は政黨を以て内閣を組織し、國會に於ける信用如何に由りて進退し、輿望に副はせ給ふにある故に、我黨は八年の後ち、國會を開かせ給ふに當り、必ず政黨爲政の良制を定め、帝國の安寧を圖らせ給はんことを望む。

二 帝室の威望は相家武門の跋扈に由りて、其の陵夷を極め、維新の中興に及びて 稍々之を復させ給へりと雖も、積弊の在る所、未だ我黨を満足せしむるに足らず。爲に帝國臣民の至情を満足せしむるに足らざる點多し。是に於て我黨は大に皇有の財産を聚め、帝室の威望を維かせ給ふ上に、十全ならんことを期す。

三 紙幣の制は維新の創業を助け、其の利少ならずと雖、到底之を久しきに行ふべからざるは、理財の要に於て、争ふべからざる

所なり。世は間々商業不振を嘆じ、或は直輸出を謀り、我は勸業勸商など云ふも、是れ枝葉の見なり。商工の衰頹するは物價の安著せざるに根し、物價の安著せざるは、紙幣制の結果なり。故に、我黨は斷然紙幣制を廢止して金貨制を實行せんことを期す。

四 地租の他税に比して輕からざることは、政府の歳入、十分の九迄、地租に在るを以て知るべし。而して世々は近事農家の俄に豊富なるを見て、動もすれば之を増加せんと欲するものあり。然れども、是れ帝國に取りて不利なり。我黨の所見に據れば、農家の規模狭小にして、土地の改良、荒野の開墾せざるは職として地租の輕からざるが爲めなり。故に我黨は明治十八年地租改正の期に及びて之を増さず、漸く減殺して百分の一と爲すに至らんことを冀望す。

五 外交の事は、國權に係る所なるを以て、之を苟且に付すべからざるは、世論の如し。然るに、今の外交を説くもの、往々外人の歡心を得て、我が目的を達せんとするは、唯た是れ意味なき詭譎を爲すものなり。彼れ必ず我を侮辱するに終るべし。故に我黨は帝國の威嚴を保ち、締約諸國に就て、其の最も親しむべきものを探ひ、我が冀望を實行するの途を爲さんことを期す。

六 陸軍に就ては、我が國の地界狭小なるを以て、兵營を各所に分略するの要なし。之を某々の地域に總合して、經費の節約を圖り、之を兵器砲臺の新設費に用ふべし。徴兵の制は、國民の大事なりと雖も、之れが爲に、立身の好機を失するの憂あり。故に小學教育に操銃の一科を加へ、歩操に熟せしめて兵役服務期を短縮せんことを冀望す。

七 海軍に就ては、其の擴張は帝國の位置、及び通商の關係上、最も望む所なりと雖も、平時は兵艦の一部を除くの外、封圍して、之を浮水せず其の士官水夫なども皆之を解除して、民間航海の業に就かしめ、其の費用を移して兵艦、武器の充實を圖らんことを冀望す。又た海軍擴張の爲に、海軍の壯丁を海軍に徵集するを要す。

八 教育に就ては、我が國學問の獨立を見ざるは、畢竟教育の基礎確立せざるが爲めなり。我黨は文部に全力を盡して、帝國大學の充實を圖り、學士をして名譽と實益とを併有することを得せしめ、終身を學問の研究に委し、日本學界の興起を實現せしめんとを冀望す。

其の他、道路、港灣、河川の改良、政治と宗教との分離、司法裁判の革正等に及べり。亦以て其の政綱の具體的に、實際的に涉りて、空理空論に馳せざるを見るに足る。是れ實に當時小野氏が政治家として一頭地を抽んでたる誠見を成する所以にして、自由黨や帝政黨の論客と其の撰を異にする所以なり。

五 政府の壓迫と兩政黨

明治十一年、府縣會開設以來、反對黨と政府との軋轢は、各府縣に波及し、地方官と府縣會との衝突、到る處に生じ、府縣會に於て、或は豫算の全部を否決するものあり。或は府知事、縣令の不信任を議決するものあり。或は兩者其の見解を異にしたるが爲に、參事院の裁定を乞ふものあり。政府は、此等の現象を以て偏に自由改進黨の煽動的態度に出づるものと看做し、之を彈壓するを以て足れりとせず、當局者の中には、府縣會を中止せんとするものあり。右大臣岩倉具視公の如き、即ち其の一人なりき。

政府は、十四年政變以來憲政の準備に著手したる、政府部内には漸進、保守思想の二大潮流ありて互に相衝突したり。其の一は、木戸系を代表し、漸進主義を主張したる伊藤派にして、其の一は大久保系を代表し、保守主義を主張したる岩倉派（即ち薩派之に屬す）是なり。明治八年、立憲政體設立の詔勅を奏請するや、岩倉公は、之に反對し、是れ下民上を罔するの路を開き、大權下に移るの漸を

爲し、實に太祖以降二千五百三十餘年、確然不易の國體をして、一變、復、回すべからしむるの原因たるの處あり」と。極力其の不可を論じしも、木戸派の意見行はれて、國會準備の詔勅を見るに至りたり。十一年、府縣會規則を頒布せんとするや、岩倉公又た不可を争ひ、「此法、亦た、大權下移の路を開くものにして、施設甚だ其の順序を失へり」と。其の不可を争ひしも、結局木戸派の捷利に歸し、岩倉の議は、行はれざりき。

岩倉公は必ずしも、絶對的に憲政主義に反對したるものにあらず、民權の爲に君權を侵され、皇室の尊嚴或は之れが爲に毀損せらるることなき乎を憂ひたるものゝ如し。故に彼は深く皇室の前途に鑑みる所あり、明治十一年三月、帝室制度調査の爲に一局を宮中に設置し、皇室の尊嚴を永遠に保持せんことを期するの議を提出したり。其の建議に

儀制調査局を置かんことを請ふの議

謹て案するに、神武天皇太祖の遺訓を遵守して帝祚を踐み、皇子孫相承く。茲に二千五百有餘年の久きを経たり。中世皇綱紐を解き、大柄武門に歸し、已むを得ざるの政體を見ること凡そ六百年なり。天運循環し再び神武天皇肇基の古に復するを得たり。豈に干載一遇の盛時に非ずや。今上登壇の初、首として神明に誓盟し萬機公論に決すべきことを以てす。其八年に至り元老大審の二院を置き、立法の源を擴め審判の權を牽くす。又地方官を召集し、民情を通し公益を圖り、漸次立憲の政體を建てんとす。此勅命や臣民をして公然と國政を論議せしむるの權利を與ふるものにして、固有の國體に多少の變更を來たさしめんとするものなり。又九年に至り勅命を元老院に下し、前きに左院に於て起草する所の憲法を再議修正せしむ。此數件は皆君民の權利に關繫せるものなり。今や勅命は立憲の政體を建つるは漸次を以て主と爲すと雖も、億兆の中或は躁進を望むものあるを免れず。夫れ人心は常なく、時勢の趨向測

る可からざるは古今の通理なり。此際に於ては當路の者深く謀り遠く慮り以て帝室の基礎を固めざる可からず。然りと雖も物に本末あり。事に終始あり。我が建國の體は素より他邦の比に非ず。宜く既往の得失を審にし、將來の利弊を察し、以て帝室の典憲を定むべし。因て臨時一局を設けて委員を置き、國典を蒐集して祖宗の遺法を考證し、之に參するに外國の良制を以てし、上は帝位繼承の順序より下は皇族の歳俸に至るまで、之を調査起草し、以て宸裁を仰がんとす。此の如く帝室の典憲定るときは、帝室の尊嚴を永遠に保持することを得べし。君上の權利已に鞏固なるときは、臣民の權利其度を越越すること能はず。上下相頼て以て國家安寧なり。是れ具視が儀制調査局を設置せんことを欲する所以なり。謹て議す。

明治十一年三月

右大臣 岩 倉 具 視

附 議

儀制調査局を開設せらるゝときは左の職員を置かんことを要す。

- 一 總 裁
- 一 審 議 官
- 一 調 査 官
- 一 幹 事
- 一 書 記

總裁以下を置き調査を命ずべき條目の概要は左の如し。

- 一 帝位繼承順序の事。
- 一 三種神器授受の事。
- 一 女帝踐祚すべきや、否の事。
- 一 太上天皇は上古の制に適せず。廢止すべき哉の事。
- 一 天皇踐祚及即位區別の事。
- 一 天皇成年の事。
- 一 幼帝輔弼の事。
- 一 攝政は皇族に限るや否の事。
- 一 攝政の權利に關する事。
- 一 三后冊立に關する事。
- 一 皇后を出す門地に關する事。
- 一 皇太子冊立に關する事。
- 一 嫡庶皇子皇女に關する事。
- 一 皇族品位宣下に關する事。
- 一 皇族任官に關する事。

- 一 皇族教育に關する事。
- 一 皇族成年の事。
- 一 皇族等親に關する事。
- 一 皇族歳俸の事。
- 一 皇族懲戒に關する事。
- 一 皇族犯罪裁判に關する事。
- 一 皇室の冠婚葬祭に關する事。(但皇族之を包含す)
- 一 皇室假服の制度に關する事。但同斷
- 一 皇室の財産に關する事。但同斷
- 一 皇室の譜牒に關する事。但同斷
- 一 陵墓に關する事。
- 一 女官に關する事。

此外に調査すべき要件多々なりと雖、儀制調査局を置かれたる上猶其條目を列記し同局へ提出せんと欲す。今姑く之を略す。

蓋し明治十四年國會開設に關する詔勅の奏請は、伊藤公の首として提唱したる所にして、各大臣各參議の舉て之に賛成したる所。而して岩倉公は固より有力なる參畫者の一人なり。故に氏は、憲法制定問題に就ては、彼の責任として、爾來之れが調査研究を懈らず、

伊藤公の歐洲に派遣せらるゝや、特に其の副具定をして、之に隨行し、西園寺公望公、廣橋賢光氏と共に歐洲各國に於ける宮廷の制度並に皇室の特權等に關する事項を調査せしめ、更に旨を駐露全權公使柳原前光卿に傳へ、之と協力して之れが調査に努力せんことを命じたり。是に於て、柳原卿は露、澳、獨の間に往來して、伊藤、西園寺兩公等と相謀り、特に露、澳、獨三帝國の王室に關する制度、及び儀禮等を調査し、併せて平生の懷抱を據べて屢ば之を岩倉公に報告したりき。

柳原伯の意見は、岩倉公の心を啓發するに與りて力ありしに相違なかりしが、當時政府反對派たる自由改進黨は交も起て政府を攻撃し、就中自由黨は、板垣總理洋行以來、其の統制を失し、急進主義者は憲法國約國會連開の議を主張し、動もすれば直接運動に出でんとし、官民の衝突益々甚しきを加へたり。此に至り、岩倉公は此の情勢を目撃し、窃に思ふ、「人民をして犯上の道を啓き、政府を蔑視するの思想を生ぜしめたるは、職として府縣會を開くの機猶早くして、進歩の順序を失へるに由らざるはなし。故に今日にして政府の威權を恢復し、頹瀾を挽回せんと欲せば、國家の重きを爲す所の海陸軍、及び、警視の勢威を左右に提げ、凜然として下に臨み、民心をして戰慄する所あらしめざる可からず」と。是に於て、府縣會中止の意見書を草し、之を太政大臣三條實美公に上りたり。實に明治十五年十二月なり。其の意見書は、事終に行はれざりしが、其關係の極めて重且つ大なるものあるを以て、其の全文を左に掲げ、以後世政治家の殷鑑に供すべし。

明治七八年以來民心日に躁進に赴き、上下漸く乖離の狀を呈し、政府の權威亦稍々衰ふる所あるが如し。是れ一は創業の既に成るを以て、上下少く恬熙苟安の情狀あり、一は民心の未だ定らざるに乘じ非常の速力を以て西洋自由權利の説を輸入し、之を鼓舞煽動せしに因れり。

夫れ創業固より難く、守成亦易からず。明治維新の業は西南暴動鎮定の日を以て其局を終るが如しと雖も、方今に於て政體の根柢猶未だ確定せざるを以て、創業守成二ながら其難を兼ね、之に加ふるに外國對峙の難を以てす。是實に精細の注意を要すべきの時機なりとす。建武の中興に當てや後醍醐帝の聰明睿智にして之を輔張するに精忠勇武の臣を以てす。於是創業の速成殆んど掌を反すが如し。然り而して守成の日に及て、僅に恬熙苟安の色あるや、忽にして後門狼を進み、終に再び大權を失墜し、爾後南風不競、禍亂相踵き、復た之を如何ともす可からざるに至る。方今の氣運之を建武の中興に比すれば大に徑庭ありと雖も、時運正に三難事に當るを以て、施政一たび其道を失はば、災害禍亂、其何の處に底止するや知る可らざるなり。今日の形勢を察するに、憂愁無聊の徒始めは其不平の氣を洩して快を一時に取らんと欲し、口辯鋭筆を利器として、百方無智の人民を煽動せり。次で其勢漸く増長し、其力稍々猖獗なるに至てや、猛然として我取て以て代るの念を生じ、只管官府に抗敵し、施政の障礙を爲さんことを是れ務め、終に復た收束し易からざるの形勢に馴致せり。是を以て其演説場に説く所、新聞紙に論ずる所、専ら罔上犯分を事とし、樹黨營私に至らざる所なし。思ふに佛蘭西革命の前時と雖も恐くは此形勢を距る甚だ遠からざるべし。

凡そ物先づ腐敗して蟲蛆之に生ず。天下今日の形勢豈に其因無くして遽かに茲に至るものならんや。請ふ其大略を論叙せん。回顧すれば、明治六年遣朝鮮使の議一たび起るや、内外擾々物議洶々たり。具視乃ち内閣の同志者と共に建議して其不可を論ず。事僅に寝むと雖、廷議猶未だ妥穩に歸せず。參議官を罷むる者五人に及ぶ。於是紛議百出、始て朋黨の兆あり。既にして一動して佐賀の騒擾となり、再轉して臺灣問罪の事に至る。八年十一月に及て二三の參議大阪に密會し、同三月板垣退助復び參議に任ず。四月十四日遂に漸次立憲政體設立の詔あり。抑此事たるや下民上を罔するの路を開き、大權下に移るの漸を爲し、實に太祖以降二千五百三十餘

年確然不易の國體をして一變復回す可らざらしむるの原因たるの虞あり、具視時機尙早きを察し、極めて其不可を論ずるも用られず、以爲らく天下の大事去矣。と因て辭表を太政大臣に捧げ疾を引て家居す。蓋し具視眇乎の軀を以て之を大臣の重職に承り、先帝の寄托今上の知遇感荷海嶽の如し。今や創業守成の際に在て、事の不可爲を見る、輔相の任既に堪えず鹽梅の術亦盡きたり。自ら思ふ何の顔あつて地下に先帝に見んやと。日夜天を仰て長嘆息し、之に繼ぐに痛哭流涕を以てす。同十月に至て、忽ち朝鮮江華灣の變あり飛簪の達するや、議論鼎沸人心搖動す。同三日優詔ありて曰く「卿本年四月以來病を養ひ家居すと雖、今や外國交渉の事あり、安危不測の秋なり、方に動て職に就き以て廟謨に參贊し規畫する所あれ」と。具視感激恐惶の至に堪へず。且つ謂ふ内事未だ安からず今にして外患を生ぜば、實に國家の存亡に關すと。乃ち病を勉めて起て廷議に贊す。既にして朝鮮の事平穩に歸するを以て復び退隱の志あり。然ども内に省れば、陛下の恩命海嶽普ならず、且往事は既に及ぶ可らず。八年の詔勅復た之を如何とも爲すべきなし。因て以爲らく「正に勉て前緒を繼ぎ聖徳を拾遺し、庶くは以て大權を未だ失墜せざるに濟ふべん」と。此時に當て、維新の功臣多く其末節を令せず。臣蘭忽ち輩裔に變する者あり。具視憂憤の情に堪へず。於是發奮して政務に従事す。次で十年に至て西郷暴動の事あり。次年公權自治の目的を以て府縣會の法を定む。内閣中二三の人其甚だ不可なるを論ずるあり。具視亦所見を同ふす。以爲らく「此法亦大權下移の路を開く者にして、施政甚だ順序を失へり」と。因て其不可を陳すれども行はれず。乃ち嘆して曰く「天下はより多事ならん」と爾來内閣諸官、及、具視等、政務に従事す。拮据經營敢て怠荒することなしと雖、大基既に堅からざるを以て、小規亦定まること能はず。甲事將に成んとすれば乙事既に壞る。役を補ひ此を支ふ日給するに遑あらず。役々として休からず。遂に昨明治十四年夏秋の際に至て開拓使の事あり。此事や僅に行政事務の一小部分に過ぎざると雖、明治七八年以來、上威軟弱、下民の論説を以

て人心を煽動するや、上下惑亂し、官民鼎沸す。平常忠實の官吏と雖、其向背を定めず、誠偽黑白を判す可からざるに至れり。夫れ此の不逞の徒、空拳赤手徒に口舌を鼓し、筆管を弄す。固より三軍の衆あるに非るなり。又劍銃の利器あるに非るなり。然而して政府の岌々として危く、業々として安からざること、驚愕に堪へざるものあり、嗚呼大權下移の漸此に至て其機を察すべきなり。

蓋し今日政府の頼て以て威權の重を爲すものは海陸軍を一手に掌握し、人民をして寸兵尺鐵を有せしめざるに依れり。然れども、若し今日の如くにして人心を收束することなく、權柄益下に移り道德倫理滔々として日に下らば、兵卒軍士と雖、焉ぞ心を離し戈を倒まにせざるを保せんや。氣運一旦にして此に至らば、其の一夫夜呼て關中守を失ふの覆轍を履まさらんと欲するも、豈得べけんや。按するに形勢の漸次今日に至る、其原因の多き、實に前條に略論する所の如しと雖、人民をして犯上の道を啓き政府を蔑視するの思想を生ぜしめたるは職として府縣會を開くの機尙早くして、進歩の順序の失へるに由らざるは無し。故に今日にして政府の威權を恢復し、民心の頹瀾を挽回せんと欲せば、先づ今明兩年の景況を察し、機宜に由り、斷乎として一たび府縣會を中止し、上も陛下より下も百官屬僚に至るまで、主義を一にして動かす目的を同ふして變ぜず、更に萬機を一新するの精神を奮勵し、陛下の愛信して股肱とし、且つ以て國家の重を爲す所の海陸軍、及び、警視の勢威を左右に提げ、凜然として下に臨み民心をして戰慄する所あらしむべし。凡そ非常の際は一豪傑振起し、所謂武斷專制を以て治術を施す、古今其例少からず。故に此時に當て、半期一歲の間或は嗷々不平の徒あるも亦何そ願慮するに足らんや。

具視嘗て使命を奉じて佛蘭西に駐在するや、暇あれば則ち碩學某氏に就て政學を問ふ。一日某氏爲政の要領を論じて曰く「天下萬國、開鎖治亂の理一以て之を貫くべし。之を近きに譬んば猶蛤殼の如し。其開化に向ふや上殼僅に開き漸にして、愈開き、終に兩

殺全く開き平かにして天に朝す。然れとも始めて其口を開くに當てや、兩殺未だ開口に慣れざるを以て、或は開き、或は閉ぢ、轉旋自ら滑かに關紐漸く頑なきに至て、乃ち大に之を開き、上下茲に其體を安すべし。而て其一開一圖の際自ら緩急弛張の妙あり。恩威寬猛の術あり。此間若干の光陰を費すべく、幾多の注意を要すべし。若し然らずして誤て其平開を速かにし、其習慣を計らず、上殺急に開て其下を激動せば、下殺自ら靜止すること能はず、一轉して前の上殺を下にして下殺を上にし、是より上下顛倒して其體決して安からざるべし。世界萬國の中、英の如きは數年の光陰を費し幾多の注意を以て漸くにして平開す。魯は則ち僅かに開き、獨は則ち半ばを開く、佛に至ては其急開の弊上下顛倒し秩序紊亂す。屢々革命の變ありて未だ其體を安んずること能はず。今や日本久しく圖鎖の國にして、其開殺の急速に失する殆んど佛國に過るが如し。今にして之を猛省せずんば、數年を出ずして、上下顛倒、秩序紊亂の覆轍を蹈むべし。君其れ急に還て大に注意する所あれよ。具視此言に於て大に發明する所あり。夫れ明治の初年に於て既に急開の弊あり。況んや今日の形勢をや。故に曰く府縣會を開くの機猶早くして開進の順序を失へりと。故に今明兩年の景況に由り、斷乎として之を中止すべし。但夫れ此事たるや威權失墜の弊を濟ふか爲にして、決して壓抑暴戾の政を爲さんと欲するに非ず。蓋し國の富強は斯民の殷富に因る。民の富を養はんには亦之に應分の權を與へ以て自ら務むる所を知らしめざる可からず。其要蓋し國民文化の度を察し、施政の度を誤らざるに在るのみ。故に府縣會を中止するや、同時に國民諮問會を開て民政緩急の機を中和し、次て寬猛相濟の政を以て國運を一開一圖の間に達すべしとす。

但、夫れ政府の威權國家の軍備共に今日の如くなるに於ては、一朝内憂外患並に起るに當ては、亦是を如何ともすること無きのみ。是れ具視今日朝鮮の變警大に人心に影響あるを機とし、別紙意見書（陸海軍擴張張士族投産大赦の三事を論ずるもの）の如く軍備擴張の急務たるを建議する所以なり。然共事件増税に關し民心に順ならざるものあるを以て、更に人心を收斂して政府に服せしむるを要す。是れ士族投産及大赦等の事を併せて建議せる所以なり。古人曰「非兵不强、非德不昌」と旨ある哉言や。

併て既に兵備整ふて内外の憂虞なく、又一方には窮困不平の士族を馴撫し、兼て豪農巨商等以上有爲の力ある者を收攬せば天下の民頑冥不靈の徒に非るよりは、誰か政府の恩威に服従せざる者あらんや。乃ち此際を期として大に政體の根軸を定めば、守成の業亦甚だ難しと爲さざるなり。惟夫の府縣會中止の事は其名或は不可なるものありと雖も、大漏を止むる、固より姑息の小補を以てすること能はず。實に萬已むを得ざるの政略なるを以て、其名の不可なると事の難きとに於ては、具視請ふ自ら誓て之に當らん。猶其委曲の旨意に至ては更に之を口陳せんとす。

以上論疏する所は、實に具視熱心の意見にして、別紙意見書（勸業院を置く事を論ずるもの）の大意なりとす。然るに別紙意見書中之を論及せざるは、其事後來の政略に涉り、且格別の秘密を要するが故なり。因て茲に之を別書し、以て他日の参考に供せんとす。

十二月

具 視

前文府縣會中止の議は、事實想外の政策に出るを以て、議者は云はん。具視積年府縣會を忌むの念未だ全く消せずと。或は云はん國會開設の大詔勅として日月の如し。今や國歩を進むる必ず其正鵠を失ふ可らず。然るに其府縣會を中止せんと欲するものは針路を誤るに非るを得んと。是決して然らず。抑府縣會の設其順序を失ふ者あるも、政府既に之を決行す。具視不敏なりと雖も豈に一個の私見を挾て之を今日に忌嫌する者ならんや。然り而して今日此議を發する所以のもの萬已むを得ざるの勢にして、固より事を好むに非ず。又之を行ふことを必するに非ず。偏に施政の方針を密雲不雨に定め、深く今後の景況を察し、機宜に臨て政令を疾雷耳を掩ふ

の遠なきに發し、一張一弛、運用の妙を盡さんと欲するのみ。決して大詔の正鵠を失ふに非らず。亦國歩の針路を誤るに非るを信ず。若し幸にして今後の景況此議を實施するの域に至らしめざる者あらば、國家の福祉具視の大に祈望する所なり。議者或は本意を誤認せんことを恐る。因て之を付記して以て此意を瞭らかにす。

十二月

具 視

若し夫れ當時岩倉の建議にして行はれ府縣會の中止を見るが如きことあらば、我が日本は明治十六七年の交に於て、恐らく革命流血の變を生ぜしも測り知るを得ざりしなり。其の建議の行はれざりしは、實に我が帝國の幸福なりと謂ふべし。

府縣會中止の議は行はれざりしが政府の政黨抑壓政策は、益々其の歩を進め、明治十五年十二月十二日第五十九號布告を以て、請願規則を頒布したり。

六 議會召集と政界の展望

第一議會開會前に於ける政黨の重なるものは立憲自由黨、立憲改進黨、國民自由黨にして、非政社團體に大成會あり。無所屬團體あり。小黨分立、群雄割據の形を成し、一黨を以て議會の死命を制するに足るものあらざりき。

朝野兩黨の分野を數字的に區別すれば、左の如し。

政府反對派（所謂民黨と稱するもの）

立憲自由黨（彌生俱樂部）

百三十名

立憲改進黨（議員俱樂部）

四十一名

準政府派

大成會

七十九名

國民自由黨

五名

中立派

無所屬

四十五名

自由、改進黨を合すれば、其の所屬議員の數は百七十一名の多きに達す。是れ實に藩閥政府に對し、自主主義を主張する民黨の勢力なりとす。

自由、改進黨の外に超立し、表面、不偏不黨を標榜する非政社團體は、大成會にして、其の數、七十九名。舊大同團結より分れて、國家主義を標榜する國民自由黨所屬議員の數は五名。其の他無所屬團體にして中立を標榜するもの四十五名。三派を合するも、其の數、百二十四名に出でず。此所屬議員の中にも、勿論純乎たる中立主義を把持するものなきに非ざるも、其の行動、往々官僚派と一致し、藩閥者流と結托する者尠なからざりき。是れ實に自主主義に抗して現在の秩序を維持し、政府を掩護せんとする準與黨の勢力なりとす。

立憲自由黨は、板垣退助伯を首領とせる愛國公黨。大井憲太郎氏を主腦とせる自由黨。（舊大同協和會）隠然後藤象二郎氏を本尊とし、河野廣中氏を領袖とせる大同俱樂部。山田武甫、河島醇の二氏を代表とせる九州聯合同志會を打て一丸としたる團體にして、其の數、百三十名を有せしも、未だ議會の大勢を左右することを得ず。改進黨は曩に大隈伯條約改正案に賛成し、又た全國進歩主義大合同に加

はらざりしより、孤立無援の地に在りしが、藩閥政府に反對する主張に於て、敢て自由黨に譲らず。是れ實に自由、改進兩黨の領袖が其の聯盟を策し、共に俱に相提携して、第一議會に臨み、帝國憲法に附與せられたる立法機關に據り、猛然起て政府に肉薄し、藩閥の城壘を打破せんことを期したる所以なり。

多年藩閥政府の壓迫と桎梏とに對して、其の生命と財産とを犠牲に供し、惡職苦闘を繼續し、萬死の中より漸く參政權を贏ち得たるものは、自由黨、及び改進黨なり。苟も兩黨にして、其の歴史に鑑み、其の提携を固くし、其の結束を密にし、終始一貫其の態度を變ぜず、藩閥政府に對抗せしめば、第一議會に於ける最後の捷利は、民黨に歸せるなり。中道に於て、政府黨の乘する所となるを免れざりしものは、其の精神的結束の弛びたるに坐するものなり。

明治卅三年十一月廿五日第一期帝國議會は東京に召集せられたり。是より先に十月廿五日、伯爵伊藤博文貴族院議長に任じ、伯爵東久世通禧副議長に任じ(會期中、正副議長共に病臥したるを以て、公爵近衛篤磨假議長として其の職務を管理せり。)衆議院は召集當日、正副議長各三名の候補者を選舉せしが、當選の結果、翌二十六日、中島信行氏(自由黨所屬)は衆議院議長に、津田眞道氏(大成會所屬)は副議長に勅任せられたり。

此の日、午前八時、天皇賢所に詣り、皇靈神殿の親祭、告文、奏上等の式を行はせられ、入御の後、親王、大勳位、内閣總理大臣、樞密院議長、各國務大臣、大臣待遇者、侍從長、樞密顧問官等の參拜あり、終りて午前九時より貴衆兩院正副議長、並に各議員の參拜ありき。

午前十時三十分、天皇國儀式圖簿を備へ、親王、大勳位以下百官を従へ、宮城を御出門あらせられ、同十時五十分、奏樂の聲雅々と

して「君が代」の歌に和し、歌三回するの際、貴族院に著御あらせらる。時に貴衆兩院正副議長、及び兩院書記官長奉迎し、貴族院議長伯爵伊藤博文、奉導し便殿に入御せらる。同十一時、議長書記官長及び貴族院議員を案内し、一同式場に入り、次に衆議院議員亦入り、兩院議員共に其の半數は椅子に掛り、其の半數は後にイむ。斯くて式部長出御を奏請し、天皇式場に臨ませられ、玉歩を議長席の間に駐め、正面して式場に向はせられ、規矩正しく式場を背にし、御設の高御座に著御あらさせ給ふ。此時一同最敬禮を表せり。

天皇の出御に先立つこと數分前、内閣總理大臣伯爵山縣有朋、樞密院議長伯爵大木喬任以下各國務大臣、樞密顧問官等玉座の左側に、列を正うして斜に立ち並ぶ。貴族院議員中、多額納稅者を除くの外、金装燦爛たる大禮服を著け、半圓形なる式場の椅子を中分して著席し、其の半數は衆議院議員にして、二三議員を除くの外は、燕尾服を著し、一半は貴族を代表し、一半は平民を代表せり。其の他歐米各國公使並に館員等拜觀席に列するや、金色燦然として各國の服裝を表し、中に支那朝鮮等各國公使の衣冠肅々たる服裝は一種の異彩を放てり。

天皇の玉座に御せらるゝや、山縣首相は恭しく御前に進み、左に陸軍中將の禮帽を提げ、右に勅語を捧呈せり。天皇御手づから之を受けさせられ、轟々たる祝砲の響く間に、玉音朗々として左の勅語を讀ませ給ふ。其の間神聖にして莊嚴。滿場肅然として崇敬の念に打たれざるは無し。其の勅語に曰く。

勅語

朕、貴族院、及、衆議院ノ各員ニ告ク。

朕即位以來、二十年間ノ經始スル所、内治諸般ノ制度粗ボ其ノ綱領ヲ擧ケタリ。庶幾クハ皇祖皇宗ノ遺徳ニ倚リ、卿等ト共ニ前

ヲ繼キ、後ヲ啓キ、憲法ノ美果ヲ收メ、以テ將來ニ益々我カ帝國ノ光烈ト我カ臣民ノ忠良ニシテ勇進ナル氣性トヲシテ中外ニ表明ナラシムルコトヲ得ム。

朕又夙ニ各國ト盟好ヲ修メ、通商ヲ廣メ、國勢ヲ擴張セムコトヲ期ス。幸ニ締約諸國ノ交際ハ、益々親厚ヲ加ヘタリ。陸海ノ軍備ハ、内外ノ平和ヲ保全スル爲ニ、歳ヲ積テ完實ヲ期セザル可カラズ。

明治二十四年度ノ豫算、及、各般法律案ハ、朕之ヲ國務大臣ニ命ジテ議會ノ議ニ付セシム。

朕ハ卿等カ公平慎重以テ審議協贊スル所アルコトヲ期シ、併セテ將來ニ繼クベキノ模範ヲ貽ザムコトヲ望ム。

勅語の朗讀を終らせ給ふや、貴族院議長伊藤博文は、式場の階を登りて御前に進み、恭しく之を拜受し、一同の最敬禮終りて高御座を離れ、議長席の間に於て玉歩を駐め、式場に向ひ、目禮あらせらる。此時奏樂の聲又た起り「君が代」の歌を奏す。是に於て、式全く終り、貴衆兩院議長の奉送にて、衆議院の正門を御發聲あらせられたり。時に拜觀者雲の如く、咸 天皇陛下の萬歳を唱へざるは無し。

勅語奉答に就ては、貴族院は、伊藤議長に一任せしが、衆議院は此の日正午十二時三十分より勅語奉答に就ての議事を開き、中島議長は一同に對して「書を以て勅語に奉答すべきか、將た言を以てすべきか」と諮る。河島醇氏曰く「斯る虚禮を爲すに及ばざるべし」と。討論の末、遂に起草委員を選び書を以てするに決し、其の起草委員は、五名を選ぶべしとの説ありしが、各部より一名づゝ出すに決し、又た「其の全權を起草委員に托すべきや否や」を伺ひしに百五十八の多數を以て之を可決せり。

貴族院の奉答文左の如し。

臣貴族院議員等誠恐誠惶、恭て叙聖文武

天皇に上奏す。陛下聖徳日に躋り、大憲を煥發し、議會を設け、衆思を聚め以て與に俱に國家の進運を扶持せしめんことを望み給ひ、今や兩議院を會同せしめ、親しく開院の盛典を擧げ、優渥なる勅旨を賜ふ。臣等區々の微衷、専ら帝國の隆昌を冀ひ、併せて臣民の慶福を祈る。敢て大憲の條章を恪遵し、所見を啓瀝して以て皇猷を贊襄する所あるを期せざらんや。臣等恐懼の至りに堪へず、謹で奉答す。

又た衆議院の奉答文左の如し。

衆議院議長中島信行、謹で奏す。恭しく惟ふに、我 天皇陛下、帝國議會開院の盛式を擧げ、優渥なる聖詔を賜へり。臣等感喜の至りに堪へず。臣等是より心力を盡し、協贊の責を全うし、以て陛下の信任に對へ、以て國民の委託に酬んとす。茲に謹で奉答す。

兩院議長參内して、其の奉答文を捧呈するや、

天皇は兩院に對し、深厚なる敬禮を嘉みさせ給ふ旨を宣はせられたり。斯くて、貴衆兩院は、各其院の規則を議決し、兩院協議會規程を案定し、全院委員長及び常任委員を選挙するや貴族院は細川潤次郎氏選ばれて全院委員長と爲り、衆議院は島田三郎氏選ばれて全院委員長と爲れり。

七 改進自由兩黨の聯盟と與黨の態度

改進自由の兩黨は、政費節減、民力休養の題目に於て、其の主張を一にし、從來の歴史と感情とを一擲し、第一議會に於て、相提携

して政府に反抗するの態度に出でしも、松方内閣の出現に對しては、一層其の聯盟を緊密にし、其の結束を堅固にし、聯合一致して政府に當るの必要を感じたり。是に於て、大隈重信、板垣退助兩雄の會見となり、更に進みて民黨の聯盟と爲るに至れり。

是より先に、大隈は條約改正問題の爲に失脚して外務大臣を辭し、樞密顧問官の閑職に在りしも、雄心落々、體肉の嘆なき能はず。籍を政黨に置かざるも、事實に於て、改進黨の首領として、間接又は直接に同黨を指導し、藩閥政府に對して、隱然一敵國たるの觀あり。民黨も亦た大隈板垣兩雄を以て自由主義、進歩主義の本尊として之を欽仰せり。但た自由改進黨兩黨は其の創立に於て系統を異にし、感情を異にし、相反目し來りし歴史を有せるを以て、兩黨の融和聯盟は、殆んど望み得ざるに拘らず、第一議會に於て、其の步調を同うせしは、共同の政敵たる藩閥政府に對し、鵜蚌の争、漁夫の利と爲るを恐れたるのみ。而して民黨に對し、挑戰的態度を持する松方内閣の出現に對しては、民黨の聯盟益々其の緊切を感ぜざるを得ず。是に於て、自由改進黨兩黨の策士、其の間に奔走する所ありしが、第一議會閉會の後ち議會の腐敗を慨して辭職したる中江兆民氏は、政府と民黨との對戰、到底其の避け得ざるを看取し、自ら進みて自由改進黨兩黨の間に遊説し、此の歲十一月、板垣伯をして、篤を早稻田に任せ、大隈伯を訪問せしめ、政府攻撃に對する民黨聯盟の事實を天下に示すに至れり。

板垣大隈兩雄の會見は、非常なる反響を政界に與へたり。政府は此の會見を以て民黨の政府に對する挑戰と看做し、「大隈伯が樞密顧問官として最高諮問の重職に居るに拘らず、公然政府反對黨の首領板垣退助伯と會見するが如きは、官紀紊亂の太甚しきものなり」とし、旨を大隈伯に諭して其の職を辭せしめたり。而して大隈の辭職は民黨をして益々激昂の度を高からしめ、政府反對の氣勢は之れが爲に一層の熱度を加へたりき。

既にして、第二議會の開會に先ち、民黨代議士聯合懇親會を開くや、來衆百五十餘名。自由黨と分離したる自由俱樂部の一團も亦た之に参加せり。是れ實に明治二十四年十一月十七日なり。

嗣て與黨の形勢如何を察すれば、二十四年三月大成會の大半及び無所屬議員の一部相合して協同俱樂部を組織し、其の會員一時八十餘名に上りしも、其の後ち退會者相踵ぎ、十一月に至りて遂に解散せり。而して大成會の一部及び無所屬議員の一部、即ち岡崎運兵衛、金尾稜嚴、菅了法氏等相合して獨立俱樂部を組織し、其の數十九名に上れり。又た他の一方に於ては大成會の一部及び自由黨の一部相合して巴俱樂部を組織し、其の數十七名。大東義徹、鈴木重遠、中村彌六氏等、其の領袖たり。但し巴俱樂部の如きは、硬軟相半するも、其の實は民黨と其の態度を同うするもの尠ならず。而かも其の眞に政府の與黨と目すべきものは、大成會にして、其の數五十二名。元田肇、安部井磐根、大谷備一郎氏等其の領袖たり。之に加ふるに無所屬議員五十一名あり。是を與黨の中堅勢力と爲す。

蓋し政府の與黨は、悉く是れ非政社の團體にして、政黨としての主義綱領を標榜するものにあらず。其の隊伍散漫、其の統制薄弱にして、結束意の如くなる能はず。加ふるに其の數は、大成會、無所屬及び獨立俱樂部及び巴俱樂部を合するも、百三十九名に出でず。之に反して、自由改進黨の聯合軍たる民黨は、百六十一名の多數を占め、之を統ぶるに板垣、大隈兩雄の如き巨頭を以てし、其の勢力優越、政黨として統一あり、節制あり、而かも士氣緊張、所謂衆志城を成し、藩閥を打破せねば止まざる概あり。勝敗の數は議會未だ開會せざる前に瞭然たり。第二議會の終に解散を免れざりしもの、蓋し必至の勢なりしなり。

八 松隈二老の會合と伊藤首相の辭職

伊藤首相は自由黨との提携によりて、第九議會を無事に通過することを得たりしも、天下の民心漸く離れ加ふるに閣僚の意見其の統一を缺き、遂に二十九年八月三十一日を以て、其の職を辭し、内閣の總辭職を見るに至れり。

是れより先に、第九議會の會期中、二月三日山縣系の野村靖氏、内務大臣を辭し、芳川法相、内務大臣を兼攝せり。三月三十日、新に拓殖務省を置き、子爵高島勲之助を擧て拓殖務大臣に任じ、尋て芳川氏の内相兼攝を解き、四月十四日、自由黨總理板垣退助入りて内務大臣と爲る。板垣の入閣は表面に於て、自由黨を脱するの手續を執りしと雖も、是れ實に伊藤首相が自由黨提携の條件を實行したるなり。

第九議會の閉會を告ぐるや、五月三十日、陸奥外相其の職を辭し、文部大臣西園寺公望公外務大臣に兼任せり。時に渡邊藏相も亦た財政問題に關して、閣員と其の意見を異にし、加ふるに公債募集意の如くなる能はざるより、遂に辭表を提出するに至れり。是に於て伊藤首相は、閣内外の意見に聽き松方伯を藏相に、大隈伯を外相に迎へ、内閣を改造せんとするの意あり。閣員の多くは之に賛成せしが、板垣内相は獨り大隈を迎ふるの不可を争ひ、審議の末、松方伯のみを迎ふるの議を決し、松方伯に交渉する所ありたり。然るに松方伯は單獨入閣を拒絶し、若し大隈伯と共に入閣するを得ば敢て之を辭せざるの意を洩らせり。因て閣議再び大隈入閣の可否を議せしに、議論遂に統一を缺き、八月二十八日、伊藤首相閣議不統一を以て、其の責を引き、辭表を捧呈し、八月三十一日に至りて其の職を免ぜられ、樞密院議長黒田清隆、代りて臨時内閣總理大臣を兼攝せり。

蓋し第九議會閉會の後政界の識者は、天下の人心既に伊藤内閣に懾たらざるものあるを察し、松方大隈兩伯の聯合を策し、以て戦後の外交及び財政に處する所あらんとせり。是より先に、松方は伊藤内閣の大藏大臣として臨時議會召集及び財政政策に關し、伊藤と其の意見を異にし、野に下りしより以來、隱然在野黨の推す所と爲りしが、此に至り彼は展幕の爲に鹿兒島に歸省せり。此時改進黨の首領大隈重信伯も亦郷里佐賀に歸省し、二老期せずして九州に下るに會す。時に平岡浩太郎氏は「伊藤内閣に代りて新内閣組織の後に當るものは、松隈二老に若くはなし。幸に二老の九州に來るを機とし、之をして相會し、之れが意見を交換せしめ、速に内閣の改造を圖らざる可からず」と。是より當時在薩の長谷場純孝氏をして松方伯を動かす、佐賀に於て江藤新作氏をして大隈伯に説き、又た當時大村に歸省中なりし楠本正隆氏をして二老の間に斡旋する所あらしめたり。

然るに當時大隈伯は名古屋の實業家大會に臨むの前約ありしを以て、急行を要し、松方も亦急に鹿兒島を去ること能はざる事情ありしが爲に遂に二者會合の機を得ること能はざりしも、未だ幾ならず、松隈二伯は岩崎彌之助氏の紹介により京都池庄に於て會見し、互に其の意見を交換し、松隈提携の約成るに至れり。

此の如く一方に於て、松隈提携の成立すると同時に、伊藤内閣の内情を察すれば、渡邊藏相既に辭表を提出し、陸奥外相亦た病の爲に職を辭し、西園寺文相は外相兼攝と爲りしも、大藏外務に専任大臣の必要を感ぜざるを得ざりき。是に於て、外に在りては井上馨侯専ら松隈二老の入閣を懇願し内に在りては高島勲之助氏首として之を主張せるも、大隈伯の入閣は、板垣伯の反對と爲り、遂に閣議分裂、伊藤内閣の總辭職となれり。

伊藤首相の辭職は其名は内閣不統一に在りと云ふも、實に輿論の真相を察すれば、三國干涉遼東還附の時に於て、天下の人心は既に伊藤内閣を去りしなり。戦後、自由黨の提携によりて、僅に一時を彌縫し、無事に第九議會を通過するを得たるも、是れ必ずしも國民が伊藤内閣を信任したるが爲にあらず。内閣彈劾の上奏案は否決の運命に遭遇せしが、日本國民の最大多數は、精神的に内閣彈劾に賛

成せざるものなかりしなり。伊藤首相の明、之を知らざるの理なし。故に彼は新たに自由黨の提携によりて、次期議會に於て、反對黨と戦ふべき餘裕ありしに拘らず、戦後經營案の通過を機として、名を内閣不統一の理由に藉り、速に其の去就を決するに至りしなり。

九 松隈内閣の成立

伊藤首相の職を辭するや、樞密院議長伯爵黒田清隆、臨時内閣總理大臣に任ぜしが、元老會議の結果、内閣組織の大命伯爵松方正義に下り、松方伯は伯爵大隈重信伯と共に其の重任に膺るに決し、九月十八日を以て内閣總理大臣兼大藏大臣に任じ、尋て國務大臣の親任式を舉行せられたり。其の閣員左の如し。

内閣總理大臣兼大藏大臣	伯爵松方正義
海軍大臣(留任)	伯爵西郷從道
外務大臣	伯爵大隈重信
農商務大臣(留任)	子爵榎本武揚
陸軍大臣兼拓殖務大臣	子爵高島鞆之助
内務大臣	伯爵樺山資紀
逓信大臣	子爵野村靖
司法大臣	清浦奎吾

文部大臣

候爵 蜂須賀茂韶

親任式の舉行と同時に、政府は高橋健三氏を擢て、内閣書記官長に、神鞭知常氏を擧げて法制局長官に任ぜり。内閣書記官長と法政局長官とは、必らずしも二人の重きを爲すに足らずと雖も、二人の新任によりて、世人は望を現内閣に囑したるの感あり。

新内閣の重心は松方と大隈とに在りて、松方は薩派を代表し、薩派は樺山、高島つ二相其の代表的人物なり。大隈は進歩黨を代表し、内閣書記官長高橋健三、法制局長神鞭知常の二氏、内閣と進歩黨との間に立ちて、其の連鎖と爲れり。

又た薩派の外に、閣外の元老を代表せるものは、野村内相、清浦法相、蜂須賀文相にして、此の三人は伴食宰相に似たるの觀ありしが、山縣系に屬せるを以て之を無視するを得ざりき。此の如く、此の内閣は時代の要求に應じて生れたる内閣なりしも、立憲主義より云へば、統一の要素に缺點あるを免れざる内閣なりと謂はざるを得ず。

十 進歩黨の成立と内治外交

松隈内閣の成立するや、首として之を歓迎し其の政綱に賛成したるものは、即ち進歩黨なり。是より先に、對外硬を標榜して伊藤内閣に反對したる聯合派は政府より極端なる壓迫を被むり、同志會なるものを組織して、各派聯合の實を保ちつゝありしが、第九議會の末期に際し、同志相謀り、一大政黨を組織して時代の進運に應ずるの必要を認め、各其の團體を解き、新政黨を樹立し、「進歩黨」と命名し、明治廿九年三月一日を以て結黨式を擧げ其の宣言書及び政綱を發表したり。

宣言書

國家内外の形勢は、吾人をして一大政黨を樹立せしむ。今茲に結黨式を擧ぐるに方り、其因て起る所以を宣言し、以て舉國同憂の志士に告ぐ。吾黨は進歩主義を執り、茲に責任内閣を設立し、茲に外政を刷新して國權を擴張し、茲に財政を整理して民業の發達を誘致し、以て立憲政治の實を擧げ、維新興國の不基を完成し、以て皇室の尊榮を宣揚し、民人の權利幸福を増進し、以て宇内の文化を大成せんことを欲す。維新中興の初に當り、大に聖謨を定め給ひ、詔に曰く。廣く會議を起し、萬機公論に決すべしと。爾來三十年憲法既に制定せられ、天皇の神聖、大臣の責任、人民の權利、分界明確、復た疑を容るべきなし。然るに、閣臣有司、尙ほ陋習を悛めず、或は言論集會を箝制して公論の發動を阻碍し、或は濫りに帝國議會を解散し、或は屢ば外交の措置を誤りて威信を中外に失ふ。凡そ此の如きもの、一民豈一日も之を默過するに忍びんや。

吾黨は行政機關を革新し、税法を改め、冗費を除き、以て之を國家有用の費途に充て、萬事實實を旨とし、創業進取の精神を作興し、以て綱起を振張せんと期す。

願ふに維新中興の不基を完成し、萬里の波濤を拓開するの聖謨を冀贊せんと欲せば、主として國外政を刷新し、權を擴張せざるべからず。然るに從來の外政は、多く國家の威信光榮を毀損し、特に征清の終局に於ける、特に對韓の政策に於ける、國家の威信光榮を失墜せる之より甚しきはなし。今や東洋の形勢益々非にして、此隣邦の危急且夕を測らざるに至れり。此時に當り、國民をして狂瀾を既倒に回するの大氣力を發動せしむるに非らずんば、金匱無缺の國家を如何せん。吾黨の外政恢弘の策を把持し、之を貫徹せんとするものは、決して偶爾にあらず。今や帝國の實勢と、寰宇の大機とが小黨の分立を容さず。茲に在野の各黨派を解散し、以て進歩黨を樹立し、其政綱を頒ち、其宣言を發し、猛進して以て第二維新の大業を贊襄せんと欲す。請ふ舉國同憂の士、來りて以て此の舉

を贊せよ。

政 綱

我黨は進歩主義を執り、皇室の尊榮を宣揚し、人民の權利幸福を増進せんため、左の政綱を定む。

- 一 政弊を改革し、責任内閣の完成を期す。
- 一 外政を刷新し、國權の擴張を期す。
- 一 財政を整理し、民業の發達を期す。

當時進歩黨に参加したる團體は、大隈重信伯を中心とする立憲改進黨、田口卯吉氏等の率ゐたる財政革新會、犬養毅氏を首領とする中國進歩黨、大日本協會の集團たる大手俱樂部、新潟國權派の一團たる越佐會、各派聯合の機關たる同志會、及び一部の獨立議員にして、別に首領を置かざるも、大隈伯は内に在りて隱然之を指導せり。而して松隈内閣の成立は、楠本正隆、長谷場純孝、大石正巳氏等を首とし、其他同志の斡旋與りて力ありしが、此に至り、廿九年十一月一日、進歩黨は大會を開き、現内閣と提携することを議決したり。

臨時大會決議

現内閣は地方官に對する總理の演説を以て、

- (一) 責任内閣の實を擧ぐることを。
- (二) 外交方針を改め以て國權國利を伸張することを。

- (三) 軍備の擴張は國力に適應せしむること。
 - (四) 國力を發達せしめんが爲に、主として教育、及、實業を奨励すること。
 - (五) 言論集會の自由を伸潤すること。
 - (六) 行政改革を斷行し、又官紀を振肅すること。
 - (七) 財政を整理し出入の均衡を回復すること。
- を宣言せり。是れ皆方今の急務にして、我黨の方針と大差なし。故に我黨は其の實行を完美ならしめんことを期す。抑も言徒らに美にして行之に伴はざるは、我黨の取らざる所にして、乃ち政治家の當に最も戒むべき所なり。故に現内閣の實行若し非ならば、我黨は之を攻撃するの責務を有す。故に之を決議して所信を言明す。
- 是れ簡易直截に進歩黨と松隈内閣の接近と提携とを語るものなり。

十一 第十議會開會前に於ける各派の情勢

第十議會開會前に於ける各政派の情勢を察するに、松隈内閣の與黨たる進歩黨は九十四名の多數を占め、之に加ふるに、實業同志俱樂部、議員俱樂部其の他無所屬議員の大部分は、大體に於て現内閣の政綱に賛成するもの多きを以て、政府與黨及び準與黨の數、百六十名の多きに達したり。

現内閣の反對黨は自由黨を首とし、國民協會之に次ぐ。自由黨は板垣伯在職の時、極力大隈伯の入閣に反對したる關係ありて、松隈内閣の成るや、公然之に反對せり。而かも其の敵視する所は大隈外相其人なり。當時自由黨議員は百三名の多きを占あたりしも、三十年一月五日西村甚右衛門氏等七名の代議士、先づ黨を脱し、越えて十日直原守二郎氏等五名亦相踵て脱黨せるを以て其の數八十八名に減ぜり。

國民協會は松隈内閣に對し、其の初め賛否を言明せざりしも、其の態度に懐らず後ち公然之に反對するに至れり。蓋し同協會は第九議會に於て自由黨と共に伊藤内閣を援護するに勉めたりしも、議會閉會後漸次隔絶し、板垣入閣するに及びて、公然政府の處置を難し、之に反對したり。伊藤内閣倒れ、松隈内閣成立するに及び、閣員中、松方、西郷、樺山、高島氏等の如き、亦皆協會と宿縁淺からざるものありしも、大隈と相容れず、終に之に反對するに至りしなり。左れど同協會議員の數は第九議會に於て三十二名を有せしが、此に至り、脱黨者相踵ぎ、二十三名に減じ其の勢力甚だ振はざりき。

此の如く政府反對黨は、自由黨の八十八名に加ふるに、國民協會の二十三名、其他中立議員の政府反對主義者を合するも、百五十名に達せざりしを以て、其の數は到底議會を左右する勢力なかりき。

今ま試に政府與黨との數を掲ぐれば、即ち左の如し。

政府與黨、及び中立團體

一 進 步 黨	九 十 四 名
二 議員俱樂部 (政府案賛成議員の組織に係る)	二 十 六 名
三 實業同志俱樂部 (中立主義者の組織に係るもの)	十 八 名

- 四 新自由黨（自由黨脱黨者の組織に係るもの） 十二名
- 五 國民俱樂部（國民協會脱會者の組織に係るもの） 七名
- 六 日曜會（無所屬の一部議員の組織に係るもの） 八名
- 七 無所屬 廿四名
- 政府反對派、及び準反對派
- 一 自由黨 八十八名
- 二 國民協會 廿三名

無所屬並に中立派の團體中には、固より政府謳歌者のみにあらず。其の反對者も亦たなきにあらざりしも、其の反對者の數は極めて微弱なりしなり。

十二 外交方針に關する大隈外相の處女演説

自由黨は其の多數を擧げて、内閣反對の位置に立てり。最も其の敵視する所は大隈外相に在りしを以て、同黨所屬の議員は先づ外交に關する各種の質問を放ちて之に挑戦したり。大隈外相は豫算委員會に於て、答辯せしが、十二月六日、本會議に臨み、外務省所管豫算議事に入るに先ち、外交方針に關する一場の演説を試みたり。是れ實に大隈伯が國務大臣として議場に於て演説したるの始と爲す。

諸君。今日私は神聖なる衆議院に向て口を開きますことは始めてあり、諸君と此處に相會して私の説を述べることは甚だ私

の喜ぶ所であります。先日豫算委員會に於て、色々外務省の費用に就て質問が起り、其時に此外交の方針を聴きたいと云ふ質問が起りました。其時に此外交の方針は直接に豫算に關係しないのであります。併しながら自ら間接に豫算に關係も致しますが、是はいづれ本會に於て述べやうと思ひますので、委員會に於ては其直接なる事柄のみに向て答辯を致すと云ふことになつて居りました。それ故に今日は外交の方針に就て大體の御話を致さうと思ひます。是れは諸君の御承知の通りに、第一議會以來、度々國務大臣が議會に向て述べられた外交は開國の主義である。或は開國進取であると云ふ事は、度々述べられた様に存じます。勿論此外交の方針

——方針と云ふよりは殆ど國是と云ふものは、明治初年以來、一定不動のもので、今日又將來に於ても此開國の主義若くは開國進取と云ふものゝ如きは變ずるものでないと信じて居ます。又た更に此迄述べられたものゝ多少附加へて私は述べることは必要と思ひます。畢竟此明治の國是として現るゝ所の外交にはどう云ふことが大切であるかと云へば、維新の大詔にもあるが如く萬國と對立と云ふことが、此萬國と對立——併立すると云ふことが、總て、此外交の方針よりして、有ゆる國家に變動を起して、總て萬國と對立せんとすれば、一國の制度、文物、教育あらゆるものを變更しなければならぬと云ふことが起て、廢藩置縣と爲り、幣制の改革となり、徴兵令、其他法律の改正、新規な法律を拵へ、或は地方の議會、地方に自治を興へる等遂に憲法の制定さるゝまでに至つたのであります。總て此國是、所謂開國進取、言換れば即ち外國に向て萬國と併立すると云ふ主義からして、日本が導かれて今日大に文明に進んで世界に重ぜられ尊敬さるゝと云ふ國に迄進んだのは、皆な此主義に従つたものであると存じます。是に於て私は一層進んで申したいと思ふのは、抑も此外交と云ふものは随分困難なることである。決して一國で左右することの出来ぬ、此外交と云ふものは、餘程此以前と今日と次第次第に變化して來たのである。諸君御承知の通りに、昔の外交と云ふものは、或る一國と一國と、若く

は一國と數國誠に區域の範圍が狭かつたのであります。然るに、今日に至りては、運輸交通の便が非常に發達し、世界の利害の關係が餘程密著して來たのである。それ故に、此外交の有様と云ふものは餘程變化して來た。御承知の通り昨年起た所の英國とベネズエラ——英國は世界無比の大國である。世界に殆ど一千万方英里以上の植民地を持って居ると云ふ大國と、南亞米利加のベネズエラと云ふ小さな共和國而して其境界が全く沼地である、無人の地であると云ふが如きもの少しの境界の地の争が起たのである。諸君御考へ下され、何でもない話、英國の力、英國の強を以て弱少のベネズエラに及ぶ、何でもない話であるが、なか／＼さうは行かぬ。直に北米合衆國より之に向て干渉が起て來た。そこで英とベネズエラの問題にあらずして、南北亞米利加と英國との問題と爲て來たのであります。それに干渉する言葉にどう云ふ言葉を用ひたかと云ふと、御承知の通りに古くから成立て居る所の「モンロー」主義、南北亞米利加に歐羅巴の勢力を拒絶すると云ふ一つの主義を持たんだのである。是に於て、南北亞米利加と英國との問題にあらずして、世界の問題に爲つたのである。如何となれば歐羅巴の勢力を入れぬと云ふ如きことであれば、直ちに重大の問題と變じて、隨分歐羅巴は亞米利加に植民地を持って居る。種々な關係が起て小さな一植民地の問題が世界的の性質を帯びて來ると云ふものである。も一つは是は何でもない一人の旅行者、或は一つの會社に従事する人がトランスバールに於て革命を企てたのである。其問題は何でもない。一の亞非利加の一共和國、殆ど英國の一保護國の如き國に於て起つた事柄で、直ちに日耳曼との關係が起つた、既に日耳曼と英國と干戈を交へんと云ふまでに進んだ。日耳曼と英國の争は、英國と日耳曼との關係にあらずして日耳曼の三國同盟、其他に及ぶと云ふので、矢張世界的の問題に爲つて來た。段々此外交の範圍が廣くなつて、隨分小さな事も世界に關係すると云ふことである。既に明治廿七年から廿八年に涉る支那の戦は、支那と日本の關係である。少しも他に關係がない事である。併しながらも遂に廿八年に至

て歐羅巴の最も勢力ある三國の干渉と云ふ事が起て來た。是も矢張世界の問題となつた。それ故に世界の問題として隨分世界の有名な歐羅巴の東方問題などに對して、隨分世界近來では東方問題が、近東問題、或は絶東の問題などと云ふものが、今方に端を日清戦争から惹起すと云ふことである。なか／＼此外交の範圍が廣くなつて來た。利害の關係が直ちに極細微の事も世界に及ぶと云ふが如き有様である。是に於て私は一言述べたいのは此外交と云ふものが第一規模が大きくなってはならぬ。計畫の規模が廣大でなければならぬ。總ての外交計畫は直ちに全世界に及ぶ、規模廣大なりと云ふことを一言述べます。それから外交の方針、否國是と云ふものは一定不拔連續と云ふの必要を述べたのである。而して、之を達するにもう一つ中上げたい。最も善良なる外交は國際法の主義に密著すると云ふことである。國際法の主義に密著する外交は即ち正理を土臺にすると云ふことである。此正義の力は強いものである。必らず世界公論の同情を得るとの力がある。今日本は數年來の熱心と勉強とを以て、國の進運に乗じて歐米の各國は餘程日本に友誼を表して既に四十年來不都合の條約の下に苦しめられた所ものが、國際法の主義に従て、日本は真正なる獨立國と見て國際法の待遇に依て同等なる待遇を受けると云ふ迄に進んだのは是れ畢竟日本の進歩の結果で、且つ英國は世界に先て日本の條約改正を承諾し、續て歐米の諸國は十分同情を表して日本の條約改正を承諾した。今方に既に數十年來の大問題たる條約改正は、僅かに澳太利、匈牙利の一國を残すと云ふが如き有様に爲つて居るのであります。そこでもう是れも早晚落著するに相違ない。其時に當て始めて、日本が世界に向て同等の地位を保つのである。是まで諸君御承知の通りに、治外法權と云ふものは耶蘇教國民の間にのみ行はるゝものである。治外法權と云ふものは白哲人種の間にのみ行はるゝものである。治外法權と云ふものは白哲人種の間にのみ行はるゝものであると云ふが如きは、隨分立派な國際法の學者達も述べたのであります。其妄想は次第々々に消滅し、耶蘇教國以外、白哲人種以外に、日本の進歩は、所謂此正理の上から、正界の正理の助を

受けて、遂に同等の地位を保つと云ふことに至つたのであります。それで是より、愈此條約改正から起る所の日本の利益を收めんとすれば一層力を盡して此國を進めなくてはならぬのである。又疑なく、此國は進むに相違ないのである。此進む所のは外交と相待つのである。それ故に其外交が遂に此正理の土裏に於て國際法と近寄ると云ふ最も善良なる外交を取て行かなくてはならぬ。是に於て決して是は本大臣、即ち此大隈と云ふ大臣の言葉でないのである。即ち明治政府の方針を代表して云ふのである。此人に依て變ると云ふ外交は甚だいかぬのである。さう云ふものは甚だ危い、一時どうも非常な才智非常な外交を以て隨分一時を成功した例は澤山あるが、それは所謂砂上の樓閣直ぐ破れてしまふ。それが私が初めから外交は一定不拔連續と云ふのはそれでありませう。人が變て外交が變ずる、それではいかぬ、是は私が明治初年以來の一定不動の方針である。其中に多少過ちがあるか知らぬ。併ながら私は誠意誠心此進運に乗ずる、此國體に於て、今御話する主義を以て十分力を致し事に従ふ積りである。それで其方針を以て進むに就ては決して大なる過はないと信するのである。又幸ひ今日は日本の外交皆極く親密である。多少の問題があつても是は直に結了することが出来ると思ひますのでござります、私が信する所を以て見れば、此外交は必ず日本に對し最も友誼を重んずることになる。或は多少是れまで不快の感じを持て居る國も、轉じて十分なる友國と爲すことが出来ると思ひます。大體の方針は是れ即ち明治政府の方針、是迄度々述べられたものを少しく附加へたに過ぎぬ譯であります。

是より大隈外相は、更に言を續ぎ、豫算委員會に於て削減したる外務省所管經費の活を望み、又た日露協商に關する質問に對し、更に近日中答辯すべき旨を述べて其の演説を終れり。

是れより先に、伊藤内閣は、征清戦局以來、獨力朝鮮扶植に任じたる對韓政策の方針を一變し、露國と折衝して、二種の協約を締結

せり。其の一は明治二十九年五月十四日、小村ウエバー間に締結したる京城覺書にして、其の一は同年六月九日、山縣ロバノフ間に締結したる莫斯科議定書是なり。第十議會に至り、自由黨の議員中、日露協商の内容、及び之に關聯して對韓政策如何を質問するものあり。是に於て、松方内閣は日露協商を公にせんとし、露國政府に照會して其の同意を得、大隈外相は、之を二月廿六日之を公表せり。而して大隈外相の之を公表するや、彼は維新以來日露の關係、日清戦役前後の事情を述べ、朝鮮を扶植せんが爲に、日露兩國の間に協商の已むなきに至りたる所以を論じ、質問者に答辯したり。

大隈外相の外交方針に關する演説は、特に外交界の注意を惹くに足るものなかりしが、歴代外務大臣の月並的演説と其の撰を異にし、論旨光明、或る好印象を世人に與へたるに至りては、大隈の大隈たる所以にして就中、藩閥内閣の秘密主義を打破して、日露協商を公表したるが如きは、官僚的内閣の爲し得ざる所を爲したるものと謂はねばならぬ。

十三 松方内閣と進歩黨の絶縁

松隈内閣は進歩黨の援助に由りて、豫算案其の他の重要法律案は第十議會を通過するを得たるも、議會閉會の後、薩派と隈派との暗闘日に其の甚しきを加へ、終に兩派の分裂を見るに至れり。

松隈内閣組織の初め、神鞭知常氏、法制局長官と爲り、高橋健三氏入りて内閣書記官長と爲るや、此の二人は、其の人格と徳望とを以て、現内閣と進歩黨の聯鎖と爲りしかば、世人は望を屬して松隈内閣の施設如何を期待したり。而して松方首相が其の政綱を發表して、施政の方針を示したるが如き。新に臨時政務調査委員を擧げて行政整理の事に従ひたるが如き。又た官民茶話會を開き、上下の意

を疏通せんことを圖りたるが如き。其の施設稍や見るべきものあり。然るに、未だ幾ならず、「二十六世紀事件」なるものを生じ、政府は其の關係せる新聞雜誌を停止して自ら言論の自由を尊重すと聲明したる宣言を抹殺したるが爲に、忽ち衆議の非難する所と爲り、其の信望漸く薄らぎたり。

第十議會閉會の後、進歩黨員の重なるもの、前後相踵で次官、局長、知事と爲り、新たに勅任参事官の制を設け、人才登庸の途を啓けり、即ち尾崎行雄氏が外務省の参事官に、武富時敏氏が大蔵省の参事官に、新聞記者として徳富猪一郎氏が内務省の参事官に任じたるが如きは、其の最も著しきものにして、朝野相應じて以て庶政革新の任に當らんとせり。然れども、廟堂の上は、薩派と隈派の軋轢漸く長じ、爾來日を輕るに隨て、政府の施設益々放漫に流れ、毫も宣言實行の迹なかりき。例せば臺灣の稅政に對し、司法官之を糺彈せんとすれば、政府は憲法上の保障を無視して之を免黜したるが如き。會計検査院の不法決議に對し、政府之を是認して決算審査機關の信用を傷けたるが如き。又た外交上の事件に關し、米國が布哇を合併するや我が政府は米國に對して抗議を提出し、軍艦を派して示威運動を試み、其の省する所と爲らずして己みたるが如き。内政外交共に威信を失し、人心漸く松隈内閣を去るに至れり。

神鞭氏と高橋氏とは松隈内閣の双壁なり。彼等二人は隈薩兩派の間に立て、不偏不黨の見地に據り、松方首相に勸告するに最初天下に聲明したる政綱を實行すべきことを以てし、之を朝に諍ふと雖も、松方首相は優柔にして斷する能はず。氏等思ふに「事此に至る、大政革新の業望むべからず」と。共に辭表を捧げ、高橋氏は十月八日、其の職を免ぜられ（行政裁判所評定官平山成信氏代りて内閣書記官長と爲る）。神鞭氏は十月廿八日、其の職を免ぜられたり。（法科大學教授梅謙次郎氏代りて、法制局長官に任ぜらる。）二人去りて、世人は松隈内閣に於ける鼎の輕重を問ふに至れり。

松方内閣は、松隈聯立の内閣と云ふも薩派中心の内閣にして、大隈伯以外の大臣野村、清浦、蜂須賀、榎本氏等の如きは、皆薩派に傾き、大隈伯は孤立の地に陥りたり。彼は一世の雄なるも獨力を以て之を如何とも爲し得ず、然れども大隈伯は猶ほ朝に留まり、松方首相に提議するに「弊政を刷新すること。非立憲的行動を嚴禁すること。伴食宰相を免ずること」の條項を以てす。而かも松方首相は之を容るゝの斷なく、進歩黨も、政府の稅政を以て默視する能はずとし、常議員會を開き、「二三事項を決議し、委員をして其の決議事項を辯らし之を松方首相に交渉せしめたり。其の決議事項は、大隈伯の提議と同一にして、伴食宰相を黜けて、内閣の統一を圖ることは、重要な事項の一なりき。而して首相と委員との會見は、双方互に秘密を守るべきことを約したりしに拘らず、其の事情は端なく進歩黨所屬の機關新聞に洩れたり。是に於て松方首相は、覺書を以て、進歩黨の委員に回答して曰く「余不肖なりと雖も、至尊の親任を辱うし、大政輔弼の重任に當るに於ては、閣臣の進退、行政の作用は、決して他の容喙を待つべきに非ず」と。此に至り、十月卅一日、進歩黨は代議士總會を開き、左の決議を爲し、政府と其の提携を絶つに至れり。

吾黨は既往の事蹟に徴し、現内閣は、其の宣言を實行するの誠意なきものと認む。因て自今提携を絶つ。

進歩黨既に松方内閣と其の提携を絶てり。大隈伯が其の朝に留まること能はざるは、必至の勢なり。是に於て大隈伯は、遂に辭表を提出し、十一月六日、外務大臣兼商務大臣の職を免せられたり。

第三章 政黨離合集散時代

一 進歩自由兩黨の合同

我が國政黨史に特筆大書すべき問題は、一にして足らざるも、明治卅一年に於て、自由進歩の兩派が小異を捨て、大同に就き、釋然として從來の歴史と感情とを一擲し、藩閥黨を掃蕩し、憲政の基礎を樹立するの大目的を以て、絶對的多数を議會に有する憲政黨を創立したることは是れなり。惜むらくは、憲政黨は創立の初めより内訌を醸し、早く既に分裂を生じたるを以て、其の合同は單に藩閥黨に對する大同團結に止まりて、假令へ一時的現象たるに過ぎざるも、憲政黨の組織は、確かに憲政の新時代を劃したる結果を齎らしたり。我が帝國に於ける政黨内閣の建設は、實に憲政黨内閣即ち隈板内閣を以て其の新紀元と爲さざるを得ざるなり。

平岡浩太郎氏は筑前に於ける玄洋社の領袖として箱田六輔、頭山滿の兩氏と並び稱せられたる人物なり。是れより先に、第十二議會の開くるや、彼は政界の趨勢を察し、自由、進歩兩黨が相對峙して鵝蚌の争を事とし、徒に藩閥黨の利する所と爲るを嘆じ、窃に思ふに「進歩黨と自由黨とは、與に民間の二大政黨にして、責任内閣を樹立するの目的を以て政界に立ち、之れが目的を達する第一手段として政府と提携し、藩閥を政黨化せしめんと試みたるも、其の結果は却て藩閥黨の利用する所と爲りて皆失敗を招き、政權は依然として藩閥黨の掌握に歸し、二大政黨は互に相反目しつゝあるが如し。此の如くにして憲政の美果を收めんと期するは百年河清を待つに等し。此際兩黨の領袖に説き、舊來の感情を一擲し、同主義者の一大合同を圖り、正々堂々藩閥黨と其の雌雄を決せん」と。時に適まれば自由黨の領袖杉田一氏と邂逅せり。平岡氏と杉田氏とは二十年前の舊友にして、彼等は共に愛國社再興、國會開設期同盟會の同志たり。其の後平岡氏は九州に在りて炭鑛の經營に著手し、福岡に於ける鑛山王として巨萬の資を積み、杉田氏は中央に在りて政海

に奔走し、兩人の出處行藏、各其の地を異にし、此の別親しく其の懷抱を披瀝するの機なく、明治二十七年の交、平岡氏福岡より還ばれて衆議院議員たるや、彼は政界革新の志を懷き、憲政の爲に其の資産を投ずるも辭せざる決心ありしが、此に至り、杉田氏と相會するや、彼は率然杉田氏に謂て曰く「一夕手を取りて舊盟を尋ね、之れが意見を交換せば如何」と。杉田同感を表し、指を屈して二十年前の舊盟を尋ねれば、同志の士、前後凋謝相踵ぎ、其の能く餘生を保ちて、今猶ほ政海に奔走しつゝあるもの、僅々十名内外に過ぎざりき。因て同志の舊友會を約して別れしが、未だ幾ならず、同志の士、相携へて平岡邸に會合し、大に舊誼を温めたり。越前の杉田定一、福島河野廣中、高知の西山志澄、伊勢の栗原亮一、岡山の竹内正志の諸氏、及び當日の主人公たる平岡浩太郎各氏にして、實に明治三十一年六月三日なり。

平岡邸の舊友會に於て、端なくも、二十年前に於ける國會期同盟會の事に言及し、一切の感情因縁を一擲して、我が同志が政海逆流の中に處して苦節を守りし昔時に溯り、在野民黨の大同團結を圖り、以て積年の宿志に酬むんとするの議を發するものあり。平岡氏曰く「元來在野民黨の大同團結を圖るは、予の宿論にして、議會に於て過半数を制するに足る大政黨を組織せざる限りは、藩閥の打破は期すべからず。憲政の済美は望む可からず。是を以て吾人は前内閣當時に於ても此に奔走する所ありしも、時運未だ到來せずして其の計畫は畫餅に歸したり。尋て伊藤内閣の組織せらるゝや、吾人は又た此の宿論を實行せんことを期し、自ら批評の過中に投じ、同志と共に山下俱樂部なるものを組織せしも、其の頭數徒に多くして、之を運用するに當り、各人各個の意見雜出し、一問題として一致の行動に出づること能はず、爲に世人の非難を招くに至れり。是れ吾人が到底烏合の衆の與に謀るに足らざるを知り、益々同主義者を糾合するの己むべからざるを感じたる所以なり」と。進歩、自由兩黨合同の急務なることを論ぜしに、席上の同志は皆多年の蹉跎に由り

て、民黨の一大合同を圖り、藩閥黨を掃蕩するにあらざれば、憲政の効果を收むること能はざるを覺知せるも、竟に默然握手するの機會なきを恨みし時なりしを以て、翻然敵我の情を一洗し、相共に之を進歩、自由兩黨の領袖に謀り、更に一會合を催さんことを約して散會したり。

當時進歩黨は民黨合同を希望せるも、自由黨に在りては、土佐派の人士、林有造氏等、改進黨の人士と感情相容れず、姑く時機の熟するを待つべしとし、之に反對するの色あり。平岡氏等同志と共に其の間に斡旋する所あり。専ら意志の疏通を圖るに勉め、六月七日即ち議會停會の當日、兩黨の名士數輩平岡邸に會合し、談笑の間に舊來の感情を一擲し、默契裡に進みて兩黨合同の事に戮力すべきを約せり。

是より兩黨の同志は、數回の會合を重ね、民黨合同の第一著として、新政黨組織の準備會を楠本正隆邸に開き、栗原亮一、竹内正志兩氏の起草に係る新政黨の宣言及び綱領を協議し、多少の修正を加へたり。此の會に出席したる人々は、進歩黨の尾崎行雄、鳩山和夫、柴四郎、大東義徹、中村彌六、竹内正志。自由黨の松田正久、片岡健吉、西山志澄、林有造、杉田定一、栗原亮一。山下俱樂部の岡浩太郎、同志俱樂部の河野廣中の各氏なり。

越えて十六日、民黨合同同志の大懇親會を江東中村樓に開きしに、來會するもの五百餘名。伯爵大隈重信、伯爵板垣退助共に之に臨めり。是より先に進歩黨の楠本正隆、尾崎行雄、大東義徹の各氏等は板垣を訪ひ、自由黨の林有造、松田正久、片岡健吉の各氏は大隈伯を訪ひ、新政黨組織の由來を告げ、其の賛成を請ひしに、二人共に之を諾し、乃ち此日の大懇親會に出席し、各一場の演説を試みたり。大隈伯の演説左の如し。

成るのは難くして、敗るゝのは易い。先づ支那の旅順口を造るには、數千萬圓を費し、十五年掛つた。而して僅かに二十七時間に之を失つた。成る何ぞ難き。敗るゝ何ぞ易き。故に予は切に望む。此の如き大政黨が起つたならば、必ず十數年の目的を達することは、既に掌中にある。其の實或る勢は、既に破壊せられて居る。破壊せられて居るのである。勢力はないのである。無い爲に、又僅に殘孽を保つて居るのである。是れ勢力の罪にあらずして民間志士の罪である。

板垣伯の演説中に、

敵として憎かつたものは、今日は一番可愛いものであると予は判定を下すものである。即ち敵となつて手硬いものは、味方と爲つて頼もしいものである。然らば此の兩端に於て、斯の通りの精神を以て融和するときには、此の政黨の基礎は全く鞏固と爲るのであらうと思ふのである。

隈板兩伯の演説は、大なる衝動を合同派に添へ、氣焔萬丈。殆んど當る可からざるの概ありき。

二 大隈、板垣入黨し憲政黨組織

自由進歩の兩黨合同して新政黨を組織せんとする中、自由黨よりは片岡健吉、西山志澄、松田正久、杉田定一、栗原亮一、中島又五郎、谷河尙忠、岡崎邦輔、志波三九郎、改野耕三。進歩黨よりは大石正巳、尾崎行雄、大東義徹、鳩山和夫、柴四郎、武富時敏、島田三郎、楠本正隆、菊池九郎、中村彌六、竹内正志。其の他各派よりは園山勇、田口卯吉、長谷場純孝、河野廣中、及び平岡浩太郎の各氏選ばれて創立委員となり、新政黨創立に關する一切の事務を處理し、六月十八日工業俱樂部（京橋山下町）に會合して、結黨式準備

委員を定め、又た黨則原案を起草せり。其の準備委員は尾崎行雄、杉田定一、栗原亮一、竹内正志、中島又五郎の五氏なり。斯くて自由、進歩の兩黨は、共に二十一日を以て、各臨時大會を開きて解黨を斷行するに決せり。而して解黨の議案は、兩黨同一の文字にして、極めて簡易明裁なりき。

我黨は深く内外の形勢に鑑みる所あり。憲政の完成を期するが爲に、斷然茲に解黨し、同一の冀望を有する黨派を相合して、以て一大政黨を組織し、愈々其の目的を達することを努むべし。是に於て、新政黨は二十二日を以て、結成式を新富座に舉行せり。初め新政黨組織の議、粗ぼ熟するや、黨名に付、種々の説も出でしが、衆議終に「憲政黨」と稱するに決し、當日の結成式は、憲政黨の名に由りて舉行せられたり。此の日、片岡健吉氏推されて會長の席に就くや、平岡浩太郎氏は起て結黨式の辭を述べ、第一に宣言書を議し、次に綱領を議し、又た其の次に黨則を議し、悉く原案の如く可決せり。其の宣言及び綱領左の如し。

宣言書

憲法發布議會開設以來、將に十年ならんとす。而して此間解散は五回の多きに及び、憲政の實未だ全く擧らず。政黨の力未だ大に伸びず。是を以て藩閥の餘弊尙團結し爲に朝野の和協を破り、國勢の遲滯を致せり。是れ舉國忠愛の士の慨嘆する所なり。今や吾人は内外の形勢に鑑み、斷然自由進歩の兩黨を解き廣く同志を糾合して一大政黨を組織し、更始一新以て憲政の完成を期せんとす。因て茲に之を宣言す。

綱領

一 皇室を奉戴し、憲法を擁護すること。

- 一 政黨内閣を樹立し、閣臣の責任を嚴明にすること。
- 一 中央權の干渉を省き、自治制の發達を期すること。
- 一 國權を保全し、通商貿易を擴張すること。
- 一 財政の基礎を鞏固にし、歳計の權衡を保つこと。
- 一 内外經濟共通の道を開き、産業を振作すること。
- 一 陸海軍は國勢に應じ、適當の設備を爲すこと。
- 一 運輸交通の機關を速成完備すること。
- 一 教育を普及し、科學を奨勵すること。

議事終るや、會長片岡氏は、左の四氏を憲政黨の總務委員に推薦し、之を滿場に諮りしに、滿場拍手して之を迎へたり。

大東 義 徹

尾崎 行 雄

松田 正 久

林 有 造

片岡氏は更に報告して曰く「伯爵大隈重信、伯爵板垣退助の兩君は本日を以て、憲政黨に加入し將來滿腔の赤誠を以て、我黨の爲に盡力せらるゝ旨誓告せられたり」と。最後に、片岡氏は左の五名を幹事に指名して散會したり。

箕浦 勝 人

栗原 亮 一

竹内 正 志

伊藤 大 八

隆 旗 元 太 郎

當日出席せる會員の總數は約二千人と稱せらる。鳩山和夫氏創立委員を代表して演説せり。其の中に云へるあり。

我々が藩閥政府に對する其の方針は只二つあるのみ。其の一は我黨の組織に付て、彼等は但た衷心落膽必ず城を明けて逃走せん。我黨其の空處に入りて之を占領せんなり。其の一は政府若し拒て柔順に城を明渡さずんば、我黨は強硬なる手段を取りて、之を奪取せんのみ。

自由黨と改進黨とは、第一議會に對しては聯合して山縣内閣に當れり。第二議會、第三議會に對しても、其の聯合を緊密にし、以て松方内閣を攻撃せり。第四議會に於ても、兩黨は聯合の歩武を整ひ、伊藤内閣に對せり。然るに、大詔渙發、局面一變の後に至り、自由黨は始めて改進黨と其の提携を絶ち、是れより改進黨は六派聯合の下に政府攻撃の運動を執りしも、之に反して自由黨は孤立の位置に立てり。明治廿七年、征清の役興るに及びて、各政黨は擧げて政府の後援と爲り、一時政争跡を絶つに至りしも、戦後、自由黨は伊藤内閣と提携し、以て第九議會に及べり。伊藤内閣倒れて松方内閣の組織せらるゝや、進歩黨は之と提携して第十議會を終へりと雖も、忽ち又相反目し、第十一議會は、自由進歩兩政黨相聯合して松方内閣に肉薄し、議會は解散せられ、松方内閣は倒れ、伊藤内閣の再出を見るに至れり。伊藤内閣の増稅案を提げて第十二議會に臨むや、自由進歩の兩黨は期せずして之に反對し、伊藤内閣に對する攻撃聯盟は其の間に成立せり。而かも兩黨は從來其の歴史に於て、其の感情に於て、殆んど融和すべきものなきを以て、政策上に於ける一時的聯合は屢ば繰返されつゝありしに拘らず、其の歴史と感情とを一擲し、各其の黨を解き、之をして合同の實を擧げしむるは、至難の業と謂はざるを得ず。然るに、今や兩黨の領袖が快よく舊來の感情を一洗し、各其の黨を解きて、憲政黨の組織を見るに至りしは

大勢の然らしむるものにして、區々たる人力の及ぶ所にあらざるも、當時身を局外の地に置き、自由進歩兩黨の人士に舊好ありし平岡浩太郎氏等起て其の機會を攫み、兩黨合同の唱首と爲りしもの、與りて力ありとす。平岡氏に亞きて其の合同に力ありしものを擧ぐれば、河野廣中、杉田定一、楠本正隆氏等數人を推さざるを得ず。

三 御前會議に於ける伊藤首相の辭意

伊藤内閣は議會を解散せるも、固より一定の成算ありて議會を解散したるにあらず。自由進歩兩黨は益々其聯合を緊密にし、天下の勢は兩黨合同の方嚮に向て一大轉進したり。伊藤首相は、此の形勢の趨く所を察し、深慮熟慮して、民黨に對する新興黨を組織するの必要を痛感せり。彼は實に第十二議會の結果に徴し、憲政の眞諦は、政黨主義の勝敗如何に在ることを痛切に體驗したればなり。

伊藤首相は一日閣議を終りし後ち、新政黨組織案を以て之を閣僚に謀れり。閣僚中、當時自由黨提携に反對を表せし井上藏相の如きは、案外にも自ら率先して、新政黨組織の議に賛成し、進みて實業家に説き、資金の調達を圖らんことを誓ひたり。然れども、山縣系に屬せる桂陸相其の他の閣僚の多くは、伊藤の議に反對せり。但し彼等が之に反對したるは、必ずしも一概に新政黨組織を否認したるにあらず。今日の場合に於て首相の政黨を組織するは、時機尙ほ早しと云ふに在りしなり。氏等は又た假令へ新政黨を組織するも、到底時局の急を匡救すること能はざるべしと信じたればなり。伊藤首相は耳を之に傾けず、資本家階級及び知識階級を網羅せる新政黨を組織せんことを期し、窃に計畫する所ありしが、彼等は逡巡して之に應ぜず、其の計畫は空しく畫餅に歸したり。嘗に畫餅に歸したるのみならず、反て之れが爲に反對黨の氣焰を昂上せしむるの結果と爲れり。而して憲政黨は其の間に結黨式を擧げ、伊藤内閣に對して、

一大脅威を與へたり。

伊藤首相は、新政黨の計畫既に頓挫し、反對黨の勢力、殆んど天下を風靡せんとするの概あるを目撃し、解散當時の決心既に一變し、此上は冠を掛けて野に下り、斷然新政黨を組織するの外なしと爲し、一日桂陸相に此の志あるを語り。而して桂は伊藤侯の政黨組織尙ほ早きを論じ、首相をして飽迄も内閣に踏み止ましめんとせり。氏は伊藤侯に告げて「戦後經營は今ま尙ほ中途に在り。而して此の經營は必ず之を成就せしめざる可からず。今日の場合、予が進化主義の素論は姑く置き、進みて元老一致の内閣を組織し、其の目的を貫徹せしめざる可からず。若し公にして其の任に當ることを肯んせざれば、他の元老をして之に代らしむべし。蓋し戦後經營は必ず行はざる可からざればなり」と。然れども伊藤首相は、桂陸相と反對の方轡を執り、飽くまでも野に下りて新政黨を組織するに決心せり。勿論、伊藤侯の新政黨計畫は、必ずしも今日に始まりたるにあらざるも、彼は形勢の益々急なるを見て、之を今日に實行せんとせしなり。桂公の自叙傳に、其の間の消息を語りて左の如く云へり。

伊藤内閣の當に爲さざるべからざる所ものは第一に松方内閣が解散を斷行して辭職したるを以て臨時選舉を行ふ事。之に次で解散後の議會を召集する事。又戦後經營の財政上の整理を爲す事。斯く重き責務を有せり。而して總選舉を終りて其年の五月議會を召集せり。此の年の豫算に於て戦後經營の不足を補はん爲め地租増徴の議案を提出せり。然るに、衆議院に於て増租問題に就て甚だ不良の結果を見たり。他の問題は次第に解決し、進捗するにも拘はらず、増租に於て反抗をうけ、遂に大多數を以て否決しければ、内閣は已むを得ず解散を上奏し、衆議院は解散を命ぜられたり。

議院を解散すると同時に、内閣を繼續する決心無くばあるべからざるものなり。固より解散當時に於ける伊藤侯の決心は更に總選舉

をなし、再び増稅案を新議會に提出して之を通過せしめんとするに在りしを疑はず。又我々も固より同様の決心なりし。然れども、當時の形態を以て觀れば、到底二三回の解散を賭するに非れば、増租の目的を達する能はざることは明かなりしなり。然るに伊藤侯は中途にして大に氣勢を替へ、前途甚だ覺束なしと思惟したりと見え、其年の六月下旬に於て辭職の意を洩らせり。是に就ては總選舉の後自由進歩兩黨合同し、憲政黨と改めたる事の如き、最も侯が辭職の決心を促がせしものなるべし。我は侯が辭職は甚だ不可なりと思考せり。何となれば一方に於ては戦後經營の業尙半ばに在り。而して此の經營は必ず之を成就せしめざるべからざるものなり。故に我は以爲らく此の場合に於ては、進化主義の素論を一轉して、元老一致の内閣を組織してなりとも、伊藤侯をして素志を貫かしめんことを望む。又伊藤侯が強て其任に當るを得ずといふならば、他の元老をして之に代りて内閣を組織せしむるとも、是非戦後經營を完全ならしめざるべからず。是れ已を得ざる事なりと云ふに在り。

伊藤首相は、桂子等の意見に従ひ、其の職に踏み止まりて、反對黨に抗し、再三議會を解散するとも、徒に朝野の軋轢をして、益々劇烈ならしむるのみにて、憲政の進歩に何等裨益する所なきを察知したり。是に於て彼は野に下りて新政黨を組織し敵黨と戦ふは、大丈夫の事にして、而かも政治家としての本分なりと信じ、其の決心を固うし、之を元老に謀るに決心せり。二十四日、宮中御座の間近くに於て、伊藤首相は、山縣、黒田、西郷、大山、井上氏等の各元老に對して、其の素志の在る所を告げ、自ら冠を掛けて野に下り斷然素志を遂行せんとするの決心を語り、元老の一人代りて内閣を組織し、刻下の政局を擔任せんことを提議せり。山縣元老等は固より伊藤首相の計畫を知りしかば、其の説を聞き、敢て甚だ之を意外とせざりしも、元老多數の意見は、今日直に此の計畫を遂行せんとするを不可とせり。其の中には、又た伊藤首相が、新政黨を組織し、内閣を政黨の上に置き、所謂政黨内閣の端を啓くは、日本の國體に悖

り、帝國憲法の精神に反するの太甚しきものなりとまで極論し、議會の再三解散論即ち憲法中止論とも云ふべき極端に失する議論もありと傳へられたり。

伊藤首相は憲法上の非難に對しては、之を反駁して、政黨内閣の必ずしも憲法の精神に違反せる所以を辯破するに努めたるも、山縣侯等の論は、首相の政黨組織に反對せり。而して伊藤首相は各元老が政黨組織に反對するも、而かも自ら起て之に代らんとするの決心を有するものなく、徒に己れの行動を掣肘するを憤り、自ら大隈、板垣の兩伯を推薦して、内閣組織を之に託せんとするの意を漏らし、決然席を蹴て去り、閣下に伏して、御前會議を開き、後圖を議せしめられんことを奏上し、翌廿五日辭表を草し、併せて其の勳位顯爵をも辭せんことを請ひたり。其の表文左の如し。

謹奏。臣博文荷聖恩。屢奉重任。孜孜圖報効。而事與志違。是臣疎才之所致。恐懼曷勝。若猶滯戶位。塞賢賢路。恐忤聖鑑。茲謹奉表以。辭補袞之職。併乞奉還勳位顯爵。伏願 皇上陛下曲垂哀憐。速賜聖允。臣不勝恐懼屏營之至。誠恐頓首再拜。

此日伊藤首相を除き、各元老正式に御前會議を開くや、各元老は遂に伊藤侯の意見たる大隈板垣の兩首領を推薦するの外、他策なきを認め、此旨を覆奏せり。是に於て井上藏相を始めとし、各國務大臣亦た皆辭表を捧呈せり。桂公の自叙傳に、御前會議の模様を語りて曰く。

然るに、伊藤侯は二十四日を以て御前會議を開くことを奏請し、前途の事を決せんとの希望を述べ、同日を以て御前會議を開かんとす。其の前日の事なりき、山縣侯は我が陸軍大臣の官舎を來訪せり。次で井上大藏大臣も來り、談内閣前途の問題に及び、直ちに西郷海軍大臣をこの席に招き、四人相對して談論時を移しけり。此に於て、我は左の如き意見を陳べたり。曰く

「戦後經營の必要は、言を待たざる所なり。又伊藤首相の決心は頗る遺憾なりと思へば、第一には宜しく決心して此のまゝ進行すべし。若し然る能はずとすれば、第二の策を執り、元老悉く出て内閣を組織すべし。其の場合には、我は本官を退きて陸軍次官の位置に下り、大山大將を陸軍大臣とすべし。各元老は長官とし、少壯者は悉く次官となりて、其衝に當らば、民黨敢て畏るゝに足らざるべし。此の如くしてなりとも、戦後經營は成就せざるべからず。然る上は幾回反抗を受くとも幾回も解散を行ひ、結局は從憲法を中止してなりとも、戦後經營は忽略に付し去る能はざるなり」と。然れども、議決著に及ばずして散す。明る廿四日、諸元老御前會議を開き、其結果は遺憾ながら我希望の如くなる能はずして、遂に伊藤侯の意見たる自由進歩兩黨合併したるに就ては、大隈板垣兩首領をして次の内閣を組織せしむべし。即ち政黨に内閣を明渡すべしとの議勝を制したる有様にて、伊藤内閣は直ちに辭職し、我も同じく辭表を呈せり。

伊藤侯は、憲政實施以來、内閣の首班として、内閣を組織すること二回。而して我が超然主義を唱へて、政治家としての責任を藐視し同一問題を以て議會解散を濫行したるが如き。適ま議會の彈劾に遇へば、詔勅政策を利用して、一時を糊塗するに汲々たるが如きは、遺憾ながら立憲政治家として彼に許すこと能はず。否な憲法起草に與りたる彼の功は、憲政運用上に於ける彼の罪を償ふこと能はざるものあり。然れども、第十二議會の末路に際し、彼は輿論の包圍攻撃を受け、政黨内閣の憲政運用に己むべからざるを體驗し、其職を辭せんとするに臨み、各元老の反對に關せず、反對黨の首領たる大隈板垣の兩伯を後繼内閣の首班に推薦したる一事に至りては、光明正大なる行動にして、確かに立憲政治家としての本領を發揮したるものと謂ふべし。

藩閥政治家が政府を私有し、政權を壟斷し、薩長以外の人物をして、政權の分配に與からざりしもの、一朝一夕の故ならず。而して

伊藤侯が藩閥の巨頭を以て、其の舊套を脱出し、反對黨の首領を其の後任に推薦し、政黨内閣の端を啓くに至りたるは、裏面に於て種々の原因ありしに相違無しと雖も、其の進退去就の磊々落落たること、日月の皎然たるが如く、但だ此の一事を以て彼が從來爲し來れる非立憲的行爲の罪を償ひて餘りありと謂ふも過言にあらず。

四 憲政黨内閣の組織

伊藤首相其の職を辭するや、伯爵大隈重信、伯爵板垣退助、内閣組織の大命を拜し、閣員の銓衡全く成り、其の親任式は六月三十日を以て舉行せられたり。其の閣員左の如し。

内閣總理大臣兼外務大臣	伯爵 大隈重信
内務大臣	伯爵 板垣退助
農商務大臣	大石 正己
文部大臣	尾崎 行雄
大藏大臣	松田 正久
司法大臣	大東 義徹
逓信大臣	林 有造
海軍大臣(留任)	侯爵 西郷從道

陸軍大臣(留任)

子爵 桂 太郎

又た内閣書記官長、法制局長官及び次官以下の新任者は皆黨出身者より之を拔擢せり。

内閣書記官長	武富 時敏
法制局長官兼内閣恩給局長	神 鞭 知常
内務次官	鈴木 充美
司法次官	山田 喜之助
逓信次官	箕浦 勝人
農商務次官	柴 四 朗
文部次官	柏田 盛文
外務次官	鳩山 和夫
大藏次官	添田 壽一
警視總監	西山 志澄

廿五日、伊藤首相辭表を捧呈するや、其の夜伊藤首相は急使を大隈板垣兩伯の許に遣はし、其の來邸を求め、二人の來るや、伊藤首相は辭職の顛末を告げ、且つ謂て曰く「大命卿等に降らば大命を拜受して内閣を組織せんことを望む」と。二人事倉卒にして、直に即答し難きを以て、二人協議の上、回答すべき旨を告げて去れり。

大隈板垣の兩伯首相官邸を辭するや、共に帝國「ホテル」に至り、内閣組織の事を議せしが自由派より閣臣の人選に關し、均勢論を提出し、内務大藏選信の外に、外務の椅子を得んと望みたり。時に大隈伯は、外務に就ては深く思ふ所ありて之を斥けしかば、板垣伯に争ひ、一時議論沸騰し、内閣組織も亦將に頓挫せんとするの色を呈せり。時に平岡浩太郎氏、大石正己氏、總務委員の人々と共に席に在りしが、調停案を提出し、結局大隈伯は首相を以て外務大臣を兼ね、板垣伯は内務大臣に、農商務、文部、大藏、司法、選信は總務委員の尾崎、松田、大東、林の四氏と大石氏とを以て之に任ずるに決し、人物銓衡如何は之を顧みるに迫らず、愈々新内閣組織の任に當るに決せり。

但し文官閣員の銓衡は漸く定まりしも、陸海軍大臣の銓衡に至りては、最も至難の問題なりき。是に於て大隈伯は伊藤侯に諮る所あり。伊藤侯は之を諒とし、其の間に斡旋するあり。終に勅命に由り、西郷海相桂陸相に對して、留任の御沙汰あらせられ、二人の留任に由りて、始めて内閣の組織成るを告げたり。桂は其の自叙傳に於て、其の間の消息を左の如く語れり。

爾後、大命は大隈板垣二伯に下りて、内閣を組織せしめらる、大隈伯は固より宿昔の志望なるべし、又自由進歩の大政黨合同し、其の兩首領が内閣を組織せざるを得ざる理も非ざれば直ちに組織に著手しけれども、陸海軍大臣の候補者には、頗る當感せり。又自由黨は會て軍備擴張を主張し、進歩黨は軍備縮小を唱道す。兩黨間にすら相衝突する所の大問題なれば、容易ならざると同時に、兩大臣の候補者に困却せしは事實なり。故に大隈伯は伊藤侯に語りて「陸海軍だけは某には如何ともし難し」といひしと聞けり。實際大隈伯は漸次に爲す所あらんと欲し、偶々兩黨が増租問題に反對する趨勢に乗じ、政府に向て反抗を取らしむるとはいひながら、其の性質を異にする所の氷炭相容れざる二黨を將來に調和する事水魚の如くして進行せしむること難く、又た伊藤侯も斯く速に内閣を議

るべしと思はざりしは事實なるべし。此の場合に突然内閣を組織せざれば宿昔の志望を達し難く、さりとて急遽に内閣を明渡されたるを以て、内部は甚だ混雜なりしが如し。而して陸海軍にも聊か準備無きにしも非ざりしならん。良しや準備として二三の氣脈を通じてし人ありしにもせよ、到底其等を以て組織すべきにあらず。大隈伯は已を得ず陸海軍の要求をば何事も承諾してなりとも、此際一旦内閣を組織すべしとの趨勢上より引請たるに止りて固より組織の當時より永續すべきに非ざるを知るべし。然るに數年來政府と政黨とは軋轢の歴史を積み、松方内閣に於て一旦聯合政府を作りしことあるのみ。此の結果は如何と云ふに彼等政黨の分配により各大臣の候補を選定したるが、陸海軍だけは組織する能はずと定りたり。

長こきあたりに於かせられては、國の基礎とすべき重大の任務、殊に戦後經營の半ばに在る者を經驗無き者に明渡すといふことに大御心を惱ませられしは、恐懼の至りに堪へざる事どもなり。故を以て寂慮は左の如く定まり、陸海軍は陛下の特に組織あらせらるゝこと、現在大臣留任することゝなり、内閣組織成りて將に親任式を行はれんとする期に迫り、我と西郷侯の兩人を召され、留任の御沙汰あり。陸海軍は陛下下に組織遊され、依て特に留任せよとの勅命を下されたり。

留任の御沙汰を受けたるに就て、自餘の組織は既に成れるを以て、將に親任式の行はれんとする前に於て大隈板垣二伯に面會し、將來陸海軍に對する新内閣の方針を定め置くの必要を見たるを以て、西郷海軍大臣に此を謀りて、大隈伯に通じ、一日宮中に於て面會することゝし、内大臣の詰所に於て、大隈板垣二伯と西郷と我と、内大臣侍從職幹事居合の席に會合せり。先づ我は大隈伯に向ひて、今般大命をうけて内閣を組織せらるゝに就き、陸海軍は、特に陛下の組織遊さるゝ事にして、我等兩人は留任の勅命を蒙むれり。然るに、此大命は將來内閣總理大臣の方針、即ち新内閣の方針如何に依り、我等が留任と否とを決して奏上せざるべからず。若し新

内閣と方針を異にすれば、陛下に對し奉りて、我等が職責を盡すこと能はず、故に親任式の未だ行はれざる前に面會を求めたり。抑も大隈伯の率ゐらるる政黨が從來執る所の方針は軍備縮小なり。又新總理大臣としては如何なる方針を執らるゝや、先以て承り置かん。此の新内閣に在て我等は異分子より入て内閣に列するものなれば、前以て篤と決定し置かざるべからず。此の時板垣伯は深刻の言なりといふ。大隈伯答て曰く「今迄の施設に於て必要なるものは無論之を爲さざるべからざることと思ふ」我曰く「善し然らば軍備縮小の方針にはあらず。必要なるものは施設する決心なりや」曰く「然り」我曰く「然らば戦後經營上未だ完備せざるものあり。例へば北海道の警備の如きは是なり。又戦後經營に就て闕損の費用を補充すること。是等は勿論、同意せらるべきか」是また「然り」と答ふ「然らば初めて留任の御請を爲すことを得べし、細目に至りては、漸次協議すべし」といふ。是に於て、軍備上一點指を染めざらしむることだけは、定め果はれり。而して親任式を行はれ、其翌日を以て隈板内閣は成立したり。亦以て當時隈板内閣が如何に軍部大臣の銓衡問題に苦心を費し、如何に藩閥勢力の根底深かりし乎を知るに足るべし。

五 隈板内閣の行政整理

政黨内閣の組織は、憲政實施以來、破天荒の事業にして、確かに新時代を劃したるものなりき。憲政黨の領袖並に當局者にして、慮此に及ばず、全黨一致、改革の大導師と爲り、藩閥政府の積弊を打破し、進みて更始一新の大經綸を施し、時代の要求に應ずることを期すべきなり。少なくとも、維新當初の志士が王政復古の業を興し、明治の新天地を開拓したるが如く、政黨内閣の特色を發揮せざる可からざりしなり。然れども當時其の實際を察すれば、多年藩閥政治家の扶植したる勢力、各省の間に蟠結し、最大多數黨の力を以て

するも一時に之を打破する能はず。加ふるに憲政黨の内部に於ける權力競争の端緒、早く既に内閣組織の初めに胚胎し、竟に時代の進運と國民の要求とに應ずる經綸の見るべきものなかりしは、洵に遺憾とせざるを得ず。但だ此の内閣の實現に由りて、門戸を開放して政黨より人才を拔擢し、政權移動の端緒を啓くに至りしは特筆すべきことなり。

大隈首相は、内閣組織の初め、地方官會議を召集し、地方官に對して、訓示演説を試み、新内閣の超然内閣と異なる所以と、政務官と事務官との區別を明にしたり。

今回の内閣更迭は之を過去の政變に比し、大に意味を異にするものあり。從來の内閣は閣臣として政黨員たる事を許さざりしが、之れに反して現内閣殆んど純然たる政黨員より組織するものなれば、此際世人の感を惹起することなきやう注意を要す。而して時世の進歩は我國をして政黨内閣の組織を促せる者なれば、上下意を一にして國務を執掌せんには、此内閣は將來好望の者たるべし。尙ほ政黨内閣たる以上は、政務官は吾人と同志なる政黨員を擧ぐべきも事務官は政務官と其責務を異にする者なれば、明かに其區別を立て無用の交迭を行ひ事務の澁滯を生ずる等の事を避け事務官にして上官の命を奉せず政務の妨げを爲さざる限りは敢て交迭等のことをなさざるべし。

又議員の選舉は、立憲政體の骨髄にして、至重至大の事なれば、最も公平なる方法を採用すべし。縣治上の事に關しては、年々事務の擴張と共に經費の増加を要すること、當然なるを認むれど、事務擴張に伴ふて才能ある官吏を擧げ、冗員を淘汰せば、行政機關の發達を充分ならしむるを得べし。繁文褥禮を省くことは刻下の必要なれば、之れを實行する方針なるが、以上何れも重大なることなれば、内相等と協議して著々從事せんと欲す。諸君に於ても此意を諒せられるべし。

憲政黨内閣は新に臨時政務調査局を設置し、内務大臣板垣退助委員長と爲り、黨出身の内閣書記官長、法制局長官、及び次官局長皆其の委員と爲り、行政整理の調査に著手せしが、自由進歩兩派の意見拮据して調査意の如くならず。數ヶ月の後ち、漸く其の成案を作り、屢ば修正を加へて裁可を得、十月二十二日之を公布するに至れり。其の結果、官吏定員を減すること四千五百二十二名。俸給を減すること七十四萬圓に過ぎず。而して陸海兩省に對して、殆んど一指を染むること能はざりき。

大隈首相は、改正官制の公布と同時に、官治の標準十箇條を擧て訓示する所ありたり。

- (一) 官制の防範を嚴にすること。
- (二) 事務官の進退を重んずること。
- (三) 職責を明にすること。
- (四) 俸給制を完備せしむること。
- (五) 下僚の俸給を厚うすること。
- (六) 定員を減すること。
- (七) 特別官職を廢すること。
- (八) 官紀を振肅すること。
- (九) 經費を節省すること。
- (十) 事務を敏活にすること。

此等の訓示亦最も必要缺くべからざるは論を俟たざるも、國民の要求輿論の冀望は、斯る枝葉末節の官制改革にあらずして、行政制度を根本的に改革し、藩閥政治の積弊を打破せんとするに在りしなり。

六 臨時總選舉後の結果

憲政黨内閣組織の後ち、七月七日、第六回衆議院議員臨時總選舉の詔勅を發し、八月十日、總選舉を舉行せられたり。

政府は選舉取締に關する緊急勅令を發布し、伊藤内閣が前回の總選舉に際し、發布したる緊急勅令を廢止し、暴行、脅迫、賄賂、變態等一切の誘惑束縛を禁止し、一々之に制裁を加へ、必ず之を厲行して、以て選舉に關する從來の積弊を矯めんことを期し、以て、此の選舉は比較的公正に、比較的平穩の間に行はれたり。勿論、自由進歩の兩系各其の地盤を異にせるより其の競争劇烈を極めたる地方尠なからざりしと雖も、兩派は一黨と爲り、其の黨は選舉の方針として、自黨所屬の前代議士を再選すべきことを議決し、其の黨員の同一選舉區内に於て、駢ひ立つことを避くることに努めたるを以て、比較的同志競争の弊を除くことを得たり。總選舉の結果を掲ぐれば、左の如し。

憲政黨	二六〇名
自由黨系	九五名
進歩黨系	一一〇名
憲政反對派	四〇名

國民協會
無所屬議員

二〇名
二〇名

其の後、憲政黨分裂するに及び、其の數に異同を生じ、憲政黨は百十名、憲政本黨は百二十三名、其の勢殆んど五角の間に在りしが、當時に在りては議員總數八分以上の絶對的多數を議會に占むることを得たるを以て、全黨一致の行動を執るに於ては、貴族院は姑く置き衆議院は意の如くならざるはなく、斯る優勢なる位置を占めながら、其の手腕と經綸を實際に施すに及ばずして、早く既に内訌のため其の分裂を見るに至りたるは、隈板兩黨首の爲に、將た憲政の爲に痛嘆禁じ得ざる所なり。

七 外務大臣專任と兩黨の衝突

憲政黨内閣は、一面には行政整理に著手し、他面には豫算編成に従事し、其の成案（増稅案）を得て閣議を通過し、第十三議會を迎へんとするに際し、端なくも閣員均勢問題を動機として、閣議分裂の端を啓くに至れり。

是より先に、憲政黨内閣は、官職を分ちて政務と事務の二と爲し、政務官は、政黨員より之を擧げ、内閣員と共に其の進退を同するものと定めたるも、自由、進歩の兩派、内閣組織の初めより權力競争を事とし、互に自派の人物を以て行政各部を占領するに汲々とし、黨員自ら薦めて官職を求むるもの、陸續踵を接し、一官にして數人若くは十數人之を争ふの醜態を演じ、黨務と政務とは混同し、官紀蕩然地を拂ひ、彼等の眼中、黨派ありて國家なく、宣言訓示は一篇の空文と爲りて、一も實行せられざりき。是を以て最初政黨内閣を歓迎したる同志の士も慄然として言ふ所を知らず、現内閣は第一著に獵官運動によりて、鼎の輕重を問はれたり。

此の時に當り、閣員均勢問題は自由派によりて提起せられたり。初め大隈首相が外務大臣に兼任したるは全く一時の兼任にして、當時露國大公キリル、ウジミロウキチの來朝せるを以て、其の接待上、首相自ら之を兼任することゝ爲りしなり。左れば、板垣伯は露國太公の接待終るを俟て、大隈首相の外相兼任を辭せんことを要求し、其の後任として、伊東已代治氏及び星亨氏を推薦せんとせり。而かも大隈首相は毫も其の兼任を辭せんとするの色なかりき。此の間に於て自由派の星亨氏が、本國政府の命令を待たず、突如として歸朝したるは、是れ恰も爆彈を黨争の渦中に投じたるが如き觀あり。是より先に、星氏は明治廿九年四月、米國駐劄全權公使に任ぜられ、華盛頓に駐劄せしが、此に至り、故國の風雲を望みて歸朝の電報を外務省に發し、其の儀、直に旅裝を整ひ、外務省より「歸朝相成らず」と云へる急電を發したるに拘らず、彼は其の電報を開封だもせず、歸途に上り、其の横濱に上陸するや、其の出迎に來りし外務省の官人に對し「桑港に於て、乗船の際接手せしも、未だ披見せざりし」とて、其の面前に於て其の電報を開封し、出迎人をして噤然たらしめたり。彼は鬪志を齎らして歸朝したるなり。

閣員の役割より云へば、文部尾崎行雄、司法大東義徳、農商務大石正己の三大臣は進歩派之を占め、大隈伯は内閣總理大臣として、外務大臣を兼ねしを以て、總計五個の椅子は、進歩派之を占領せるも、自由派は内務板垣退助、大藏松田正久、逓信林有造の三椅子を占むるに過ぎず。勿論内務と云ひ、大藏と云ひ、其の重要な位置は自由派の占領する所なりしが、自由派は其の數に於て進歩派に讓る所あるを以て、閣議に於て、常に進歩派の爲に壓せらるゝを免れざりき。加ふるに、當時自由派の内情を察するに、九州、土佐、關東の三地方鼎立して各其の勢力を占めつゝありしが、現内閣に於て、土佐派は板垣、林の二大臣を出したりしに拘らず、關東派は一人の大臣をも出さざりしを以て、彼等は此の機に乗じて星氏を擁し、大隈伯の外相兼任を解き、星氏をして外務大臣たらしめんとし、板